

54号

# 愛鳥教育

1998.7



全国愛鳥教育研究会



## 愛鳥教育 No.54 1998.7

### 目 次

巻頭言			
こどもエコクラブに思う ----- 江袋島吉	3	書籍紹介	
冬期研修会報告		『水鳥のための	
霧ヶ峰八島が原湿原の自然観察 - 堤 達俊	4	油汚染救護マニュアル』 ---- 箕輪多津男	68
愛研冬期研修会に参加して ----- 大橋佑介	5	もりまき通信(4)	
特集		朱鷺と棚田のつながり ----- 森 真希	70
特集 宿泊型「自然教室」 ----- 平田寛重	6	論説	
林間学校を見直す ----- 一寸木 肇	8	宿泊型自然教室の在り方 ----- 平田寛重	72
宿泊学習での自然を生かした		平成9年度 収支決算報告 ----- 箕輪多津男	73
夜間プログラムの実践 ----- 堤 達俊	16	平成9年度 事業報告 ----- 箕輪多津男	74
自然と触れ合う長期移動教室 ---- 長屋昌治	22	夏期研修会案内	
(財)日本鳥類保護連盟の		谷津干潟で野鳥観察会 ----- 事務局	75
環境教育事業 ----- 百武 充・城田 慶	25	追悼	
丹沢自然保護協会森の学校から - 岩崎優子	29	渡り鳥となって“天の川”を	
君も自然案内人になれますか！ - 川手隆生	33	渡る 柳沢信雄 先生 ----- 杉浦嘉雄	77
「武蔵野自然クラブ」の		柳沢信雄先生の思い出 ----- 戸津高保	78
流れと動き ----- 須田孫七	38	柳沢信雄先生を悼む ----- 水崎 満	78
高砂エコクラブ ----- 福岡清治郎	44	西村健一先生を悼んで ----- 事務局	79
大分県主催「久住高原エコロジー		編集後記 -----	79
キャンプ」の中間報告 ----- 杉浦嘉雄	57	愛鳥クイズ ----- 平田寛重	80

## 巻頭言

## こどもエコクラブに思う

—実績発表大会より—

会長 江袋島吉

◇“こどもエコクラブ”実績発表大会に初出場  
平成9年度の“全国野生生物保護実績発表大会”（中央大会）の特色の一つは、近年台頭の著しい“こどもエコクラブ”（以下エコクラブ）が、初めて中央大会に出場したことである。クラブ名はM県Y町の“H”クラブで、その概要は次の通り。

## 1. はじめに ～ 地域の特色

町全体が海浜自然環境・緑地環境保全地域に指定され、西側には山や丘陵が続き、中央平地は水田が開けているが、大きな河川は無く溜池が多い。東側の海岸沿いの砂地は畑となっている。雪は少なく温暖で、渡り鳥の越冬地に適している。

## 2. 調査内容 ～ 主に第2・第4土曜日

(1)平成7年度 ～ 結成年度、小学生15名

○夏休み ～ 川遊び、魚とり

「いつまでも魚が泳いでいる川にしよう。」との発議が活動の原動力となる。

○冬休み ～ 脱穀後のわらの利用研究

・わら打ち ・縄ない ・しめ縄作り

※特別賞を受賞、エコクラブ全国大会に出場。

(2)平成8年度 ～ 里山（西側）の四季を観察

・A山地の地勢推察 ・里山の歴史探究  
・観察カードに記録 ・お年寄りの話を聞く  
・民話の研究 ・樹木のラベル取り付け  
・巣箱 作りと架設 ・紙芝居作成  
・記録の整理 ・森を見直し、自然保護に関心を呼びかけ

(3)平成9年度 ～ 前年度の成果の活用と補完

・紙芝居の披露、貸し出し ・町民の意識調査  
・伊豆沼見学 ・探鳥会、野鳥の生態観察

## 3. 終わりに ～ 学校の違う地域の児童で編成

・自然の大切さを体で感じ取る ・都市化を防ぎ自然環境の保全・改善の活動へ指向

以上であるが、特に印象的だったのは、

①学校、先生から離れ、のびのびとした児童の姿

②サポーター（母親1名）の児童管理

③学習課題の考案と指導過程（マニュアル）

などだが、サポーターの存在が重要な意義を持ち、現職・退職の教師も多いと聞く。来年度以降、どんなエコクラブが出てくるか楽しみにしている。

◇“こどもエコクラブ”（JEC）について

“こどもエコクラブ”は、環境庁（環境保全推進室）が創設したもので、概要は次の通りである。

## 1. 目的

子ども達の将来にわたる環境の保全への高い意識を醸成し、21世紀に向けて負荷の少ない持続可能な社会を構築するため、仲間と共に主体的に地域環境・地球環境に関する学習や具体的な取り組み・活動が展開できるように支援する。

## 2. 活動内容

(1)各クラブの自主的な活動（エコロジカル・アクション）～メンバーの興味・関心に基づき、自ら活動内容を決めて自主的に活動する。

(2)全国のクラブの共通的な活動（エコロジカル・トレーニング）～自主的活動をより楽しく、豊かにするために、事務局がデザインした全国のクラブの共通の学習活動

## 3. 参加・登録方法 ～ 登録期間1年間

(1)小・中学生の数人から約20人の仲間組織。各クラブに、応援するサポーター（大人1人以上）を置く。現在会員数 約55,000人。

(2)各クラブは原則として、各市町村に設置する事務局に名称・構成員などを登録し、各都道府県の事務局を経由して、（財）日本環境協会に設置する全国事務局が全国の名簿等を整備する。

(3)登録されたクラブには会員手帳、会員バッジ、JECニュースが市区町村を経由して送られる。

(4)賠償責任保険に加入している。

## 4. 全国事務局・地方事務局

(1)全国事務局（前記） (2)都道府県事務局

(3)市町村事務局

## 5. “こどもエコクラブ全国フェスティバル”開催

○会員の交流と市民への普及啓発を図る。

## 6. 応援のための道具立て

(1)会員手帳 (2)バッジ (3)JECニュース

(4)サポーター・コーディネーター（自治体職員）ニュース

## 7. 市民団体・企業等の支援・協力活動の募集

## 8. 文部省・各教委・学校との連携・協力依頼

## 9. 活動事例集の発行、NTTホームページ開設

※さて、4年目のエコクラブはどんな姿で？



冬季研修会報告

# 霧ヶ峰八島が原湿原の自然観察

クロスカントリースキーを使って

常務理事 堤 達 俊

平成9年度冬季研修会を、平成10年2月28日～3月1日（1泊2日）、長野県八島湿原にて実施した。

今回の研修会の目玉は、雪上での自然観察である。冬の野鳥はもちろんのこと、雪の上に残された動物たちの足跡や食痕をクロスカントリースキー（以下XC）を用いて探してみよう（アニマルトラッキング）というものであった。講師には、霧ヶ峰の自然に詳しい地元の「霧ヶ峰自然観察指導員会」の3名の方々をお願いした。

まず、宿泊場所となる「鷺が峰ひゅって」に集合した後、すぐにXCの講習に入った。XCは初めてという人が何人かいたが、基本的な歩き方や滑り方を教えてもらい、2時間の講習後には、参加者全員がなんとかXCに慣れることができるようになった。

次いで、講師の一人でもあり、鷺が峰ひゅってのオーナーである田口さん手作りのおいしい夕食をいただいた後、スライド映写を交えながら霧ヶ峰の自然についての説明を受けた。八島湿原の四季折々の移り変わりがよくわかると共に、明日の自然観察に胸が躍った。

翌3月1日は、昨夜からの雪により新雪たっぷりの状態となった（今年はおよそ15年ぶりの大雪で、既に積雪は十分にあった）。朝食後、9:00より早速出発。

残念ながら動物の足跡のほとんどが新雪によって消されていた。しかし、木の枝が鋭い刃物で斜めにスパッと切られたようなノウサギの食痕や、カモシカによって痛々しいまでにむかれてしまった木の肌を十分に観察することができた。また、野鳥では、「フィッ、フィッ」と鳴き交わすウソのつがいを見ることができた。

講師の方々には、霧ヶ峰の自然全般について大変詳しく、植物と動物の関係や気象と植物の関係について、参加者に問いかけながらわかりやすく解説してくださった。そのため、厳しい自然の中で一生懸命生きている動植物の様子を十分に感じることができた。

15:00過ぎに「ひゅって」に戻り、窓の外のをえさに飛来するコガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラ、ハギマシコを見ながら感想を語り合った後、解散となった。

最近のアウトドアブームにより、XCが注目されることも多い。XCそのものを楽しむのも大変結構だが、今回のようにXCを目的としてではなく道具や手段として用いることは自然観察にとっても有効であることを再確認した。XCを用いて厳しい冬の中での生き物の生活をのぞいてみることを多くの方々に勧めたい。

今回の研修会では、霧ヶ峰自然観察指導員会の方々には大変お世話になった。深く感謝の意を表したい。

これからも有意義な研修会を企画していこうと考えている。会員の皆さんも奮ってご参加くださるようお願いしたい。また、研修会についてのご希望ご要望を事務局までお寄せいただければ幸いである。





## 愛研冬期研修会に参加して

一般参加 大橋 佑介

ぬくぬくとした部屋のガラス窓越しに、餌台に集まる鳥達を見ていると、雪深いこの厳冬期に餌にありつける喜びを感じているのだろうか。シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハギマシコ、コガラなどが次々と飛来しては私たちを楽しませてくれる。

今回、全国愛鳥教育研究会の主催で、雪の中の野鳥や動物達の生活を観察する会が催された。ここは奥霧ヶ峰、八島ヶ原湿原。日本の高層湿原の南限で、学術的にも貴重な湿原である。ピーナスラインを霧ヶ峰から美ヶ原に抜ける鷲ヶ峰の麓に位置する「鷲ヶ峰ひゅって」を宿として、湿原の周囲をクロスカントリースキーを使って地吹雪体験ツアーをしようという計画である。クロカンの上手な人、まあまな人、総勢11名が参加した。

宿の主人田口さん、霧ヶ峰自然観察指導員の伊藤さん、山川さんからクロカンスキーの手ほどきをいただいで、勇躍、厳冬期のフィールドへ出発。

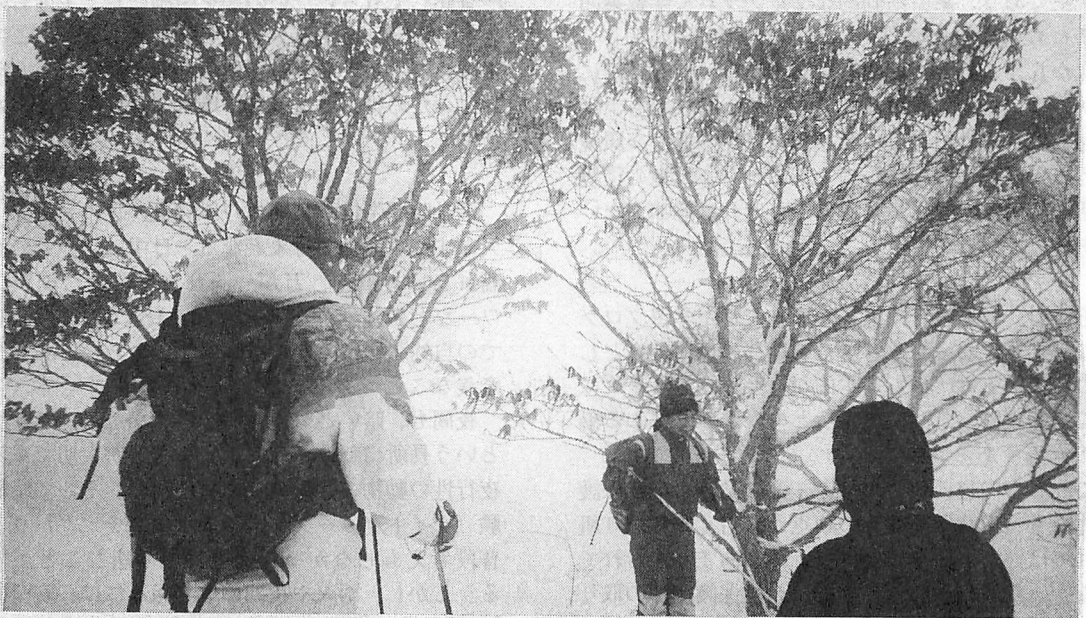
一面銀世界の中にも春を待っているたくさんの命がある。一生懸命に生きている動物達や、雪や氷の下で草や大木たちが、既に春の準備をしているのには驚かされる。冬の強い季節風で一方に変形したミズの枝にウソがいた。かなり近づいても逃げない。

胸元はピンク色で、しきりとその実をついばんでいる。カラムツの林の中で、アカゲラがあけた丸い穴が、私のへそのあたりの高さにあった。ずいぶん低い位置にあるなと思って考えた。そうだ、我々は1m以上もの雪の上にいることを忘れていた。ミズナラの枝に変な花がある。花ではなく虫瘤(ちゅうえい)だそう。昆虫が木の芽に卵を産み付けると、ホルモンの関係で花のような瘤のようなものができるという。

動物達は、この吹雪の中で穴ごもり。横なぐりの雪の中で動いているのは人間だけ。残念ながら動物達の足跡も見えない。しかし、明らかにノリウツギの枝を食いちぎったカモシカの足跡はある。私は木肌をかじってみたが、何の味もしない。冬の間は、動物にとっても植物にとっても、あるいは小鳥達にとっても厳しい世界だが、彼等がそれぞれにみんなつながり合って一生懸命生きているんだなと、つくづく感じさせられた。

私は、こうした会に参加したのは初めてだが、楽しい仲間とヒュッテの温かいもてなしと、しっかりした指導員に恵まれ、雪の中を、こけつ、まるびつ、またとない二日を過ごすことができた。

皆様、ありがとうございました。





特集

## 特集 宿泊型「自然教室」

常務理事 平田 寛重

今回は、野外で宿泊を伴って行う自然学習のプログラムについて考えてみたい。

いわゆる「自然教室」の名称にも、自然教室や林間学校など様々なものがあるが、従来、宿泊を伴った学習と言えばキャンプというイメージが強かった。それは、ボーイスカウトの流れを組む日本の野外教育の流れがあったからであろう。

宿泊学習と言っても、つい最近まではどの取り組みであっても、内容はほとんど似たようなものであった。昼間はハイキングや水遊び、午後になると自炊のしたくにとりかかってカレーライスを作り、夜はキャンプファイヤーを焚いて歌ったり踊ったりして騒ぎ、翌朝はラジオ体操をして食事を作って食べて掃除をして帰るといったパターンのものであったのではないと思う。学校教育の宿泊学習は、いわば体育会系のレクリエーション的な内容で行われていたと言ってよい。

学校教育で取り組む意味としては、特別活動の内容が主であり、集会活動的なプログラムで学級集団をまとめ、行事を盛り上げる目的があった。

しかし、このような内容であるなら、何も野外に出かけて行って学習するまでもなく、学校でも十分に対応できるのである。わざわざ自然の豊かな環境に行き行って学習に取り組むのであるから、現地の環境を活かした学習を工夫するのであれば意味がないであろう。

そこで、環境教育の考えを取り入れた学習プログラムが必要になってくる。この場合の環境教育としてのポイントは、最も基本的な自然体験をメインにした自然理解、そして、自然とのかかわりによる感性の充実である。

これらの内容については、一部の学校や自然保護団体でも、自然保護教育の観点から古くから取り組まれてはいたが、マイナーなためにあまり知られていなかった。しかし、最近では自然保護団体の取り

組みや社会教育では盛んになってきている。

内容的には、野鳥・植物・昆虫・水生生物・哺乳類・トラッキングなどの生物全般を対象とした自然観察、星や土壌や岩石等の無機物を対象とした自然観察、牛乳からのバター作り、植物や山菜の調理や試食、竹を材料にした箸作り、草木の根や葉などを材料にした染め物、アケビなどのツル植物を使ったかご作り、木の実を使ってのリース作りといった現地調達原材料によるクラフト作業、俳句や絵手紙や新聞などによる表現活動、炭焼きや枝打ち、草刈りや農作業などの労働体験活動、ロールプレイやディベートなどの話し合い活動などが考えられる。

この他、環境、スタッフの専門、参加者の年齢、規模などによって、さらにたくさんの活動内容が考えられるが、自然とのかかわりを深めるためには自然体験活動を主に据えることが重要である。

出向く環境は、山・川・島など多岐に渡る。予算や交通の便、物資の搬入や宿泊施設、主催の趣旨などによって選択されることになるが、参加者に何を一番感じてもらいたいのかを明確にし、主催者の意志をしっかりと反映させたいものである。そこに宿泊施設があるからそれを使うというのではなく、目的達成のために必要な環境や場所を選択するのが本筋である。

活動時間帯は、夜間休む以外は、日中・夜間、雨天もすべて活動の対象となる。日中は、雨天でも、濡れない対策や、万が一濡れても濡れた後のシャワーなどの施設が充実し対応が十分であれば、雨天での自然の様子や変化を学習することは、非常に有意義なことである。

夜間も、暗いという短所を暗くなければできないという長所に転換させて考えることが大切である。夜行性の動物の観察や星や月の観察、そして暗闇体験（ナイトウォーク、ナイトウォッチング）など、普段考えもしなかった活動に取り組むことができる。しかし、雨天や夜間の取り組みには、安全面の



十分な配慮が必要なことは言うまでもない。

夜間の活動の取り組みは、遊び半分の肝試しとは意味も目的も全く異なるものである。これは、個人と自然との語らいであり、自然を感じる機会を持つことに意味がある。野生動物たちの息づかいも聞こえるかもしれない。普段、経験できない自然とのかかわりを持つことによって自然理解が進み、よりよい自然との過ごし方を目指すようになる。ここに、自然を理解する教育としての意味がある。

このように環境教育がブームとなってからは、野外活動の在り方もレクリエーション的な内容からより自然学習的な内容や自然体験的な内容がへと変化してきている。

キャンプファイヤーはやめようという話は、金田平氏が30年以上も前に「私たちの自然」に書いていらっしゃることで何も新しいことではない。

自然の豊かな場所に出かけ、学校でもできるようなプログラムでない、その場所でなければできない体験や学習などを組み込んで豊かな時間を過ごし、自然理解を深めるところに自然教室としての意味がある。

以下は、学校、自然保護団体、社会教育団体などが行った環境教育の要素を含めた自然理解のための宿泊学習についての実践報告である。



特集

# 林間学校を見直す

## —環境教育の視点を盛り込んだ林間学校—

神奈川県大井町立大井小学校 一寸木<sup>ちよつき</sup> 肇

### 1. はじめに

学校で行われる環境教育は、すべての各教科・領域で実施すべきもので、全教育課程の中で考えて、様々な場面で展開することが望ましい。さらにその基盤としての直接体験の場を設定することが、これからますます重要となっていくだろう。

ここでは、学校行事である宿泊を伴った野外活動において環境教育を意識したプログラムについて計画・実施したので報告する。

### 2. 宿泊を伴った野外活動の考え方

そもそも野外活動の意味とは何だろう。日頃、野外で活動することが極端に少なくなった現代では、野外活動とは「非日常」を体験するというに尽きるのではないだろうか。ちょっと前までは、自然の中に身を置くということは、それほど非日常のことではなかった。したがって野外活動においても、

- ・集団行動や規律の徹底
- ・飯ごう炊さん
- ・キャンプファイア

に重点が置かれ、自然環境については、「気持ちいい」「すがすがしい」など雰囲気程度の認識しかなかった。したがって、学校の校舎を利用して宿泊訓練をするといったことも多かった。また、各学校にプールがなかったころ水泳の訓練のために臨海学校を行ったところもあった。

したがって、積極的に自然環境に働きかけたり、自然について知るプログラムを持つことはほとんどなかった。

一方、宿泊をすることの意味については、

- ①遠くへ出かけるので、日帰りが無理なため。
- ②長い時間またはたくさんのプログラムがあるため。
- ③夜間や早朝のプログラムを組むため。
- ④ゆとりをもったプログラムを実施するため

などが考えられるが、ここでも夜のプログラムは、キャンプファイアやキャンドルサービスに重点が置かれてきた。もちろん、星の観察などは行われることもあったが、夜の森の「闇」や「静けさ」を積極

的にプログラムとして取り入れることはほとんどなかった。

その理由の一つとして、「火＝人間の知恵」といった考えが強すぎて、飯ごう炊さんからキャンプファイアといった流れが強かったように思う。

また、指導者側の都合や施設事情から、夜のプログラムについて十分なノウハウが蓄積されていないだけでなく、指導者自身の経験不足から実施されなかったことも考えられる。

しかし、子どもを取り巻く環境は、ますます自然離れを助長し、「闇」も「静けさ」も子どもたちの周りから急速に消えつつある。そして、環境教育の立場からも、「人間の生活を見直す」ために「自然と親しむ」「自然のしくみを知る」などの場を設定する必要が出てきた。つまり、今までの林間学校（豊かな自然の中での野外活動）のあり方を見直し、積極的に自然についての学習プログラムを取り入れていくことが急務である。

### 3. 実施計画

#### (1) ねらいについて

前述のように、今までは集団行動や単なる野外活動についてのねらいであったが、今回は、環境教育の視点として、「自分たちの生活を見直すきっかけ」や「自然との付き合い方の方向性」を中心にねらいを設定した。

- ・野外活動を通して、自然の中で生活することの心地よさを味わうとともに、日頃の自分たちの生活を見直し、よりよく生きる意味について考えるきっかけとする。
- ・人も自然の中の一員であることを自覚するとともに、自然に対して思いやりを持って接する心を育てる。
- ・グループによる野外活動を通して、自主性、協調性を育てる。

#### (2) 実施時期と実施場所

本校では、林間学校を従来6年生の1学期に実施していたが、修学旅行や郡連合陸上大会への参加な



どを考慮し、5年生実施に移した。以前は、どの学校も夏休みに入ってからの実施が多かったが、学校の教育課程のなかで実施していくことが本来的であり、学級づくりのよいきっかけにもなると考え、1学期実施を計画した。

なお、実施場所については、5学年実施ということで足柄ふれあいの村（※以下、「村」とする）を利用した。もっとも施設の予約状況が時期的にどうしても偏り、抽選で5月上旬実施となった。実質まだ4年生に近いと、体力的にも多少心配なところはあるが、万全の体制で臨めるように計画した。

### (3) 実施計画

施設使用の予約は前年度にしてあり、4学年担任が使用施設や食事などの概略を提出していた。実質的な計画にあたっては、該当学年の5学年担任が行った。ゆとりをもってねらいを達成するためには、日帰りではスケジュールがきびしい。また、夜や早朝の雰囲気も味わってほしいと考えつつ、他教科の時数とのかかわりから、1泊2日の計画を立てた。さらに、飯ごう炊さんについては、5年生ということを考えて、1日目の夕食のみとし、2日目の朝食は村の食堂に用意をもらうことにした。

なお、学校行事の扱いではないので、引率の教師については、学年の担当を中心にし、必要最低限で行った。以下、細かい計画について述べる。

#### ①計画と下見

実施期日が5月1～2日だったこともあり、4月上旬には、新担任で施設見学をした。また、新学期早々の学年だよりに林間学校実施の期日を記した。さらに子どもを通して計画を知らせるとともに、実施約1週間前の学年懇談会で、林間学校の趣旨説明を行った。

##### 【何のための林間学校か】

- 生活を見直す⇒不便を体験する＝人間のたくましさに気付く。
- 自然の中で⇒ヒトも自然の一員、自然に対してローインパクトで過ごす。
- 自分が参加する（自主性）  
助け合う（協力）

また、荷物の運搬や費用の徴収、さらに参加にあたって担任に知らせておきたいことがあったら連絡をしてほしい旨を伝えた。

下見については、書類の提出時に再度行った。

一方、養護教諭から女子を対象に初経に関する指導を行っていただいた。

#### ②予算

昨年まで続いていたキャンプファイアをやめたため、その際の薪代が節約できた。さらに、食器用の中性洗剤の購入をやめた。洗剤については、村に用意してある石鹸とクレンザーを使用することにしたため、経費節約だけでなく、環境に配慮することができた。

その分、村で発行している「春の自然観察ガイド」（1冊100円）を全員分購入し、自然観察オリエンテーリングで使用することにした。

その結果、必要経費は一人2900円となり、前年度より減らすことができた。この中には、学校から村までのバス代、寝具代、炊事用薪代、食事代（夕食材料費・朝食）、写真代他が含まれる。

#### ③子どもの班と引率教員

学級担任3人と校長および教科担任2名が引率にあたった。

なお、子どもは生活行動グループと宿泊グループの2通り設定した。生活行動グループは、3クラスとも男女混合4グループ（1グループ7～8人）で、合計12グループ。引率教師は、生活行動グループを2つ受け持つことにした。また、宿泊グループは男女別で10グループとし、宿泊部屋を割り振った。

#### ④日程

日程を決定するにあたって、林間学校のねらいが達成できるようなプログラムを次のように考えた。

##### 【自然観察オリエンテーリング】

自然に親しみ、自然のことを知る一助として、1日目の往路で行う。コース上に設問を置き、グループで解答用紙に記入し、正解を競う。なお、設問はコース上観察できる動植物に関するものとし、自然観察ガイドがヒントとして使えるように考えた。なお、「人間が出して自然にかえらないものを持っていく」という設問も設け、コース上のごみを捨てるようにした。

##### 【はし作り】

食べることは生きることの原点ととらえ、自分が食べるための道具を自分の手で作り出すことにし

た。モウソウダケを小割にしたものを小刀でけずって作る。竹は学区の竹林で頂いた。また、小刀は村のものを借りることにした。夕食はカレーライスなのでスプーンのほうが適切なのだが、サラダがつくので、技術的にやさしいはし作りにした。

### 【飯ごう炊さん・カレー作り】

はし作り同様、生きることの原点である。カレーは好き嫌いがほとんどないうえに、調理にも失敗が少ない。5年生にとっては、最適である。なお、朝食については、児童の実態や時間的なことを考え、食堂でパン食セットを用意してもらった。

### 【ナイトウォーク】

今まで行っていたキャンプファイアをやめた。前述したが、林間学校に来たからには、「明るさと大音量」ではなく「闇と静けさ」を子どもたちに味わせたかったからである。「明るさと大音量」なら、学校内でもできる。それに、野生動物をおびやかすことにもつながる。また、キャンプファイアは事前の準備や練習に時間がかかる。

ナイトウォークはききだめしではない。出発前の怖い話やおどかさす必要はない。むしろ、夜の森でも生きものの営みがあること、視覚にたよらず他の器官を砥ぎ澄まして、生きものの気配を感じ取ってほしいこと、闇に目が慣れてくると周りの様子がよくわかるようになること、意外と夜空は明るいことなどを感じ取ってほしいと、事前にレクチャーする。そして、お互いにおどかさないこと、懐中電灯を消すこと、話しかけないこと、もしなにかあったら大きな声で呼ぶことなどを指導しておく。

今回は、村内の自然観察路は他校が使うので、近くの林道を使用し、ゴールは村内の広場にした。道のりにして300mほどである。なお、教師はスタート地点とゴール地点のほかに、途中姿を潜めて子どもたちの様子を見ることにした。もちろん途中子どもたちに声かけはしない。

### 【星座観察】

ナイトウォークのあと、星座を実際に観察し、広大な宇宙を感じ取る。星の動きの学習は6学年の理科にあるが、機会をとらえて実際に夜空を見上げることで子どもたちに宇宙への関心を持たせることができる。この場合、月や惑星が見られれば、天体望遠鏡は有効だと思うが、星座観察に重点をおくほう

が容易である。

### 【徹夜と早起きの容認】

宿泊学習では、子どもたちはなかなか寝つけないのが普通だ。それならいっそのこと夜がふけていくのを味わわせてもよいのではないか。たった1泊である。徹夜して眠かったら帰宅して早く寝ればよいのだ。ただし、眠たい子が十分眠れるように騒がないことだけは、子どもと約束しよう。前任校で7月にこのプログラムを行ったとき、ヒグラシの羽化を見たり、トラツグミの怪しいさえずりを耳にしたりすることができた。

同様に起床時間まで寝床に縛りつける必要はない。鳥のさえずりに満ちた森の朝を体験させよう。ただし周りに迷惑をかけないように、そして危険なことをしないように指導して。

### 【大雄山最乗寺杉林ハイキング】

2日目の帰路、県天然記念物指定の杉林の中を歩いて森を体で感じてみる。巨木が立ち並ぶ杉林には、ムササビが生息している。フィールドサインが見つかれば、さらによい。

### 日程表

#### 【第1日目 5月1日(木)】

- 8:20 登校、開校式
- 9:30 学校出発(バス)
- 9:50 南足柄市役所前着
- 10:00 南足柄市役所前出発(徒歩)、自然観察オリエンテーリング
- 11:00 ふれあいの村着、入村式(ふれあい広場)  
雨天:大会議室
- 11:30 昼食(こもれび広場)  
雨天:宿泊棟
- 13:00 はし作り(こもれび広場)  
雨天:炊事場
- 15:00 準備(食事・用具)
- 15:30 夕食準備(第2炊事場)
- 17:00 夕食(炊事場のまわり)、片付け
- 19:00 ナイトウォーク・星座観察  
雨天:集会棟プレイルーム
- 20:30 反省
- 21:00 就寝準備
- 21:30 消灯



## 【第2日目 5月2日(金)】

- 6:00 起床  
 6:30 朝のつどい(そよかぜ広場)  
 雨天:集会棟プレイルーム  
 7:00 朝食(食堂)  
 8:00 後片付け、清掃  
 9:00 退村式(ふれあい広場)  
 雨天:大会議室  
 9:30 ふれあいの村出発、道了尊ハイキング  
 11:00 大雄山駅着  
 11:15 大雄山駅出発(バス)  
 (バス案内所前より)  
 11:45 学校着、閉校式  
 12:15 給食準備、給食、片付け  
 13:00 反省  
 13:10 下校

## ⑤持ち物

## 【個人の持ち物】

※小さな物にも記名するように。

※個人の持ち物とグループの持ち物は、自分でザックに入れて背負っていく。

- 1 1日目のべんとう
- 2 水とう
- 3 雨具
- 4 筆記用具
- 5 レジャーシート
- 6 林間学校のしおり
- 7 春の自然観察ガイド
- 8 軍手
- 9 タオル
- 10 ハンカチ(2まい)
- 11 ティッシュ
- 12 洗面用具
- 13 着替え(下着)
- 14 ねまき(ジャージなど)
- 15 帽子
- 16 防寒具
- 17 ポリ袋(3まい)
- 18 ふきん(2まい)
- 19 健康チェックカード
- 20 持薬(必要人)
- 21 持ち物を入れるザック類

## 【グループの持ち物】

- 1 うで時計
- 2 はんごう(2)
- 3 うちわ
- 4 皮むき(2)
- 5 新聞紙(たきつけ用)
- 6 かいちゅう電灯(2)

## 【学校で用意するもの】

- 1 救急用品
- 2 ごみ袋(大型ペール用)
- 3 マッチ(12こ)
- 4 CDラジカセ
- 5 望遠鏡・三脚
- 6 携帯電話

## ⑥みんなのやくそく

本来なら子どもたち同士が話し合っ決めての  
 ろうが、5月初旬ということで、学年集会係と担当  
 が話し合っ決めた。

## 【バスの乗り降り】

〈行き〉

- ・1号車 1組と2組の1・2班、教師3名
- ・2号車 2組の3・4班と3組、教師2名

〈帰り〉

- ・1号車 1組と3組の1・2班、教師2名
- ・2号車 2組と3組の3・4班、教師3名

○乗るときは、途中で立ち止まらずに中へ進もう。

酔いやすい人は前の方にいよう。座りきれない  
 ので、席はお互いにゆずり合っ座ろう。

○バスの窓から、手や顔は絶対に出さないようにし  
 よう。

## 【道路の歩行】

○右側を列を乱さないで歩こう。また、ふざけたり  
 飛び出したりしないようにしよう。

○自動車に十分注意しよう。

○グループでまとまって歩こう。

## 【ふれあいの村で】

○みんなが使う施設だよ。施設や借りたものはい  
 ねいに使おう。

○グループで行動し、自分勝手な行動はやめよう。

○他の学校も来ている。なかよくやりましょう。

⑦生活班と係

生活班は各クラス4班（1つの班は7～8人）

班長 ・指導者との連絡

副班長 ・開校式、入村式、朝のつどい、退村式、  
閉校式の司会・進行

（・クラフト、ナイトハイク進行）

・班員の世話

（担当教師）

- ・プログラムの運営と進行
- ・村および他団体との連絡
- ・自然観察オリエンテーリング計画
- ・クラフト、ナイトハイク計画

食 事 ・食事の準備、食材の受け取り

・後片付け（食器・残飯）

（担当教師）

（・食事代の支払い）

・食堂利用や野外炊事後片付けの指導  
と物品の確認

用 具 ・シーツ類の配布と回収

・寝具類の整理・整とん

（担当教師）

（・リネン代の支払い）

・シーツ類の受領と返却  
・寝具類の整理・整とん状況の点検

保 健 ・病人、けが人の連絡

・班員・室員の健康観察

・健康カードの作成

（担当教師）

・保健安全指導

・けが人の手当て

清 掃 ・清掃の割り当て、点検

・用具の整理・整とん

・野外炊事のごみの処理（かまど）

（担当教師）

・清掃分担の指導

・使用施設の備品の管理

・清掃の点検

⑧安全管理

○自分の健康管理に関心を持たせるため、健康観察  
カードを林間学校の前1週間記入させた。

○救急用品だけでなく、緊急連絡用に携帯電話を携  
行した。

○校長に自動車で参加してもらい、緊急時に備え  
た。

○刃物の使用や火の扱いに関しては、学年集会でそ  
の方法を示した。

4. 活動の実際

(1) 1日目

【自然観察オリエンテーリング】

自然観察ガイドに載っているコースを使用した。  
なお、スタート地点から、先発が設問を置き、ス  
タートはグループごとで、次のグループは1分後に  
出発させた。

1997.5.1  
林間学校 自然観察オリエンテーリング

ふれあいの村まで、まわりの自然を観察しながら、楽しく散歩で歩いていきま  
しょう。新しい発見があるでしょう。

- あわてないこと。十分、間に合います。（でも、おそくとも11時になるま  
えに、ふれあいの村「ふれあい広場」に到着すること。）
- 自動車に十分注意しましょう。特に広場周辺は、横断に気を付けること。
- 困ったことが起きたら、近くの先生や大人に知らせましょう。
- 他の班を見ます。問題になっている草木は、ぬいたり、たおしたりしないこと。

Q1の答え	Q2の答え
Q3の答え	Q4の答え
Q5の答え	大井小学校 第5学年 ( )組 ( )班 ◎いくつ できたかな？ ○ふれあい広場で検出せ。

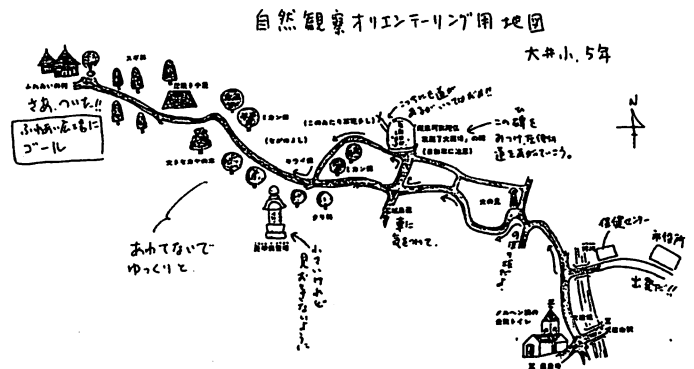


図1：解答用紙と裏面の地図



〔設問1〕この花は、ハルジオンと呼ばれ、今から70年ほど前に外国からやってきました。そこで問題。どっちのほうからやってきたのでしょうか。

- ①北アメリカ ②南アメリカ ③アフリカ  
④ヨーロッパ ⑤オーストラリア ⑥中国  
⑦インド

〔設問2〕この花はカラスノエンドウと言います。花と葉をスケッチしましょう。

〔設問3〕これはタンポポです。タンポポには、日本にもとからあるカントウタンポポと外国から入ってきたセイヨウタンポポがありますが、これはどっちでしょう。そのわけも書きましょう。

〔設問4〕人間が出て、自然にかえらないものを一つ持っていきましょう。

〔設問5〕ここに植えてある木には、どんなものがあるだろう。(答：クリの実)

各グループともはりきって参加した。バスでいきなり宿泊施設に行き、そこで実施する方法もあるが、せっかくのアプローチを有効に使うとともに、自分の荷物を持ち、自分の足で宿泊施設に向かうことそのものがねらいに即していると考え。

ごみ拾いについては、ほとんどのグループともできた。フィールドマナーについて考えるきっかけになったと思われる。また、子どもたちは自然観察ガイドを時間があると見ていて、自然に関心を持つ第一歩となった。

なお、はし作りのあとに成績発表をし、賞品はおやつにした。



写真1：はし作り

### 【はし作り】

村で借りた小刀は右利き用100丁、左利き用5丁であった。だれもがたいへん意欲的に活動し、けがした子どもは一人もいなかった。なお、竹を持つ際、素手で持たず、軍手をはめるかタオルで竹を巻いて持つと、けがしにくい。作品はどれも細すぎず、十分に使用に耐えるものだった。実際に夕食に使った子どもも多く、大切に家に持って帰った子がほとんどだった。なかには、帰宅後も使っているとか、葉ばしとして母親にプレゼントした子もいた。

### 【飯ごう炊さん・カレー作り】

準備が早く終わり、2時間近くかけられたので、ゆとりを持って活動することができた。教師も2グループを受け持っていたので、かえって子どもたちの主体性を生かすことができた。予想外においしくできたカレーの味は、とても心に残ったようで、学年の思い出として書いていた。

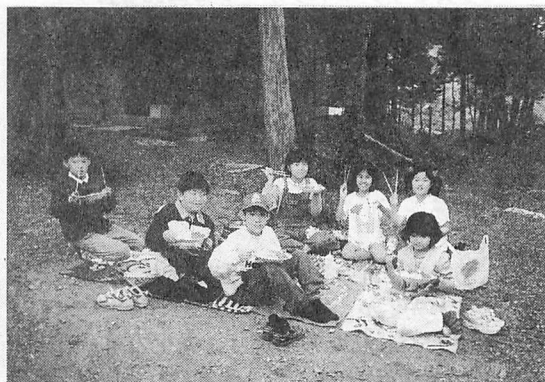


写真2：はしでカレーを食べる

### 【ナイトウォーク】

村内の自然観察路を通り、林道に出た。スタート地点で、きもだめしではなく夜の森を体全体で味わってほしいこと、懐中電灯はつけずなるべく静かに歩くこと、前のグループに追いつかないようにいくことを話した。

筆者は、事故防止のため中間地点に身を潜めて子どもたちの様子を見た。3～4人のグループに分かれて出発したが、各グループとも子ども同士励まし合って歩いていた。途中、懐中電灯をつけたグループもあったが、割とすぐ消していたし、子どもたちが手をつなぎあって歩いていくのが印象的であった。

最終グループが通過したあと、気付かれないう

に後を追った。村入口の街灯が見えるとある子が「まぶしい！」と言った。夜空の明るさになれたものには、街灯はまぶしすぎるのだ。このような経験をぜひ子どもたちにさせたいと改めて感じた。

事後、子どもにも教師にも一番印象が強かったようで、たいへん好評だった。



写真3：ナイトウォークの出発を待つ

一夜七時になって、ナイトウォークをやりました。最初のうちは、まっくらに見えてこわかったです。でも、だんだん目が慣れてきて、楽しくなってきました。星もきれいだったです。あと、川が流れる音が聞こえました。— (A男の作文より)

— 私たち三組二班の番は、四番目です。いよいよです。大さわ先生が、「次は三組二班きなさい。」とよばれました。私たちの班は、先生の言ったとおり、ふたてに分かれました。最初に行くのは、私なんかのチームになりました。それでいざ勇気を出してレッツゴーとなりました。私は、みんなには、「平気だよ。がんばって行こう。」と言ってたけど、心はドキドキしていました。でも、三人で手をつないで行ったのであんましこわくありませんでした。とことこ歩いていくうちに、だんだん星が見えてきてドキドキなんか飛んでいっちゃいました。三人で星の話をしたりして、楽しく行きました。とちゅうザーザーという音が何度も聞こえてきたので、三人で滝かなあなどといっていました。そしてようやくふれあいの村のゴールに着きました。私は思ったより短かったなあと思いました。また、こういう機会があったらやってみたいです。— (B女の作文より)

### 【星座の観察】

ナイトウォークのあと、村の広場を利用して行った。あいにく周囲の街灯を消すことはできなかったが、新月だったこともあり、主要な星座を観察することができた。北斗七星を手がかりに北極星を探すとともに、春の大曲線上の牛飼い座、乙女座、また、南に見える火星や獅子座、双子座について話をした。

就寝時間後の観察も可としたため、星の位置が変わっていくのを確かめている子もいた。

### 【徹夜の容認】

夜がふけていくのを野外で体験することは、なかなかない。事前にまわりに迷惑をかけないで過ごすことを指導してあったためか、眠れないと野外で夜景や星空を見たりして過ごしている子どもたちが多かった。もっとも、午前0時30分頃には、全員就寝してしまっ

### (2) 2日目

#### 【早起きの容認】

早朝は、バードウォッチングができるよう広場に望遠鏡を設置した。あいにく姿を見ることはできなかったが、さえずりを聞くことができた。

— 一朝、五時十分におきたら「ほーほけきよ」と言う声が聞こえた。— (C女の作文より)

### 【朝食】

今回は、食堂にパン食セットを頼んだ。以前、サンドイッチを作って食べたこともあるが、5学年になりたての実施では、時間的なゆとりから頼んでよかったと感じた。

### 【大雄山最乗寺杉林ハイキング】

急きよ、南足柄市郷土資料館で開催される岩石展を見学できることになり、予定を一部変更した。珍しい岩石だけでなく、近くで捕獲されたヘビ(シロマダラ)を見ることもできた。

見学が終わって杉林を通り、林が切れる仁王門のあたりで、学校長から大雄山最乗寺の由来について話を聞いた。また、筆者からはムササビの生息について話をし、そばのスギについている爪痕を見せることができた。



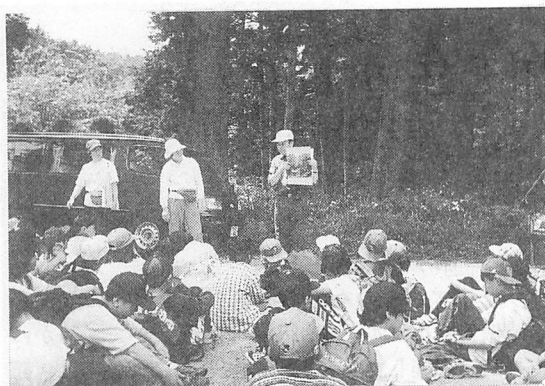


写真4：学校長による話

その後、大雄山駅まで歩いたが、1日目はりきりすぎたのか、子どもたちは結構疲れた様子だった。様々な体験ができた2日間だったが、2日目のプログラムは盛りだくさんにならぬように配慮したほうがよいと感じた。

#### 5. おわりに

一お弁当を食べ終えて、いよいよはし作りが始まりました。用具係が、竹を配ってくれた時、ぼくは、うまくはしを作ることができるかなと思いました。はじめ、小刀で角のところをけずったら、力が入って深くけずれてしまいました。ぼくは、これじゃあ細くなりすぎてしまうと思いました。それからは、軽く少しずつやって、四つの角を軽くシャツ、シャツ、シャツと丸くなるようにけずっていきました。手首が少しつかれてきたので、休みながらやりました。

だいたい細くなってきたので、これ以上けずると竹ぐしになってしまうと思い、終わりにしました。二本目はなれたきたので、一本目より早くできました。一寸木先生に、

「ふしのうらがわをけずったほうがいいよ。」  
と言われたので、けずりました。けずると、前よりかっこよくなりました。これでいいかなとまた先生に見てもらいました。そしたら、

「合格。」

と言われ、ほっとしてうれしくなりました。

作っている時は、まわりの子ができたかどうか気にしていませんでしたが、他の子は、もうほとんどできていました。家に帰ったら、早くこのはしを使ってみたいと思いました。

カレーを作って食べたあと、だんだんうす暗く

なった十九時に、ナイトウォークが始まりました。外に出て、ぼくは赤っぽくかがやく星を見つけました。火星だと思っていた。

「赤っぽく光っている星があるよ。」

とだれかが言ったので、一寸木先生が、

「あれは、火星だよ。」

と教えてくれました。ぼくは、やっぱりなと思いました。

ナイトウォークが始まって、ぼくは、〇〇君と□□君と歩きました。とても暗かったので、星がいっぱい見えました。〇〇君が、

「少し、こわいな。」

と言いました。ぼくもはじめは少しこわいなと思ったけれど、だんだん慣れてきました。風がふいて木がザワザワなっていました。歩いている時は、木がいっぱいあったので、星は少ししか見えませんでした。

みんなが集まった時、先生が春の大三角、北極星、しし座、そして北斗七星の柄の部分とうしかい座のアルクトゥールスとおとめ座のスピカを結ぶ「春の大曲線」をかいちゅう電灯でてらしてくれました。家で見ると星より明るくかがやいていました。ぼくは、ハールボップすい星も見えたらよかったのになと思いました。— (D男の作文より)

はし作りにまわりの子のことも気にならないくらい熱中し、星が好きでよく見ているのに、いつもより輝く星に感動したD男。子どもたちはナイトウォークをはじめ、この林間学校がとても印象に残ったようで、学年の思い出にも半分以上の子が林間学校のことを書いていた。これからは、自然環境を生かしたプログラムを積極的に取り入れるとともに、電気を使わないで過ごしてみるなど、人間生活の原点に立ち戻った中で一定期間生活することは、生きる力を育み、「生活を見直す」きっかけになると考える。「非日常」としての林間学校の役割りは、これからますます大きくなるであろう。

#### 6. 文献

青砥航次(1993)自然とふれあう一森の学校の経験から一、初等理科教育, Vol.27, No.8

植原 彰(1993)学校で気楽に楽しく自然かんさつ, 地人書館

特集

# 宿泊学習での自然を生かした 夜間プログラムの実践

～もうやめよう！ 学校でのキャンプファイアー～

常務理事 堤 達 俊

## 1. はじめに

小学校において宿泊学習といえば、夏季学校（林間・臨海学校）、体験学習、修学旅行などが挙げられる。中でも夏季学校や体験学習の多くは、観光名所を回ることが多い修学旅行とは違い、自然とのふれあいを主たる目的の一つとして行われる。

が、そこで行われることの3大イベントといえは、日中の集団登山、飯盒炊さん、夜間のキャンプファイアーというのがほとんどである。特に、晴れたらキャンプファイアー、雨ならキャンドルサービスというパターンが欠かせないという学校が多い。

なぜ、そうなのか。

簡単に言ってしまうと、夜間のプログラムで普通の教員が取り組めるものとしてそれが一般的というのが本当の理由ではないか。そして、そこそこ（場合によってはかなり）楽しめ、子どもにとって良い思い出になるからだろう。

が、それでその行事の目的は達成できるのだろうか。キャンプファイアーが、自然とのふれあいを求めてわざわざ遠くの間所まで行ってすることとしてふさわしいのだろうか。それは、かなり疑問である。

夏季学校や体験学習は、豊かな自然に囲まれた場所で行われる。そこには、多くの野生動植物が生息する。そういう場所だからこそ行く価値があるのである。

しかし、そこへ行ってキャンプファイアーをしてどんちゃん騒ぎをするというのは、溪流釣りに行ってゴミを捨ててくる釣り人や、バーベキューをして油の付いた鉄板を川で洗う（しかも合成洗剤）オートキャンパー達と何ら変わりはない。野生動物が主に行動するのは夜間である。その大切な時間に、野生動物の怖がる火や大きな音をまき散らし、それで「自然を大切にしようとする心情を育てる」などという目的でやって来るというのは本末転倒である。

誤解のないようにことわっておくが、私はキャン

プファイアーそのものを批判をしているのではない。個人や小グループが小さな火を焚いて、静かに夜の時間を楽しむという形の焚き火については、節度をもって行うのであればそれは認めても良いと思う。また、子どもたちが（場合によっては先生も）熱狂し心に強く残るものとしての効果は、確かにキャンプファイアーにはある。しかし、その場所や時間が問題なのである。何もわざわざ山の中に来てまで、下界での楽しみを持ち込むことはないのではないか、と言いたいのである。私自身宴会好きで、以前は夏季学校の行われる箱根にギターを持ち込み大騒ぎしていたことがある。そして、その時は、それが子どもたちの心につつまでも残る行事としてふさわしいものと思っていた。確かにそういう一面はあるにはあったが、結果として、すばらしい自然に対し恩を仇で返すようなことをしていたのだと思う。

そろそろ、キャンプファイアーから脱却し、その場の自然を生かしたプログラムを行ってもよいのではないだろうか

## 2. 自然を生かした夜間プログラムの実践

私がこれまで小学校の夏季学校や体験学習で、直接・間接的に指導してきたキャンプファイアーに替わる夜間のプログラムの事例をここで紹介する。（学校の規模は、児童数700名前後。対象は4・5年生のいずれかで行った。）

### a. 動物の足跡をとる

（目的）夜間は、野生動物が採餌のために活発に活動するときである。それを生かして、餌で動物をおびき寄せ、その足跡をとり、動物の行動を想像して楽しむ。

（準備するもの）段ボール、模造紙、ペーパータオル、墨汁、肉、針金

（手順）

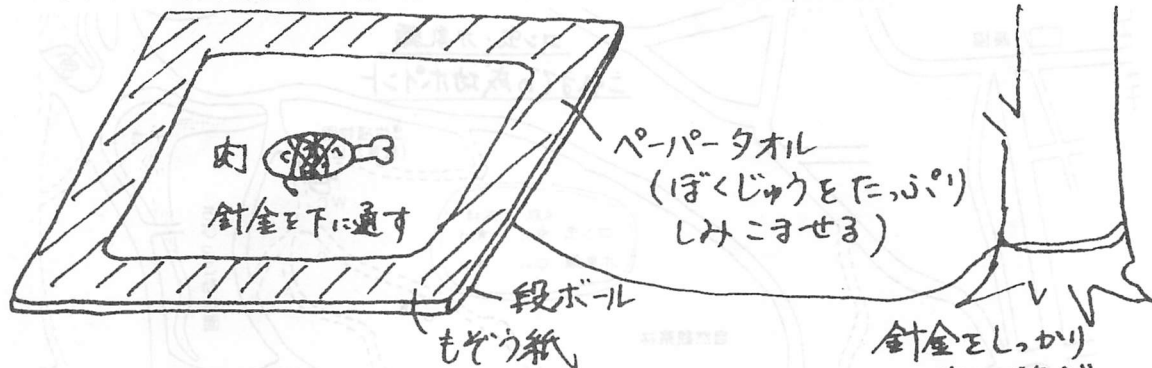
① 広げた段ボールに、模造紙を張る。



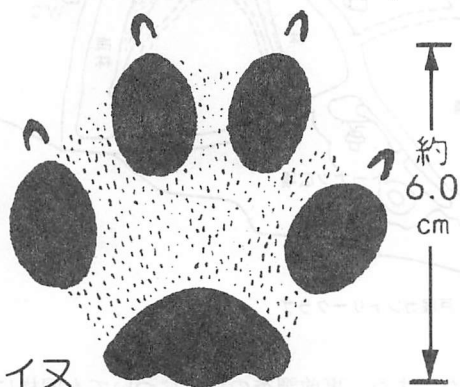
- ② その周りにペーパータオルをテープで留める。
- ③ ペーパータオルに墨汁をたっぷりしみこませる。
- ④ 針金の先端に鳥の手羽先（少し腐り気味の方がにおいが強く効果的）を巻き付け、模造紙

の中央に通す。

- ⑤ 野生動物の「通り道」と思うところに置き、持ち去られないよう、針金の端を近くの木などに結びつける。
- ⑥ 次の日の朝、足跡が付いているか確かめに行き、道具を回収する。



約5.0 cm



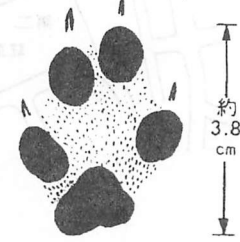
イヌ

約4.0 cm



ネコ

約3.3 cm



タヌキ

(考察)

このプログラムで使用する道具は、グループで一つ作り、グループごとに話し合いをして設置場所を決めるようにした。子どもたちにとっては、初めて行く場所であるので、その日の日中に付近を散策する時間をとり、設置場所についての下見ができるようにした。また、教師側による事前調査の結果をプリントにして配布した。そのため、子どもたちは、「あそこにはけもの道みたいなのがあった」「あそこは木がいっぱい生えていて動物がいそうだ」「この道は、今までよく動物が通っている」などと具体的な理由を挙げながら話し合いをすることができた。

また、このプログラムの良さは、次の日の朝まで興味をひきつけることができることだ。子どもたち

は、朝の気持ちの良い空気の中を散歩しながら「昨日、自分の仕掛けた場所に野生動物が来てくれただろうか。」と、胸を膨らませて昨日の場所へと向かっていった。（朝の活動としてラジオ体操をする学校も未だに多く見受けられるが、せめて散歩をしながらバードリスニングを楽しむくらいの活動を取り入れるくらいはして欲しい。ラジオ体操ならどこでもできるのだから。）

そして、運良く足跡が残っていたら、それが何の動物であるか調べてみた。タヌキだろうか、他の生き物だろうか。子どもたちはわくわくしながら足跡を調べていた。私が実践したところでは、ネコやイヌの足跡しかとることはできなかった（事前の聞き込み調査ではタヌキがいるとの情報を得ていた）が、自分たちの寝ている時間に行動している生き物

の存在を感じることができるだけでも楽しい気持ちになれたようだ。また、自分たちが設置した場所に足跡が付いていたということから、予想が当たった喜びも得ることができたと思われる。

このプログラムで気になるのは、野生動物に一晚だけとはいえ、餌を人為的に与えてしまうというこ

とだ。それについては罪悪感を持ちながら実践しているのが事実ではあるが、子どもたちに野生動物の息吹を感じ取ってもらいたいということを優先して考えている。指導者は、その点を十分に考慮して、餌の量を増やしたり、道具を放置したりすることのないようにしたい。



b. 昆虫を捕まえる

(目的) 夜間に行動する地上徘徊型の昆虫を知ることにより、身近な自然に目を向ける。

(準備するもの) 紙コップ、板目紙、割り箸、腐り気味の挽肉、移植ごて

(手順)

- ① 班で話し合っ、設置場所を決める。
- ② 移植ごてで、紙コップが入るくらいの穴を地面にあける。
- ③ 紙コップを穴に入れ、腐り気味の挽肉をスプーン1杯くらい入れる。
- ④ 割り箸をさした板目紙を雨よけとしてつける。
- ⑤ 次の日の朝、昆虫が入っているか見に行き、道具を回収する。

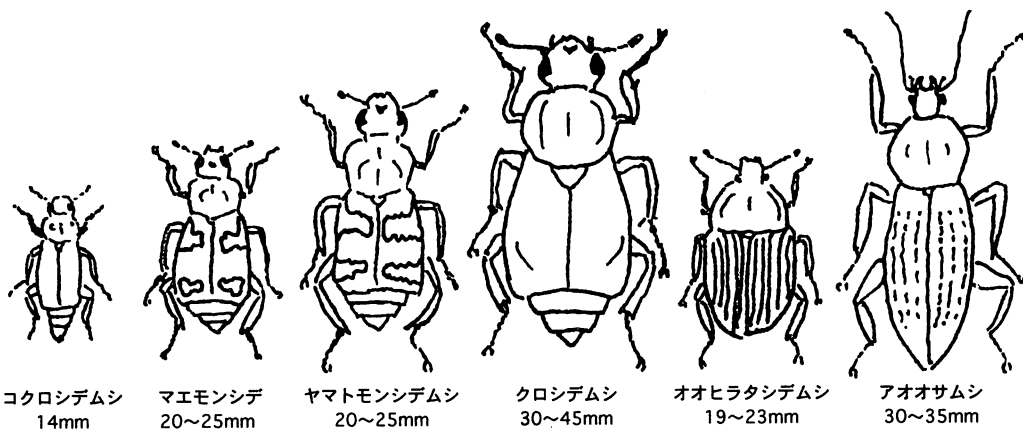
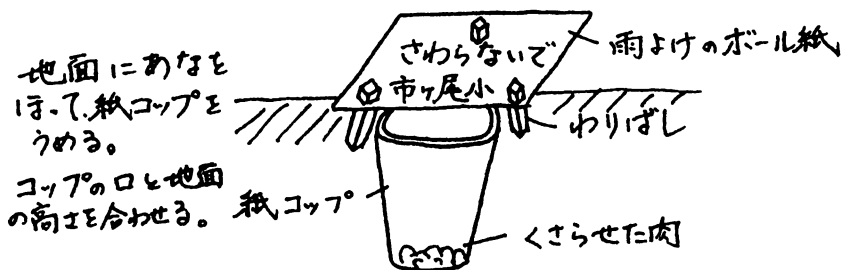
(考察)

このプログラムは、aと組み合わせて、同時に

行った。また、事前調査の結果についても同様に子どもに知らせた。夜間に設置し、翌朝まで意欲が持続するという点からいっても共通する部分が多い。

対象となるのは、オサムシ類・シテムシ類などの地表を動き回る昆虫である。これらの昆虫は、種類によってすみ環境が違うので、朝、回収した後、環境別に種類や捕獲数を調べ、まわりの植生などに目を向けてみることもできた。事前に、学校付近で同じ活動をしておくと、学校のまわりの自然と比較することができて更に内容の濃い活動となるだろう。

留意点としては、a同様、道具を放置しないこと(ここでは特に重要で、紙コップが埋めてある限り昆虫は捕まり続け、そこから逃げることもできない)、元の場所に近いところに昆虫を逃がすことである。また、腐肉に集まる昆虫を手に触れることから、活動後によく手を洗うようにしたい。



c. 夜の静けさを感じる。

(目的) 夜の森の音や気配を感じ取る。

(準備するもの) 特になし (移動中は、班で一つ位の懐中電灯)

(考察)

これは全体での移動の際、その途中の道で立ち止まり、その場でしばらくしゃがみ込み、おしゃべりをしたり物音をたてたりしないで静かに自然の音に耳を傾けるプログラムである。そのため、独立して行うのではなく、他のプログラムへの移動の中に取り入れた。

夜の森で静かにしていると、他の学校のキャンプファイアーの音が聞こえたことがあった。そこに参加した女性教諭の「今まで何も考えずにキャンプファイアーをしていたけど、こうやって森の中で自然の音を聞いていると、キャンプファイアーがいかに罪深いものであるかがわかった。ここに来るまでキャンプファイアーのない夏季学校なんて考えられなかったし、森の中で静かに座っているなんておもしろいのかあと思っていたけど、こういうのもおもしろいね。」という言葉はとても印象に残っている。

子どもたちにとってもこのような経験はほとんどなく、夜の自然に触れる良い機会になったと思う。

d. ムササビの観察をする。

(目的) 夜間、森で活動する動物の存在に気づく。

(準備するもの) 赤やオレンジ色のセロファンをかぶせた懐中電灯

(考察)

このプログラムは、ムササビの観察の適所として東京近辺では高尾山と並んで有名である御岳山(東京都)で行った。また、宿泊場所の主人が付近の自然に大変詳しい(御岳山ビジターセンターの所員でもある)ため、案内をお願いした。

普段野生動物を観察することは大変難しいことではあるが、ムササビは多くの人数であっても、静かにしていれば比較的観察が容易である。また、人間と同じほ乳類でありながら空を飛ぶ(正確には滑空する)という変わった行動は、子どもたちが興味を持ちやすい。

ムササビがいなければこのプログラムは難しいが、ムササビが息息する場所であればその環境を生かして是非行いたい。

ムササビを見ることができた子どもは、ムササビのことがとても印象に残り、学校に帰ってきてから作文に書いたり、卒業式の呼びかけの中で夏季学校の思い出としてこのことを挙げていたりしていた。

このプログラムで難しいと思うのは、野生動物の



観察に慣れていない子どもたちのなかには、比較的短時間で飽きたり、あきらめたりしてしまう子がいる。そういう子は、友達とおしゃべりを始めたり、懐中電灯をやたらにつけたりする。あまりひどくなってくるとプログラムを終えざるを得ないが、私は、野生動物を観察するのはそんなに簡単ではないということを子どもたちに知ってもらいたい良い経験になると楽観的にとらえている。

e. ホタルの観察をする。

(目的) ホタルの光の不思議さに触れるとともに初夏の風物詩としてのホタルを知る。

(準備するもの) 懐中電灯 (移動時のみ使用し、観察時には使用しない)

(考察)

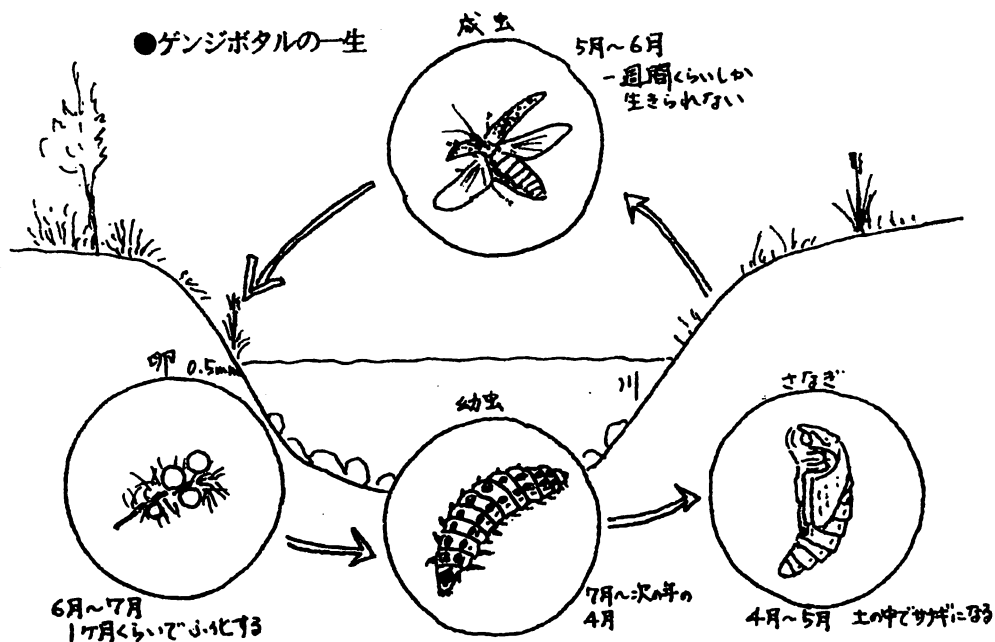
これは、横浜市大池子ども自然公園にて行った。

時期は6月中旬で、ゲンジボタルの最盛期だった。

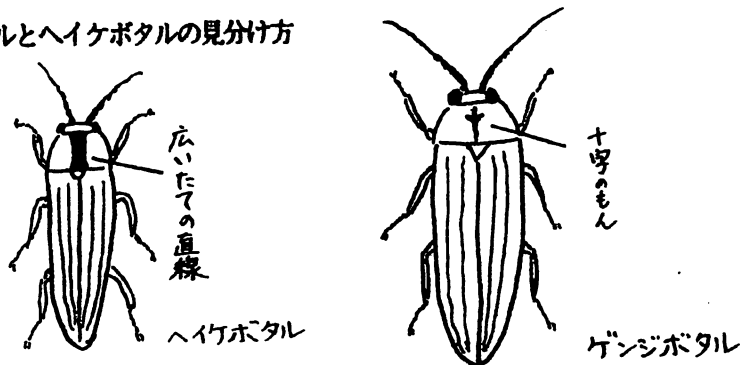
現在、都会ではホタルに限らず自然が減り、様々な生き物を観察することが困難になっている。そのため、小学校の音楽で学習する歌を、歌詞にでてくる生き物の実物を見ることなしにイメージすることすらできずに歌う子どもも多い。別れの歌では定番の「螢の光」を歌としては知っていても本当のホタルの光は知らない。そんな子どもたちに、少しでも実際の自然の姿を見せることはとても大切だと思う。

観察の際には、懐中電灯を絶対に点灯しないように注意した。光が繁殖行動の手段であるホタルにとって、人工的な光ほど迷惑なものはないからである。

ホタルを観察することによって、水や、周りの環境の大切さを理解することもできた。



●ゲンジボタルとヘイケボタルの見分け方



## f. 星空の観察をする。

(目的) 都会ではあまり見るのでできない星空を観察することによって、宇宙への関心を持つ。  
(準備するもの) フィールドスコープ、双眼鏡  
(考察)

この活動は、夜の自然観察としてはかなり一般的である。特に目新しいことはしていないが、フィールドスコープを通して月や様々な星を観察する機会はそれほど多いことではないので、なるべく多い台数を準備したい。

子どもは、都会と違って多くの星を観察できることに感動していた。また、「フィールドスコープを使うといつも見ている月がこんなにも大きく見えるんだ。」と驚きの声をあげる子どもも多かった。

このプログラムは、単独で行える自信がなかったので、その他のプログラムと組み合わせて行った。

## g. ナイトハイクをする。

(目的) 夜の闇を体験し、自然への畏敬の念を抱く。夜の林の中で生息する虫がいることに気づく。

(準備するもの) 空き缶、ろうそく、マッチ、地図、学習カード

(考察)

夏の夜の楽しみといえば、昔からきもだめしがあつた。きもだめし自体、自然の闇を使った楽しい遊びである。が、もう少し静かに歩き、虫の鳴き声に耳を傾けるのも良いものだ。

事前に、このプログラムの趣旨をよく説明し、なるべく自然に迷惑をかけないような歩き方をするようにした。その一つとして、懐中電灯は使わず、空き缶を切り開いてランタンとし、その明かりを頼りに歩くことにした。ランタンは事前学習の中で班で一つ作っておいた。

歩くコースは地図に明記し、途中に引率者を配置した。子どもたちは、ほんのりと明るいランタンの光だけで歩くことを楽しんでしたが、闇に慣れるに従って余裕のできた子どもが同じ班や他の班の子どもを脅かしはじめ、最終的にはきもだめしとあまり変わらなくなってしまった班も見受けられた。

そうなることは事前に予想されたため、学習カードのようなものを渡し、聞こえた虫の声を言葉で表現し書き入れるようにした。そのため、数種類の虫の声を聞き分けてくることができた班もあった。

## 3. 雨天時の活動

キャンプファイアーをやめるにあたって一番困るのは、「雨だったらどうするのだろうか」ということである。実は、私もかなり困る。しかし、それでは、つぶしの利くキャンプファイアー路線を崩すことはできない。

私の場合、できるものは雨でもやってしまうという方法でやってきた。中には土砂降りという日もあった。そんな時でも「雨の日の夜に森を歩くななんて体験はこれが最後かもしれないよ」と子どもたちに呼びかけナイトハイクをした。子どもたちは、大人が思う程に雨を嫌がりはいない。友達同士で楽しそうに話をしながら歩いていた。そして、途中でカエルやカタツムリを見つけると大はしゃぎをしていた。また、動物の足跡取りや昆虫とりも雨でも予定通り行った。足跡も捕まえられる昆虫の数も少なくなることは確かだが、ゼロということにはなかった。さすがに、星空の観察は無理だったが、これは単独のプログラムとして構成していないので特に問題はなかった。

が、まだまだ十分だと思えるほどではない。今後とも雨天プログラム開発に力を入れたい。

## 4. 最後に

キャンプファイアーをやめるには、まずは指導者の認識を変えなければならない。それには、なぜキャンプファイアーがいけないのかということを引きちんと説明することだ。

また、いつまでも3大イベント(登山、飯盒炊さん、キャンプファイアー)しかしていないと、子どもたちの頭には野外のレジャーとしてそればかりが残ってしまう。そして、彼らが大人になっても同じようなことを繰り返してしまうのではないだろうか。子どもたちにいろいろな夜の活動を示すことができれば、今後の日本のキャンプシーンも変化してくるに違いないと私は思っている。まだまだ自分でも不十分な実践であると思っているが、多くの方々からご指導をいただき、より多様な夜のプログラムを展開できるようにしていきたい。

特集

## 自然と触れ合う長期移動教室

常務理事 長屋 昌 治

はじめに

東京都の江戸川区では、6年生を対象にした6泊7日の長期移動教室を、毎年10校程度の学校が実施している。場所は、福島県的那須甲子、茨城県の水海道、山形県の金峰山など、いくつかの候補地があり、各学校が独自に決定している。

私の学校では、国立那須甲子少年自然の家を利用し、「自然に親しむ」というテーマを掲げて、毎年行っている。

学校の環境及び児童の実態

私の学校は、江戸川区の北部、JR新小岩駅の近くにあり、付近は商住混合の人口密集地域である。

周辺は若干の小公園と寺社林が点在する程度で緑が少なく、子ども達は自然と触れ合う機会もさしてなく、あまり自然に興味や関心を持っていないのが実状である。

このため、学校でも近年自然教育の必要性を感じて、自然に親しむ活動に力を入れるようになり、全校で近くの森林公園に給食を食べに行ったり、親子を対象とした、身近な自然に対する講演会を催したりしている。

また、グリーンアドベンチャークラブを設けて、自然に関する学習や観察活動なども始めている。今回紹介する長期移動教室も、この一環として実施されているものである。

長期移動教室の主旨

この移動教室では、日ごろ自然に触れる機会の少ない子ども達に、豊かな自然のもとで生活させることによって、自然に親しみ、自然の楽しさ、自然の偉大さ、自然の厳しさなどを体験させることを第一の目的としている。

そのため、学校でできる活動はできるだけ少なくして、自然に恵まれた現地でしかできない活動を多く取り入れている。また、晴雨に関わらず、野外活動をするることによって、ありのままの自然に接する機会を多くするように心がけている

主な活動

### 1. 早朝自然観察

朝は自然と触れ合う上で、最も良い機会と考え、この活動を行っている。

山の朝は早く、夜明け前からバードコーラスが始まる。起床を5時30分とし、6時より7時20分ごろまで、ほぼ毎日行うことにしている。

早朝自然観察では、野鳥観察に力を入れている。野鳥は朝早いほど観察しやすく、移動教室の時期が5月から6月にかけて行われるので、声や姿の良い夏鳥を多く観察できるからである。



しかし、ほとんどの子どもが野鳥観察の経験がなく、望遠鏡や双眼鏡の数が少ないため、次の事項に留意して指導を行っている。

- ・全員に同じ図鑑を持たせる。
- ・全員にバインダーを持たせ、気がついたこと、分かったことなどをすぐに書かせる。
- ・なるべく一人で行動させ、私語を禁止する。
- ・自分の目や耳など、五感を十分に働かせる。

そして、最初のうちは、自然に親しむことを重点に置いて、指導を行っている。

早朝観察では、毎年、キビタキ、オオルリ、カッコウなど、数多くの野鳥を観察することができている。ときには、弱っているジュウイチを保護し、手当して、自然に返すといったハプニングなどもある。





野鳥を中心としているが、植物、地層、雲なども観察させ、分かったこと、気がついたことなどを発表させている。

## 2. 登山

### ①赤面山登山

赤面山は標高1701mで、登山道の途中に悪路があり、小学生には少しきつい登山である。

しかし、頂上付近は樹木が少なく見晴らしも良く、残雪もあちらこちらにあるため、高山に登ったという満足感や達成感を得ることができる。また、那須岳の噴煙からは火山の醍醐味を十分味わうことができる。

途中、野鳥や植物を観察したり景色を眺めたりしながら、ゆっくり登り、亜高山の自然に親しむことを目標としている。



### ②剣桂ハイキング

高低差の少ない阿武隈川沿いの自然歩道を少人数のグループで行動するものである。途中にいくつかのポイントを置き、先生達が自然に関係する話やネイチャゲームを行うようにしている。

子ども達は好きな場所で昼食を食べ、川で遊び、

自由に行動しながら、7キロの道のりを歩く。最後に溪流沿いの露天風呂に入り、外の景色を見ながら汗を流している。

## 3. テント生活

期間中1泊2日ぐらいのテント生活を行っている。キャンプ場は宿舎から徒歩約30分の森林の中にあり、10人用の常設テントが点在している。子ども達は5～6人のグループに分かれてテントを中心に生活する。

3食とも自炊のため、1日中食事作りに追われる事が多い。また、電灯のない暗黒の夜、木々の葉の揺らぐ音、不気味なトラツグミの声等に不安を感じたり、冷え冷えとしたテントの中で寝袋で寝るため、なかなか、寝つけない子どももいる。しかし、協力の大切さを知ると共に、自然との触れ合いをより深めることができる。



## 4. ナイトハイク (夜の自然観察)

都会っ子はあまり暗やみに慣れていないため、キャンプ場の暗夜に対する恐怖心も非常に強い。ナイトハイクはそれを解消すると共に、夜の自然に親しむことを目的としている。

全員でキャンプ場付近の比較的開けた場所で、夜の鳥の鳴き声や星空を観察する。その後、1キロほどの林道を各個に歩き、暗夜の一人歩きの体験を行っている。

## 5. 沢歩き

阿武隈川の上流の道がほとんどない沢を、各自でルートを決めさせ、自由に登らせている。途中で沢遊びや水辺の野鳥を観察する時間を十分に取り、渓谷の自然に親しむ事を目的としている。

水の中に落ちて、足や体をぬらす者もいるが、石

跳びや、つたでのターザンごっこなど、終日のびのびと沢ですごしている。また、カワガラスやキセキレイなどの水辺の野鳥が子ども達のほんの少し先までやってくるので、その声や姿を十分に観察することができる。

6. オリエンテーリング

「自然の家」の周辺に設けられているオリエンテーリングのパーマネント・コースを使用して、4～5人のグループで、90分以内にできるだけ多くのポイントを回るスコアー・オリエンテーリングの形式で行っている。

ポイントは全部で30ポイントあり、途中の5ポイントには、移動教室で観察した野鳥・植物・地層などに関する問題を置き、正解したチームにはボーナス・ポイントを加えるようにしている。

子ども達は地図を読みながら、雄大な自然の中をあちこち走り回り、ポイントを見つけている。ときには、道に迷ったり霧にまかれたり、苦労することもあるが、チームワークの大切さや地図の読みとりの重要性などを学びながら、知らず知らずのうちに自然と触れ合っている。

7. 星の観察

移動教室に備えて、事前に現地で見える星について学習し、星座と関係ある神話について調べさせた

りしながら、興味・関心を持たせるよう努めている。また、星座盤も全員に持たせ、使い方も十分に練習し、観察に備えている。

星の観察は毎晩行うことを原則としているが、降るような星空は期間中1～2日ぐらいしかなく、いつも十分に観察できないのが現状である。そのため、天の川や白鳥座などがはっきり見えたりすると、「星ってこんなにいっぱいあったんだ。」「本当に空に川が流れているみたいだ。」など、感激する子ども達が多い。

おわりに

都会の子ども達は自然の中にどっぷりつかった経験が少なく、自然というものをあまり良く知らない。知らないから興味も持てないし、好きにもなれない。しかし、このような移動教室を体験すると、自然に対して何らかの意識を持ち始める子ども達が多い。学校に戻ってからも、今まで気にも留めなかった鳥の鳴き声に反応したり、道ばたに咲いている雑草の名前を知りたがったり、あるいは、自然保護についてまじめに考えたりなど、様々な反応を示してくる。

自然にあまり触れることが少なくなってきた現在、自然豊かなところで行う移動教室や林間学校では、多くの学校ができるだけ自然と触れ合う活動を取り入れることを望む次第である。

4年度 セカンドスクール日程表

江戸川区立第三松江小学校

時間		起床	起床	起床	起床	起床	起床
5:30							
6:00							
6:30		朝食	自然観察	自然観察	自然観察	自然観察	自然観察
7:00	学校集合 出発	8:00 赤面山登山	朝食	朝食 (自炊)	朝食	朝食	朝食
7:30			キャンプ準備				
9:00				キャンプ場の 後片付け	オリエンテーリング	剣桂ハイキング	自然の家出発 埼玉古墳見学 (昼食)
12:00	会津城見学 (昼食)	赤面山頂上 (昼食)	昼食 (自炊)	昼食	昼食	(昼食)	
13:00							
14:30	福島県立 博物館見学		沢登り	写生	短歌、俳句、 詩、作り	露天風呂	学校着 解散
17:00	自然の家着	入浴	夕食 (自炊)	入浴	入浴	夕食 (自炊)	
18:00	夕食	夕食		夕食	夕食		
19:00	入浴					入浴	
21:00	自由時間	星の観察	ナイト・ハイク (夜の自然観察)	星の観察	キャンプ・ファイヤー	ミーティング	
22:00	消灯	消灯	消灯	消灯	消灯	消灯	

## 特集

## (財)日本鳥類保護連盟の環境教育事業

—「北海道親子自然体験」を例として—

財団法人日本鳥類保護連盟 百 武 充・城 田 慶

はじめに

(財)日本鳥類保護連盟では、「全国野鳥保護のつどい」や「全国野生生物保護実績発表大会」等の全国的行事を主催するほか、より直接的な野外活動として、ジュニア・バードウォッチング、子ども鳥博士研修などの環境教育活動を行ってきた。これらの活動は、必ずしも大人の参加を排除するものではなかったが、主な対象は小・中・高校生であり、大人は参加主体ではなく、保護者として同行するという色彩が強いものであった。

近年の社会的情勢の変化に対応して従来の活動を発展させ、より広く自然愛好者の拡大をはかるため、1997年度から親子バードウォッチングや北海道親子自然体験など、家族単位での参加を前提とする企画への取り組みを始めている。ここでは、これらの活動の概略と、昨年第1回を行った北海道親子自然体験について紹介する。

## 1. 活動の概要

## (1) 親子バードウォッチング (日帰り型)

ジュニア・バードウォッチングの基本パターンを踏襲しつつ、家族全体を対象とすることで活動の幅を広げ、会員拡大の一助にしようとするものである。

東京近郊のみの行事である。新聞等に掲載を依頼して参加者を募集している。所要時間は2～3時間で、午前中に終了する。一般募集の参加者のほか、子ども鳥博士も参加している。

1997年度は次の4回を行った。

月 日	行 先 (テーマ)	参加者
4月25日	葛西鳥類園 (バードウォッチング)	…………… 8組30名
8月22日	市川塩浜 (テグスクリーン作戦)	…………… 2組12名
9月13日	船橋海浜公園 (干潟の生きもの観察)	…………… 10組27名
10月5日	入間川 (バードウォッチング)	…………… 8組32名

## (2) 北海道親子自然体験 (宿泊型)

宿泊型で時間を十分にとった行事として、新たに企画した。詳細は以下に記すとおりである。

## 2. 北海道親子自然体験

## (1) 主旨

ふだん自然やイヌ・ネコ以外の生きものとふれあう機会の少ない都市居住者を主な対象として、自然の中でゆっくり過ごす体験を味わってもらうため、宿泊を伴う自然体験ツアーを組みたいという思いは、担当者には以前から強くあった。実施可能な場所や方法を内部で検討していたが、実施のための条件が整ってきたため、平成9年度から行うことに踏み切った。

## (2) 企画

## ア 費用と場所の決定

親子、つまり1世帯2名以上の参加を前提とするため、費用を極力低く抑える必要があった。一方では、申込が定員に満たなかった場合のことも考慮しなければならない。これらの条件を考えて、3泊4日の日程で参加費は大人60,000円、子供50,000円とした。スタッフ側の人数との兼ね合いから、募集定員は15組30名とした。

また、航空券の団体予約等が必要になるため、JTBの協力を得ることとした。

場所については、下記のとおり北海道森町在住の岩田氏の協力が得られるという事情から、森町をベースにして北海道南部で行うこととなった。落ち着いて滞在できるよう、3泊ともネイパル森(北海道立少年自然の家)に連泊するよう決定した。また、入浴は隣接する駒ヶ岳温泉ちゃっぷ林館を利用させていただけることになった。

## イ 時期の決定

3泊4日の行程で学校を欠席せずに参加できることを条件とすると、時期は必然的に夏休み期間中に限られる。一方、8月に入ると夏鳥は早くも渡去を



はじめ、さえずりも聞かれなくなることから、この点では時期は早いほどよい。諸条件を折衷して、休暇入り早々の7月29日～8月1日に実施することとした。

#### ウ 協力者の選定

直営のフィールドを持たない当連盟にとって、遠隔地での行事実施には、その土地を熟知した地元の方の支援体制の存在が不可欠である。今回は、幸いにも森町在住の写真家で連盟会員でもある岩田真知氏の全面的なご協力が得られることになった。また、同氏のご紹介で、E-JRanchの佐藤夫妻と駒ヶ岳牛乳の柴田夫妻のご支援を仰ぐことができた。

#### エ 下見

3月にスタッフ1名が現地に行き、岩田氏や宿泊先、協力者等と打ち合わせを行った。ただ、実施時期と下見の時期が離れていたため、観察コースの選定と観察対象などに関して、必ずしも万全な準備が行えなかった。

#### (3) プログラムの決定

参加者の顔ぶれを横目で見ながらプログラムを作成した。

全体のプログラムと、個々のアクティビティは次のとおりである。

#### 第1日 (午後現地着) オリエンテーション～

アイスブレイク ((1)他己紹介 (2)鼻の機能＝香料等を封入した容器を多数そろえ、匂いをかいでどれとどれが同じか当てる、等)

鳥博士の家族は別として、新聞を見て参加してくる人は、皆初対面であり、参加する意識もさまざまである。

この日のテーマは「参加者の交流」として、初対面の人たちの緊張をほぐすことを主目的に、ゲーム性(遊戯性)の強いアクティビティをいくつか行うことにした。

#### 第2日 早朝観察～森林公園散策～乗馬体験～

ナイトハイク(光感受性)

テーマは「こころ」。大沼付近の森林内を散策しながら自然観察、森の句会など、五感を使って自然にふれるためのこころみを行うこととした。また、E-J RANCHで、家庭のペットとはまったく異なる

大型動物の感触を味わってもらうため、おとなしいアメリカンクォーター種の馬に乗り、牧場内を回る乗馬体験を行うこととした。このため、参加者を2グループに分け、散策と乗馬を午前・午後交替で行うこととした。また、ナイトハイクは、ふだんいかに光の明るさになれているかを理解するため、ろうそくを使つての実験を行うこととした。

#### 第3日 早朝観察～遠出の自然観察～

絵日記作り～スライドショー～ナイトハイク

テーマは「知る」。マイクロバスを利用して日本海側(北檜山町管内)まで遠出しての自然観察ツアーを行うこととした。また、帰館後、思い出の分かち合いのため、グループごとに絵日記を作ること、夜はその発表会の後、岩田氏が野鳥を中心とした自然をスライドにより紹介するスライドショーという盛り沢山の行程を作った。

#### 第4日 早朝観察～手づくり体験

(午後現地発帰京)

テーマは「挑戦」。第2・3日目がハードスケジュールで疲れがたまることを考え、学習的色彩の強いものは避けた。

最終日であり、持ち帰りができるよう、牛乳からバターを作る試みと、昼食用のサンドイッチ作りを行うこととした。シビアに言えば自然体験からはやや外れるところがあるかもしれないが、自然物を使つてものを自作する試みは、現代が忘れつつあることの一つであるから、それを取り戻す試みは人間性回復にもつながり、環境教育の目的から大筋では外れていないと考える。

#### (4) 募集から実施まで

ア 募集から実施まで

募集は6月から連盟機関誌「私たちの自然」と新聞によって行った。7月初めには予定人数がほぼ埋まり、参加者が確定した。内訳は両親と子供が1組、父親と子供が1組、母親と子供が9組、合計11組25名であった。また、従来からの会員である子ども鳥博士が4組、新聞を見て応募してきた初参加者が7組であった。

スタッフとして、当連盟から城田と百武の2名が全行程に同行、函館空港からは岩田氏も参加した。

参加者には、事前アンケートや実施のしおりを

送って連絡をとり、初対面の緊張を少しでも緩和するようつとめた。

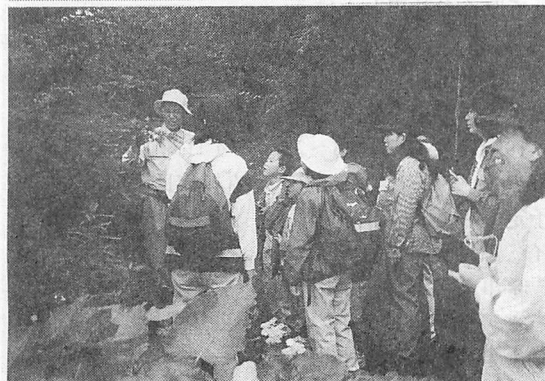
## イ 実施状況

### 7月29日（第1日）曇り

11時から羽田空港ロビーで受付開始。後述のようにいろいろあったが、16時ごろ全員無事宿舎に到着。初日のオリエンテーションでは、当初の打ち合わせでは不要だったはずの少年自然の家側の挨拶が飛び入りで入ってしまい、少しリズムが崩れた。しかし、他己紹介では小学校低学年の子供まで一生懸命に話し、和やかな空気をかもしだした。アイスブレイクとしてはよかったと思う。

### 30日（第2日）曇り一時雨

乗馬体験は、今回の事後アンケートで最も好評だったものである。1回4名ずつで、始めにパドックで乗っているときの姿勢や手綱の使い方などの基本的操作を教わり、それから牧場内をゆっくり2周する。手綱を引いてもらって歩くのではなく、自力で馬をコントロールする（低年齢の参加者のみ、先行する牧場主が誘導）魅力は、初めはこわごわまたがった人も、帰りには皆にこにこして戻ってくるのを見るだけでもよくわかった。



自然観察では、蚊の多さに多少悩まされた。よいフィールドであったがちょっと歩く距離が長く、ゆっくり風景などを観賞する余裕がやや不足した。このあたりは、現地の方にこちらの行事の意図が十分に通じていなかった点があるのではないかと反省した。コースの途中で試みた句会？は、始め照れていた参加者も結構乗ってきて、味のある句を読む。このあたりが俳句の面白さであろうか。

### 31日（第3日）晴れ

日本海岸・檜山地方へのツアーは、一般の北海道旅行ではなかなか行く機会がないところだけに期待は大きかった。しかし、事前の打ち合わせが甘く、多少時間が無駄になったところがあった。また、距離の遠さもあって、車に乗っている時間が長く、現地での余裕が当初の目論見より少なくなってしまった。しかし、浮島をロープで手繰り寄せたり、真新しいヒグマの糞を見たり、ミサゴが何回も水面にダイビングするところを見たりして、それなりの収穫にはこと欠かなかった。途中でアイスクリームを食べたりしたため、帰着が予定より少し遅れた。

夜の絵日記制作は4グループに分かれて行った。それぞれ重心の置き方が異なり、おもしろいもののができたと思う。ただ、全員が乗っていたとはいえない。参加型の行事にはありがちなことではあるが、運営方法には課題が残った。また、グループ作業であるため、作品をもって帰れないという意見も出された。

この日はこの後場所を移して岩田さんのスライドトークを行ったため、終了予定時間がかなり遅れた。すこし詰め込み過ぎであった。

### 8月1日（第4日）晴れ

早朝観察で前日までと少しコースを変えたところ、ベニマンコなど多くの鳥を見ることができた。

朝食後、キャンプ場の炊事場でバターと昼食のサンドイッチ作り。バター作りは駒ヶ岳牛乳が材料や道具の揃えから作り方の指導までを引き受けてくださり、皆お土産として持ち帰れるほどのバターを作ることができた。その後野菜やハムなどをはさんだサンドイッチを各自が作って、デザートにメロンが出る豪華版？の昼食を野外でとり、現地でのプログラムを終えた。

帰り、函館空港に向かうマイクロバスの中で全体のまとめを行った。また、到着以来ここまで、お土

産を買う時間も場所もまったくなかったこと、空港の売店があまり大きくないことを考慮して、途中で土産店に寄ってショッピングタイムをとった（事後アンケートでは、これがつまらなかったという意見が1件あった）。

函館を14時に発ち、羽田に15時過ぎ帰着、全日程を終了して解散した。

全日程を通して、曇りがちの日が多かったが、たいてい雨に降られることもなく、まあまあ天気であった。

#### ウ 事後

全参加者にアンケートを配布して感想を聞いた。また、後日報告書を送付した。

初参加組で会員になってくださった方が何人かあった。

#### (5) 反省点

初めての航空機利用のツアーということ、事前の準備のかなりの部分を現地の協力者に任せたことなどから、思いがけないミスがいくつか生じた。反省を込めて、それらを以下に記す。

ア 空港で受付の後、各自昼食をとって搭乗ゲート前で再集合することとしていったん解散した。ところが、初めて飛行機に乗る家族がいて勝手がわからず、危うく乗り損うところであった。事前に集合場所の地図を配布すれば避けられたことである。出発前に冷や汗をかいた。結果は何もなかったが、潜在的には今回最大の失敗であったと思う。

イ 早朝観察では地元講師が案内したが、植物採取をめぐって「どどん葉を採って観察しよう」という言葉が出てしまった。現地スタッフ側とそこまで事前の打ち合わせをしていなかったすきをつかれた。採集の問題については、連盟の行事では原則として採集はしないこととしている。特に地方の行事の場合には、採集の是非についていろいろな考え方はあろう。ただ、自然公園区域内では、採集禁止の指定植物でなくとも採集は控えるべきであろうというのが事務局の考えなのだが…。

ウ 費用を安く上げるため、食事など多少無理をし

た。が、参加者からは、せっかく来たのだから（多少経費は余分にかかっても）北海道らしいものを一度は食べたいという声が出された。アンケートの結果でも、費用はこの内容にしては安いという意見が大多数で、次年度以降の計画の際考慮すべき宿題となった。カニはともかくジンギスカンくらいは、とか考えている。

エ 一般的な反省点として、というより希望になるが、自前のフィールドを持ちたい。

初めての場所で観察会を行うのは、やはり自信がなく、表面的なことしか目が向かない。見えないもの、隠れているものにまで参加者の意識を向けさせるためには、事務局が隅から隅まで熟知しており、自由に使えるフィールドが必要だと痛切に感じる。

このようにいろいろ不足した点、うまく行かなかった点はあった。しかし、事後アンケートでは、次のような意見が寄せられている。

\*見る目、聞く耳を持てば、いろいろな生きものがあることに気付くものだ。

\*目線を変えれば、ふだん気にしていなかったところにも生きものがある。

\*聞く力が解発された。

\*また参加したい。

これらの記述を見る限り、事務局側に多少の不手際があり、改善の余地が少なくないとしても、行事の主旨は概ね理解してもらえたと考えてよさそうだ。下記のとおり本年度も継続して行う予定であるが、昨年度の経験を生かし、より充実した内容での実施を目指したい。

最後に、多大なご協力を賜った岩田氏、E-J Ranch、柴田夫妻ほか現地のかたがたにこの欄を借りて厚くお礼申し上げる。

#### (6) その他

##### ア 本年度の予定

1998年度も7月23～26日の4日間、昨年同様森町をベースにして、プログラムに改良を加えて行う予定でいる。

##### イ 添付資料

\*事前アンケート用紙

\*アクティビティのふりかえり用紙

\*事後アンケート用紙

## 特集

## 丹沢自然保護協会森の学校から

丹沢自然保護協会 岩崎 優子

## 1. 丹沢自然保護協会とは

首都圏のすぐ近くにありながら豊かな自然環境をいまなお残している丹沢。この丹沢を愛し、あとの世代のために守り育てていこうと考える仲間たちの集まりが私たち丹沢自然保護協会です。

当協会の歴史は1960年に始まり、現在では小学生からお年寄りまで800名ほどの会員がいます。そしてそれぞれが設立当時の理想を受け継ぎながら自然観察会や勉強会の開催、行政機関への働きかけなどを通じて、地域に密着した自然保護活動をおこなっています。

協会の年間活動のなかで、主に小学生から中学生を対象にして実施されるのが「森の学校」の活動です。

## 2. 森の学校とは

丹沢保護協会では毎年8月に、小学校5年生から中学校3年生までの男女を対象とした一般向けの自然体験キャンプ「森の学校」を実施します。そしてこのキャンプにはじめて参加し、その後の活動にも継続的に参加してくれる子供たちと、協会の指導者（高校生以上の任意集団）とが作るグループの名称が「森の学校」です。8月におこなわれるキャンプ「森の学校」とグループ名称「森の学校」とが全く同じであるため、混乱される力がいらっしゃるかもしれませんが、ここでは、前者の「森の学校」を含めて後者の「森の学校」について、その活動を紹介していきたいと思います。

当グループでは、自然のなかでの活動を通して、子供たちに自然に対する親しみの心をもたせ、さらにそこから自然を理解する心と自然を護ろうとする心を育てていくことを目的として1972年から活動しており、現在では子供約70名と指導者約30名の、合計100名程が年間を通じて活動しています。

「森の学校」の主な年間活動は以下の5つです。

- 1 「森の学校」キャンプ（8月、2泊3日）
- 2 春・夏・冬のキャンプ（3月・7月・12月各2泊3日～3泊4日）

- 3 清掃キャンプ（5月・10月、各1泊2日）

4 『丹沢だより・森の学校ページ』の編集（協会の会報に付属しています。）

- 5 日帰り観察会の実施（年数回程度）

※ このうち1の「森の学校」キャンプは、はじめてキャンプに参加する小中学生を対象とした入門的な活動をおこないます。そしてここに参加した子供たちをそれ以前から活動している「森の学校グループ」のメンバーに加えて新たな集団を作り、2～5の活動をおこなっています。また、1の「森の学校」キャンプには、指導者の勉強会である「丹沢セミナー」が併設されています。

## 3. 活動の基本方針

60年代後半から自然破壊の問題が叫ばれるようになって、私たちは協会としての直接的な自然保護活動の他に未来の自然保護のため、次の世代を担う子供たちを対象とした「森の学校」の活動をはじめました。ここでの活動の基本方針は、丹沢の豊かな自然を利用しながら子供たちに様々な体験や情報を提供し、彼らが自分自身の力で自然を正しく理解できるようにしていくことです。

80年代にはいると家庭や教育現場においても、いわゆるアウトドア活動がはやるようになりました。巷には野外活動専門雑誌が溢れ、あちこちにキャンプ場が作られ、授業でも環境問題が取り上げられるようになりました。しかし実際に「自然に親しむ」活動というと、そこでおこなわれることの多くは、ゲームや花火、ダンスや集団登山などであり、結局は、「日常生活からの脱却」をスローガンにした、昔ながらの自然消費型活動の延長に過ぎないのが現状です。

これに対して、私たちはあくまでも自然から学ぶ活動に重点をおいています。例えば、夏の夜のイベントにキャンプファイヤーはおこないません。そのかわり、「くらやみ教室」というものをおこないます。これは、夜の林道に一人ずつ子供たちをすわらせるものです。このプログラムを通じて、子供たちは夜の闇の怖さや楽しさを知り、闇のなかでも活動



している生き物たちがいることを知ります。さらに日常生活において夜間にいかに多くのエネルギーが消費され、一般的な野外生活もどれだけ自然環境に影響を与えてきたかを理解します。こうしたことの積み重ねから、自然と共存していくためには何が必要であるかを判断できる子供たちが育ってくれることを期待して、私たちは活動しています。

#### 4. 活動内容

私たちは、『自然に親しむ→自然を知る→自然を護る』というプロセスを経て、子供たちに自然についての理解を深めさせています。

実際の活動における各プログラムもこの流れに沿って作られています。

以下にプログラムの一例を示します。

親しむ；

- ・植物の葉や幹の拓本を作る
- ・リーダーを囲んで話す・登山・日の出を見る
- ・日の入を見る・地図上を真っ直ぐ歩く
- ・くらやみ教室・ネイチャーゲーム
- ・川原で遊ぶ 等

知る；

- ・動物の糞調査・夜の観察・早朝の観察
- ・星の観察・冬芽の観察・土壌生物の観察
- ・水生昆虫の観察 等

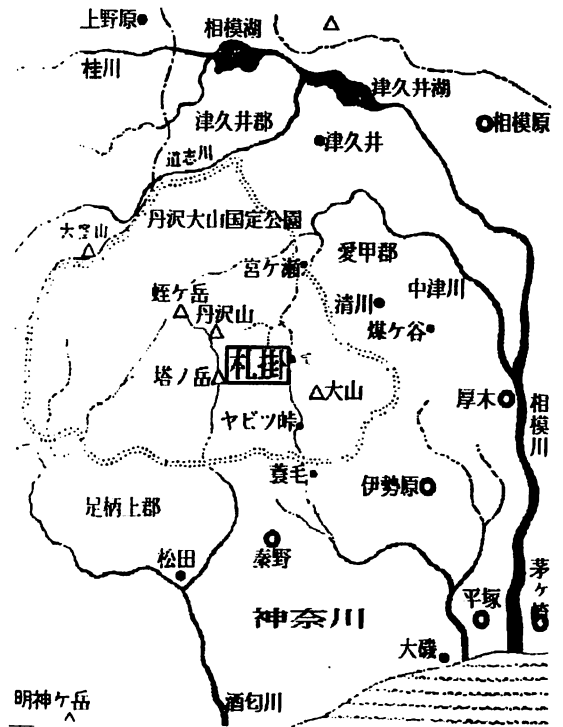
護る；

- ・ゴミ拾い
- ・丹沢自然保護協会の他の活動への参加 等

このほかにも、自然のなかでの生活技術を身に付けるといった観点から、かまどを作り、飯食炊さんをおこなったり、テント生活もおこなっています。

私たちの活動の拠点、丹沢大山国定公園内の東に位置する「札掛」という場所です。近くに溪流が流れ、野鳥や動物達を身近に見ることができる自然にめぐまれたスポットです。

ここへのアプローチは、林道を使って自動車で行くことも可能ですが、キャンプをおこなうときは、小田急「秦野駅」からバスと徒歩で「札掛」にやってきました。年間を通して、同じ道を歩いて見ると、四季折々の変化を感じることができます。一方、林道脇に散在する、心無い人達が捨てたゴミを目にすることもあります。この林道のゴミ拾いも随時おこ



なっています。

宿泊施設は、栄光ヒュッテという、神奈川県私立の学校の山小屋を好意で貸していただいています。水道や電気を引かず、沢の水を利用し、夜の明け方にはランプを使用しています。このような環境の中で、私たちは「森の学校」の活動をおこなっています。

次に活動の具体的な例として、8月の「森の学校」キャンプと、3月の春の教室を紹介したいと思います。

#### 5. 具体例

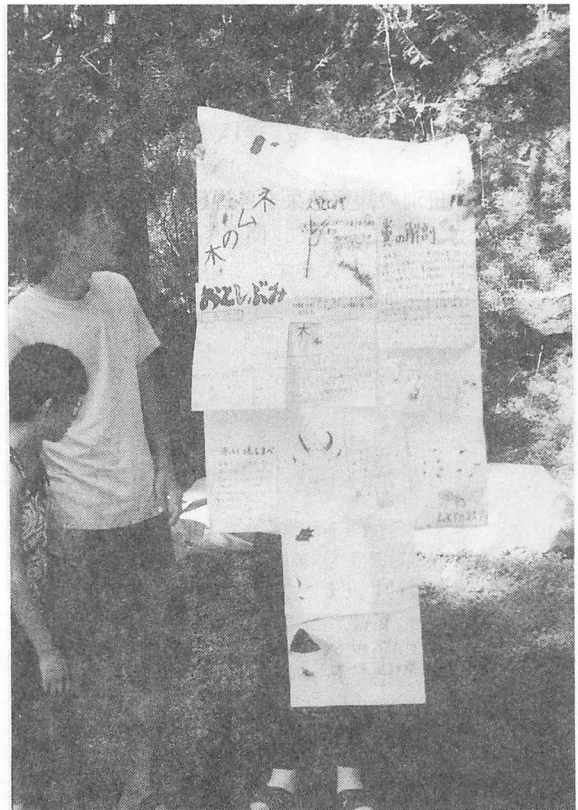
- (1) 「森の学校」キャンプ；2泊3日（8月）
  - 1日目；秦野駅集合（8時40分）…（バス）…  
…秦野…（徒歩）…札掛（12時30分）  
自然観察（水生昆虫）…テント設営…  
…自炊（飯盒のみ）…紙芝居…くらやみ教室
  - 2日目；朝の観察（5時）…自然観察（班別行動）  
…水遊び（川原で）…新聞作り（壁新聞）…  
…自炊（完全自炊）…新聞発表
  - 3日目；朝の観察（5時）…テント撤収…  
…雨降り実験…閉校式…ゴミを拾いながら下山  
（徒歩で移動）…秦野駅解散（16時30分）  
・くらやみ教室…夜の森の中に一人で20分程度すわ

ります。くらやみははじめは怖く感じますが、慣れてくると動物の動きや鳴き声など様々な自然の息吹が感じられ、自然との一体感が味わえます。(肝試しではありません)

- ・朝の観察…早朝のひんやりとした空気の中で野鳥などの観察をします。運がよければ野生の鹿を見ることもできます。
- ・自然観察…2日目の午前中を使って、キャンプ地周辺の自然観察をおこないます。直接的な観察指導は各班の専属スタッフが行います。
- ・水生昆虫観察…川の中に棲む昆虫を観察して、そこから自然の中での物質の循環について勉強します。
- ・新聞作り…午前中の自然観察で各自が観察した出来事を壁新聞にまとめます。夕食後にはそれぞれが新聞の発表をして全員で知識を分け合います。
- ・ゴミ拾い…子供達が指導者達と一緒に林道の清掃作業を行います。この活動を通して自然保護活動の一端に触れるとともに、ゴミ問題について考えてもらうのが目的です。



水生昆虫観察(夏)



新聞発表(夏)



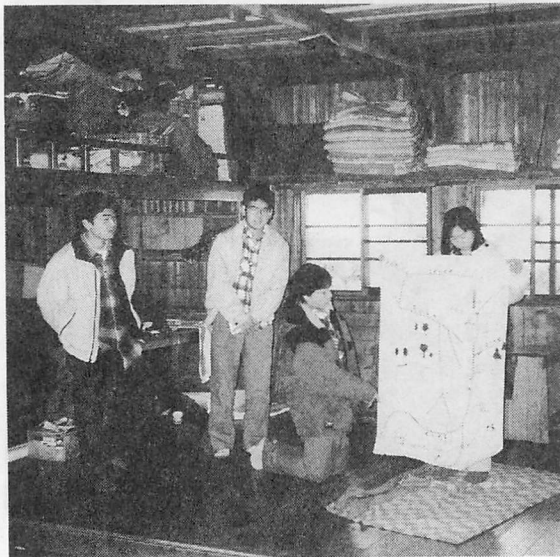
雨降り実験(夏)

(2) 冬の教室；2泊3日(12月)

- 1日目；秦野駅集合(8時45分)…(バス)…  
…蓑毛…(徒歩)…大山登山…札掛(16時)…  
…班別ミーティング(19時30分)…夜のお話
- 2日目；朝の観察(6時30分)…  
…班別テーマ観察(9時)…班別まとめ…  
…星の観察(19時)
- 3日目；起床(6時)…大掃除…発表会…ゴミを拾

いながら下山…秦野駅解散（16時）

- ・夜のお話…指導者が、自然について、観察することについて、動物のことなど、自分が日頃感じていることを子供達に話します。キャンプだけでは知ることができない自然の奥深さを分かち合います。
- ・班別テーマ観察…キャンプへの参加回数に応じて「見てみよう」「調べてみよう」「やってみよう」を目標にした班を編成し、各班でレベルに沿った自然観察を行います。「見てみよう」=とにかく自然に親しむ。「調べてみよう」=動物の行動を調べるなど。「やってみよう」=自然観察のコース設定、地図を読みながら登山をするなど。
- ・星の観察…冬の空は澄んでいるので、星が良く見えます。星座早見盤を片手に寒さを忘れて観察します。
- ・発表会…班別の観察結果を各班趣向を凝らして発表します。班によって、同じものを見ても、視点の違いが現れてきます。



発表会（冬）

## 6. 運営サイドの仕事

「森の学校」を実施するにあたって、運営を行っているのがスタッフです。スタッフはキャンプの企画、準備、自然観察路の設定、下見、食事当番、安全管理などをおこなっています。

- ・企画・準備…キャンプを行う前にスタッフミーティングを行って、日程や役割分担を決めます。子供の募集なども「森の学校」事務局で受け付けます。
- ・自然観察路の設定…自然観察指導の担当になった指導者は、各自内容に沿ったコースやレジュメなどを用意します。
- ・食事当番…キャンプでは、自炊を行わないときは、施設を使って、一括して食事を作ります。献立の作成や、炊事の指示を行います。
- ・安全管理…自然の中で活動することは、いつも危険が伴います。そこで、次のような点に留意しています。

キャンプ参加メンバーは保険にはいります。自然観察中は救急箱を携帯し、子供に対する指導者の数を多くするなど、（7～8人の子供に対して3～4人の指導者）目が行き届くようにしています。コース設定に関しても危険箇所を確認し、気を配ります。

キャンプ実施中は、子供達が就寝したあと、指導者が集まって、ミーティングを行います。翌日の日程の確認や、子供の健康状態、様子などを全員で確認します。

入山下山は基本的に徒歩ですが、体調の悪い子供が車で移動できるように、自動車を待機させています。

しかし、日常とは違った環境の中で過ごすため自己管理が大切です。小学校高学年からの参加は、このような考えに基づきます。

## 7. 最後に

以上が「森の学校」の活動内容です。「森の学校」を経験した子供達の中から、リーダーとして後輩の指導を続けたり、自然関係の進路を選択したものもいますが、途中で丹沢を離れていった生徒達も数多くいました。しかし、「森の学校」の活動に参加したことで将来少しでも自然を理解することができる大人に育ってくればと、私たちは願っています。今のプログラムで彼らに本当に自然の姿を伝えられたのかという不安は常にありますが、これからもその不安をバネに斬新なプログラムを開発していきたいと思っています。

## 特集

## 君も自然案内人になれますか！

～森の恵みを感じてみよう～

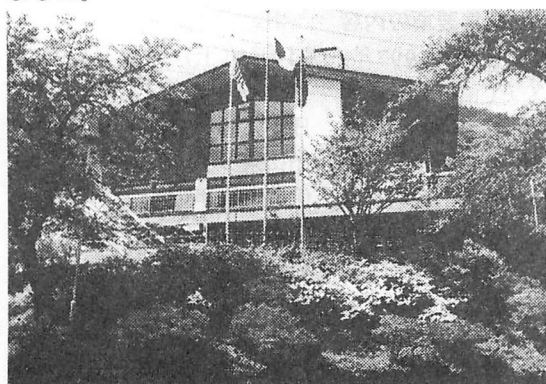
神奈川県立伊勢原青年の家 川手隆生

## 1 はじめに

神奈川県には4つの県立青年の家がありました。残念ながらこの本が発行される頃には廃止（1998年3月31日廃止）になっているはずですが。私はその頃、どこの職場にいるのか現時点ではわかりません。同じような社会教育施設で勤務できれば、と考えています。

県立青年の家は、いずれも自然環境が豊かな場所に立地していました。伊勢原青年の家は、丹沢山地の東に位置する大山の麓、日向川の溪谷沿いに建つ、西欧スタイルの山荘風施設です。周囲は自然が豊かで、春の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色など、季節によって様々な表情を見せてくれます。野生動物の訪問も多く、春にはオオルリやキビタキが庭先でさえずり、広場の前を流れる川では、カワガラスが忙しく行き来しています。またシカ、サル、タヌキ、キツネ、ムササビ、テンなどのけものたちの息づかいが1年を通して感じられます。

このような絶好の自然環境の中にありながら、環境教育を目的とした事業は今までにあまり実施されていませんでした。この日向の環境を生かした環境教育を目的とし、しかも季節感のある事業をやってみたかったので、転勤してきて2年目の昨年実施しました。



## 2 事業の目的・対象

事業の目的は「自然に親しみ、自然を知ること、自然案内人（自然とのつきあい方・接し方・マ

ナーを身につけている人）になるきっかけを作り、環境学習ボランティアの養成を目指す。」というものでした。たった1回（1泊2日）の事業で、環境ボランティアを養成することには無理があるでしょう。本来なら年間通して、数回から10回程度のシリーズになった事業を展開する必要があります。しかし、対象に中高生をねらっていますので、彼らがこれから自分自身で活動するきっかけとなる意識が芽生えてくれればと考え、実施しました。

## 3 宿泊施設の利点

5月10日（土）、11日（日）の1泊2日の日程で実施したのですが、ここで宿泊型社会教育施設における宿泊型の事業の利点を挙げてみます。

## (1) プログラム展開

神奈川県では、自然と接することのできる日帰り型施設として、県立自然保護センターを挙げることができます。ボランティアの指導による自然観察を中心としたプログラムを展開しています。しかし、ゆっくりとした数日間の時間をかけたプログラムを実施するためには、宿泊型の施設が必要となります。

宿泊をとまなう事業展開で、メリハリのある流れを作ることができます。最初に、利用者の緊張した気持ちを解きほぐす交流ゲーム（アイスブレイキング）を行います。気持ちがほぐれると同時に、利用者同士、指導者と利用者との関係が和らぎ、お互いに意見交換や質問などがしやすくなります。そういうステップを踏んだ後に、テーマに沿ったプログラムを行えば、より効果が期待できます。もちろんこのような展開は日帰りのプログラムでもできますが、宿泊することで、余裕を持ったプログラムを組むことができるのです。

夜間のプログラムを取り入れたとき、宿泊施設で実施した方が充実した展開ができます。例えば、ペルセウス流星群の観察をするプログラムを考えたとき、極大となる真夜中に、ゆっくり観察し、朝は遅く起床して、翌日の真夜中に再び観察を実施するという展開が考えられます。宿泊施設ならではの展開



例です。

また、バードウォッチングなどのプログラムを展開する場合、早朝から活動することになります。そのためには、前日宿泊して、早朝出発することになります。

指導者養成の事業を展開する場合も、数日間の連続した時間の中で、講義と実習を組み合わせた方が中身の濃い、テーマに沿ったまとまったプログラムを展開することができます。

このように、バリエーション豊かなプログラムを展開するためには、やはり宿泊型の施設でなければなりません。

## (2) 利用者の人間関係

宿泊することの二次的な効果として、公募の事業などで、初めてあった参加者同士で、日帰りでは得られない人間関係が生じます。寝食を共にすることで、オブラートに包んでいた自分を少しずつさらけ出し、お互いに認めあうことができます。特に自然の中で、必然的に協力し助け合う生活を続けることで、信頼関係も生まれてきます。



自然とふれあうだけでなく、人ともふれあうことができるようになります。環境教育を展開する上で、ともすれば忘れられがちな人間と人間の関係を理解し、よりよい人間を育てていくということもここではできるのです。こうした中から参加者の主体的な意志によるサークル活動などが始まる可能性も生じます。

## (3) 職員の関わり

神奈川の県立青年の家の職員の関わり方には、独特なものがあります。

まず職員は、食事をするときもそれを片づけるときも、施設利用者といっしょに行います。また宿泊

して、指導にあたります。そうすることで利用者との距離が縮まり、「指導する」「指導される」という関係を越えて、同時に体験すること、感動を共有することで、より効果的に伝えたいことを伝えることができます。

教育者・指導者として、自らが率先して動くことにより、言葉よりも行動で示す姿勢を保ちます。

このような関わり方をすることによって、雰囲気作りができ、数日間のプログラムが非常にスムーズに流れるようになります。

## (4) 食事提供方式

基本的には、自炊の施設ですが、希望により業者による給食方式にすることもできます。

「食」は生活する上の基本です。自炊することで、生活体験ができます。また、今回のプログラム(後述)のように、食事の準備片づけを含めて環境学習となるものを取り入れることができます。

## 4 事業の内容

### (1) 企画・準備

自然環境を把握するために、日常的に施設周辺を散策しているので、転勤1年目に季節ごとの変化もつかんでいました。したがって、すでに12月には、5月という時期を考えた企画の構想ができていました。1月の段階で起案をして、3月には広報しました。広報先は、県立高等学校、私立高等学校、県立短大、伊勢原市周辺の大学、市内中学校、周辺市町村広報、タウン誌、以前の事業参加者です。

### (2) 募集要項の内容

- ① 日時 1997年5月10日(土)～11日(日)  
(1泊2日)
- ② 集合場所・時間 日向薬師バス停 午前10時  
(伊勢原駅発9:05, 30に乗ってください)
- ③ 場所 神奈川県立伊勢原青年の家
- ④ 対象 中学生以上の青少年
- ⑤ 定員 20名(先着順)
- ⑥ 参加費 500円(保険料等、交通費は含みません)
- ⑦ 申し込み方法 申込書に必要事項を記入の上、下記まで郵送(FAXでも可)で申し込んで下さい。(未成年者は保護者承諾書が必要です)  
〒259-1101 伊勢原市日向2191  
県立伊勢原青年の家

TEL. 0463-93-4313

FAX. 0463-93-4312

- ⑧ 携行品 弁当(5/10の昼食)、運動靴、野外活動に適した服装、雨具(傘、カッパ)、軍手、着替え、タオル、洗面具(石鹸も必要)、常備薬、健康保険証またはその写し、筆記用具、サブザック(水筒を入れる)、水筒、双眼鏡(お持ちの方のみ)

(3) 用意した物品等

双眼鏡、ルーペ、糸、針、おもり、ニジマス、アブラハヤ

双眼鏡、ルーペは、県立津久井青年の家より借りました。糸、針、おもりは購入しました。


魚についてですが、この辺りは日向川の源流部にあたり、元々はヤマメ、アブラハヤなどが生息していたと考えられますが、現在はほとんど見る事ができません。そこで、アブラハヤは職員が下流部で捕獲し、ニジマスは近くのマス釣り場より購入し、放流しました。

(4) 教材・しおり

『リバーウォッチング パートⅡ』(神奈川県環境部水質保全課)、指標生物による水質判定早見表(『環境学習ハンドブック(大阪府環境政策課)』)

『リバーウォッチング パートⅡ』は水質保全課より50部送ってもらいました。

(5) 日程・内容

5月10日(土)		5月11日(日)	
6		起床・洗面	6
7	目覚めは、 鳥のさえずりで!	バードリスニング(お散歩)	7
8		朝飯づくりだ! Breakfast	8
9			9
10	受付 青年の家まで移動	バードハイク & 野草・山菜採集 山の幸に感謝しよう!	10
11	開会式・オリエンテーション・ゲーム		11
12	Lunch Time(弁当だ!)	Lunch Time アウトドアクッキングⅡ 野草・山菜の天ぷら	12
13	係の打合せ		13
14	川の中をのぞいてみよう どんな生き物いるかな?	ふりかえり、清掃、片づけ	14
15		閉会式 解散	15
16	釣って、さばいて、食う 釣り竿づくりから始めよう	伊勢原駅行のバス 15:25、15:44、16:25	16
17	Dinner アウトドアクッキングⅠ ニジマス料理だ!		17
18			18
19	闇の森の中で聞こえる音は 何だ!生き物たちの息づかいを感じてみよう!		19
20			20
21	入浴		21
22	消灯		22

今回のプログラムの特徴は、五感で自然に接することで、山の生き物を実感し、山の幸に感謝することのできるもので構成しました。人間が山(自然)の中では、特別なものではなく、主役は元々山に生きている生き物だということや、人間は自然に生かされていることを理解させます。

① ネイチャーハイク

集合場所のバス停から青年の家まで、徒歩で約30分かかります。その間の道沿いに野草の花が咲いています。その花を題材にして『フラワーネーミングコンテスト』というプログラムを実施しました。

歩きながら指導者である私が花を指定し、その花に自分で考えた名前を各人につけてもらいました。もし本当の名前を知っていても、異なるオリジナル

の名前をつけてもらうというもので、花の特徴をよく見てつけることとなります。感性を育てるとともに、普段見落としがち身近な野草を観察するきっかけとなります。そして、各人がつけた名前を一覧表にして張り出しました。その後コンテストを行う予定でしたが、時間がなくてできませんでした。最後に本当の名前も発表しました。

② 交流ゲーム

青年の家に到着後、外の広場で交流ゲームを実施しました。自己紹介を兼ねたゲームで、お互いのニックネームを覚えてもらえるようなものでした。

③ 釣って、さばいて、食う

釣り竿を自分で作り、釣った魚を自分でさばい



て、料理して食べるというプログラムです。

まず、糸に針をつけます。その後、竿となるシノダケを取りに行き、釣り竿を完成させます。そして川で石をめくり、水生昆虫を採り、それを餌として釣りをします。この餌とりの際に、水生昆虫観察をします。採ったものを『リバーウォッチング パートII』で、種の同定をした後に、『指標生物による水質判定早見表』を使って、水質を判定します。

この後に釣りを開始します。自然の状態では川に魚がいれば問題はないのですが、いない場合は放流することになります。釣ったさかなをさばくことによって、「生き物を食べる」ということを考えてもらいます。そして、魚を食べることで、水生昆虫から人間までの食物連鎖についても実感できます。

#### ④ 闇の森の中で聞こえる音は何だ！生き物たちの息づかいを感じてみよう！

森の中で、電灯を消して一人一人間隔を開けて座り、15～30分間森の中の音を聞きます。そして、施設に帰ってからイメージした絵を描き、感想を述べ合います。

今回の事業では、その前のプログラムが長引いて、実施できませんでした。そこで、広場（非常に暗い）に座り、星を眺めながら『伝説の星座』というプログラムを実施しました。各人オリジナルの星座を考え、星座にまつわるお話を考えてもらい、それぞれ発表しました。

#### ⑤ バードリスニング（お散歩）

早朝、鳥がさえずりを始める頃に、散歩しながら、鳥の声を聞きます。ここでは『鳥の歌声コンテスト』というプログラムを実施しました。これは、さえずりを聞いて、各人その音を日本語にします。その後、それを文章にします。つまり、オリジナル

の聞きなしを作るというものでした。

#### ⑥ バードハイク&野草・山菜採集 山の幸に感謝しよう！

出発前に、双眼鏡の使い方と観察の注意をしました。歩きながらバードウォッチングをしますが、途中で食べられる野草と食べられない野草を見つけたときに、説明しました。その際、野草採集のマナーとして、採りすぎないことと根からは採らないことをあわせて注意しました。

折り返し地点で再度食べられない野草（毒草）について説明した後、各班にビニル袋を渡し、それぞれ採集しながら、青年の家まで戻りました。

#### ⑦ 野草・山菜の天ぷら

青年の家に戻ってきた班ごとに、採集してきたものを私が見て、毒草や食べられない野草は捨てさせ、食べられるものだけを料理させました。



#### (6) 安全管理

事前に十分な下見を実施し、フィールド内に危険な場所がないか、安全確認をしました。

水生昆虫採集や釣りの際は、活動範囲を限定し、危険な場所は避けました。また活動中は、全体に目を配ることも忘れませんでした。夜の活動でも、活動範囲を限定し、あまり広い範囲での実施を避け、何かあった場合でもすぐに対処できるようにするつもりでした（実際にはこのプログラムは未実施）。野草・山菜採集&天ぷらについては、毒草についてきちんと説明するとともに、実際に採集してきたものを選び分け、慎重に進めました。



5 まとめ

(1) 参加者

	中学生	高校生	大学生	一般	計
男	0	0	1	1	2
女	5	9	0	1	15
計	5	9	1	2	17

中1:3名、中2:2名 ← 市内中学生  
 高2:9名、一般のうち1名は青少年施設職員

(2) 所感

一日向の環境を生かした季節感のある事業をやってみたかったので、そのことに関しては満足しています。対象としては中高生をねらっていましたが、そのとおりにになりました。特に高校生は積極的に取り組んでくれ、しかも楽しみながらプログラムをこなしていました。初めての体験がほとんどという感想が多く、いかに普段自然とかけ離れた生活をしているのかがわかりました。

自然とのつきあい方を忘れてしまった現代人（特に若い世代に）、その本来のあり方を学んでほしいと思います。



(3) 今後に向けて

私の次の職場は現時点では決まっていますが、もし社会教育施設に勤務することができるのであれば、今回紹介したような環境教育を目的とした事業をさらに充実させて展開させたいと考えています。今回は、1泊2日という短い日程で実施したわけですが、ふりかえりの時間をゆっくり取ることができませんでした。この内容であれば、2泊3日で実施してもよいでしょう。

施設の立地条件によっては、プログラムが限定されがちですが、一つの施設だけで考えるのではなく、他の公立施設や民間団体、個人と連携してより効果的な事業を展開する必要があります。また、施設職員の資質を向上させるために、研修機能の充実も必要です。行政の役割として、今後環境教育を目的とした施設を充実させるとともに、専門的な知識技術を持った施設職員を配置していくことが望まれます。



特集

# 「武蔵野自然クラブ」の流れと動き

東京都武蔵野市野外活動センター 須田 孫七

## 1. はじめに

「青少年の健全育成」「自然を見よう、知ろう、学ぼう」「いきものは地球の友達」と市民に呼びかけ発足した「自然クラブ」も25歳となった。クラブを巣立った児童生徒は約千数百名、フィールドで歩いた距離は延べ3000キロに達した。クラブ員は、大自然を教科書に野山をグラウンドにしてウォッチングしてきた。その結果、修了生の中からは多くの自然系の専門家、ナチュラリストが生まれている。25年の年月には紆余曲折、栄枯盛衰もあったが、事業担当者、講師、市の担当者等々の努力により、その流れは止まらず現在に至っている。

## 2. 経過

昭和48年6月 自然科学クラブ昆虫教室・植物教室発足。市内在住在学の小学5年以上中学3年、定員各50名、年間20回開催。

昭和49年5月 自然クラブと名称変更。昆虫教室の申込者多数のため、ジュニアクラス50名、シニアクラス50名とし、中学3年までとする。

昭和50年5月 植物教室を止め、野鳥教室を定員50名で新設。

昭和50年8月 神奈川県丹沢弥勒山荘付近でキャンピングワーク実施。

昭和51年8月 山梨県道志の森キャンプ場周辺でキャンピングワーク実施。

昭和53年6月 年間22回開催。昆虫教室OB高校生をアシスタントに起用。

昭和55年6月 希望者多数のため、本年のみ中学3年生はカット。年間20回開催。

昭和55年8月 山梨県河口湖にキャンピングワーク地変更。

昭和58年4月 年間16回開催。

昭和58年7月 長野県川上村武蔵野市立自然の村でキャンピングワーク実施（56・57年は台風のため中止）。

平成2年5月 野外活動センター開設にともない、事務局が移る。

平成5年8月 昆虫教室20周年記念「世界の昆虫

展」を開催。

平成6年5月 広く自然を見る目を育成するため、昆虫教室・野鳥教室を廃止統合し、名称を「武蔵野自然クラブ」とする。内容も昆虫・野鳥・植物・水生物・天文・地質・化石等とし、12回すべて野外活動とした。

平成7年12月 長野県豊科町でキャンピングワーク実施（追加事業）。

\*年間開催日数は変動するが、キャンピングワークは毎年実施。ルームワークを減らし、フィールドワークを増やす。61年～63年16回、平成元・2年13回、3年7回、4年11回、5～9年12回。

## 3. 平成9年度のプログラム〈事業の事例として〉

### (1) 募集ちらしより抜粋

- ・目的 野鳥・昆虫・植物・天体など自然全体の仕組みを理解し、体験することと合わせて、環境問題等についても理解し、自然を大切に生育む子供を育成する。
- ・対象者 武蔵野市内在住・在学の小学校5年生～中学校3年生
- ・定員 50名（定員を超えた場合は、新規申し込み者を優先とする）
- ・参加費 3000円
- \*観光バス利用の交通費は一部個人負担となります。
- \*鉄道利用の交通費、入館料、入園料は個人負担となります。
- \*キャンピングワークの費用は別途負担となります。

[平成9年度の応募者は42名（小学生32名・中学生10名）]

[参加者には、希望により、双眼鏡、携帯用野鳥図鑑、昆虫採集用具一式を1年間貸出]

### (2) 講師<レギュラースタッフ>

須田孫七 昆虫・植物

- ……野外活動センター嘱託  
 田植豊實 野鳥・植物  
 ……都立野川公園野鳥観察指導員  
 田村正子 理科・生活  
 ……武蔵野市立第六中学校講師  
 小川賢一 昆虫・野鳥  
 ……聖マリアンナ医科大学講師  
 井口豊重 野鳥  
 ……武蔵野市立第六中学校教諭  
 石井雅幸 地質・水生物  
 ……府中市立府中第一小学校教諭  
 水嶋勝美 天文  
 ……武蔵野市立第四中学校教諭  
 鈴木 斉 昆虫  
 ……八王子市立中山中学校教諭  
 林 禎久 昆虫・水生物  
 ……東京学芸大学附属大泉小学校教諭  
 須田真一 昆虫・植物  
 ……建設省土木研究所緑化生態研究室研究員  
 小峰史義 野鳥・動物  
 ……自営

[専門外の分野については必要に応じて講師を委任]

### (3) フィールドメニュー (40ページ)

#### 4. キャンピングワーク<宿泊事業の事例として>

「自然クラブ」の目的を達成するのに、前述の「経過」にあるように、昭和50年より宿泊を伴う事業を実施している。初期の頃は目的にあわせて宿泊地を選んでしたが、「武蔵野市立自然の村」設置後はこの施設を利用している。

自然の村は昭和57年、青少年の野外活動施設として長野県南佐久郡川上村に開設された。標高1500mの村内に千曲川の源流が流れ、金峰山麓に位置し、その面積は東京ドームの10数倍を有している。

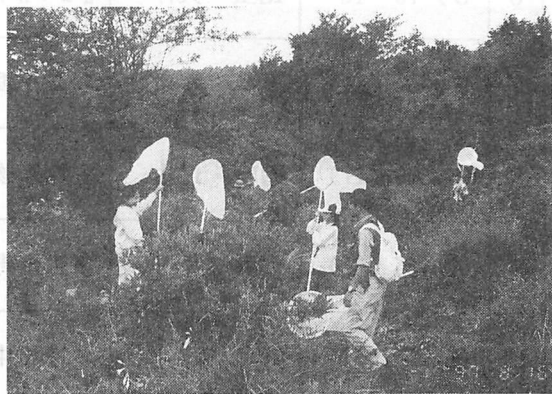
施設は、中央棟（食事は賄いつき、二段ベッド、ホール、集会室、浴室あり）、20数棟のキャビン棟（ログハウス、自炊、浴室なし）、管理棟、雨天集会施設、キャンプ場、星の広場、太陽の広場、遊歩道、ハイキングコースがあって、大自然を満喫できる。特に隣接して高くそびえる屋根岩の大岸壁は素晴らしい。

クラブ員は毎年中央棟に宿泊し、自然学習を実施している。形としてキャビン棟に泊まり自炊も可能

だが、目的が動植物との触れ合い、自然との対話、東京周辺でできない観察や実験なので時間が足りず、自炊等通常のキャンプでの動きはしていない。しかし、当施設を利用する大半のクラブ員はキャンプをメインとした事業「ジャンボリー」に参加している。

より多くの経験を求める子供は、野外活動センター主催の「ファミリーキャンプ」（キャビン棟を使用して親子キャンプ）、「チャレンジキャンプ」（キャビン棟使用、テント、ビバークも体験、屋根岩登攀、金峰山登山、中・高生対象）がある他、冬期は自然の村をはなれて野沢での「スノーキャンプ」、安曇野で「白鳥観察と自然散策」、海外では「シベリア・バードウォッチング」「シベリア自然体験」等のメニューがある。

自然の村は秩父多摩国立公園に立地し、シラカバ、カラマツ、シャクナゲ、ミズナラの原生林に覆われ、シカ、イノシシ、ヤマネ等も生息している。以前は村をベースとして松原湖、八ヶ岳山麓等に移動しクラブ活動をしていたが、移動にかかる時間の無駄、移動地の環境変化によって、現在は村内と隣



美の森山でマーキング用のトンゴ採集



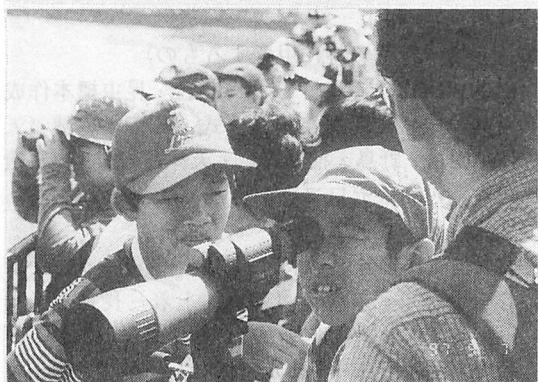
千曲川源流で昆虫採集

## 平成9年度「自然クラブ」日程表

回	月 日・曜日	内 容	行き先・会場	(雨の場合)	参加人数
1	5/11(日)	開講式・自然	市民会館・多摩川中流	(郷土の森)	35/83%
2	6/8(日)	昆虫・植物	八王子城址・裏高尾	(高尾自然科学博物館)	27/64%
3	6/22(日)	海岸動物	観音崎海岸	(観音崎自然博物館)	26/61%
4	7/6(日)	昆虫・植物	青梅丘陵	(科学技術館)	24/57%
5	7/20(日)	化石・岩石	長瀨	(県立自然史博物館)	26/63%
6	8/16~18	昆虫・天体	自然の村キャンピングワーク	(自然の村)	32/78%
7	9/7(日)	野鳥・水生物	谷津干潟	(谷津干潟自然観察センター)	31/76%
8	10/19(日)	動物・昆虫	多摩動物公園	(多摩動物公園)	25/61%
9	11/16(日)	野鳥	東京港野鳥公園	(東京港野鳥公園)	19/46%
10	12/7(日)	野鳥	多摩川中流	(多摩動物公園)	17/42%
11	1/25(日)	野鳥	菅生沼	(県立自然博物館)	23/56%
12	2/8(日)	閉講式・野鳥	市公会堂・井の頭公園		26/63%

8/9	キャンプ体験	総合体育館大会議室	5/6	講師打合せ会	総合体育館
9/28	室内学習	"	8/9	"	総合体育館
12/14	"	"	2/8	反省会	市公会堂
12/26~27	白鳥観察	安曇野			
1/15	市民探鳥会	井の頭公園(中止)			

接の「村立ふれあいの森」をフィールドにしている。



多摩川中流バードウォッチング



白鳥観察と自然散策（安曇野）

#### 5. 平成9年度キャンプワーク<最近の事例として>

本年度の「しおり」から抜粋し、「武蔵野市立自然の村」でのキャンプワークの実態を示したい。

平成9年度 第16回自然クラブ  
自然の村キャンプワーク

◇日時 平成9年8月16日（土）～18日（月）

8月16日（土）午前7時30分

武蔵野市役所北側駐車場集合・出発

18日（月）午後5時

武蔵野市役所北側駐車場解散（予定）

◇場所 8月16～18日：長野県川上村・武蔵野市立自然の村

16日：八ヶ岳高原美しの森

18日：川上村ふれあいの森

◇講師 7名（須田孫七・水嶋勝美・田村正子・石

井雅幸・須田真一・鈴木 斉・小川賢一）

◇内容

①八ヶ岳高原および川上村の動植物の特徴の観察

② 〃 昆虫観察・採集・標本作り

③惑星および夏の星座、流星群の天体観測

◇日程 1日目（8月16日（土））

7：30 武蔵野市役所北側駐車場集合・出発

調布IC→中央道（途中、SAにて2回トイレ休憩）→須玉IC

10：30 美しの森着（高根荘駐車場）、全員で展望台まで移動・人数確認・昆虫採集・自然観察  
<展望台にて現地での諸注意>

①行動は3人以上のグループで行うこと（3人のうち1人は時計を持っていること）

②昼食の時間は特に指定しないが、必ず展望台で食べる

③現地では引率の指導者の指示に必ず従うこと

④指定した行動範囲を守る

14：30 展望台集合（時間厳守）・人数確認・駐車場まで移動

15：00 美しの森発

16：00 川上村・自然の村着

施設の利用・宿泊についての諸注意

荷物の整理・入浴・自由時間・スタッフ天体望遠鏡設置

18：00 夕食

19：00 天体室内学習

19：30 天体観測（太陽の広腸）（～21：30）

—希望者は延長可—

\*21：30～肝だめし（雨天の場合翌日）

22：00 希望者は昆虫標本作成と夜間採集（～23：00）

22：30 消灯

2日目（8月17日（日））

7：30 起床

8：00 朝食・1日の日程説明・水筒の麦茶の準備（前夜に準備）

9：00 自然の村発

本隊：白樺の森→展望台→ふれあいの森（昆虫採集・自然観察・自由行動）ふれあいの森内の東屋を本部とする

別動隊：中央棟→屋根岩→ふれあいの森（希望者がいる場合）

<現地での諸注意>



①3人以上のグループで行動すること（3人のうち1人は必ず時計を持っていること）

②指定した行動範囲を守ること

③引率の指導者の指示に必ず従うこと

12:00 昼食 全員、本部の東屋に集合すること・人数確認

昼食後、自由行動

14:00 本部の東屋に集合（時間厳守）・人数確認 ふれあいの森発 ふれあいの森内を通り→ダム湖→自然の村

16:00 自然の村着

入浴・自由時間

18:00 夕食

19:00 天体室内学習（ビデオ）・天体観測（太陽の広場）－希望者は延長可

\*前日に肝だめしができなかった場合は天体観測後に行う

22:00 希望者は昆虫標本作成と夜間採集（～23:00）

22:30 消灯

3日目（8月18日（月））

7:30 起床

8:00 朝食・1日の日程説明

8:45 片付・室内清掃

9:30 自然の村内での自由時間・昆虫採集・スタッフは天体望遠鏡撤収

11:30 昼食（自然の村中央棟にて）

12:30 自然の村発

須玉IC→中央道（途中、SAにて2回トイレ休憩）→調布IC

17:00 武蔵野市役所北側駐車場着・解散

◇講師の役割について

須田孫七（総括責任者・事務局・自然観察と昆虫採集指導）

水嶋勝美（天体学習と観測指導・生活指導）

田村正子（自然観察指導・生活指導・救護・健康管理）

石井雅幸（生活指導・昆虫観察と採集、標本作成指導）

鈴木 斉（生活指導・昆虫観察と採集、標本作成指導）

須田真一（昆虫観察と採集、標本作成指導）

小川賢一（昆虫観察と採集、標本作成指導）

\*各講師はフィールドにおいてはトランシーバーで絶えず相互に連絡をとる。

◇費用 7,000円

◇持ち物（野活で特に用意するもの）

KENWOODトランシーバー4台・昆虫標本作成用具一式・夜間採集用具一式・ビデオ各種（天体・山岳・野鳥・植物等）・天体観測器具（望遠鏡等）・赤いセロファン用紙・はさみ・輪ゴム（個人）

お弁当（16日分）・水筒・防寒着（セーターカトレナー）・着替え（下着・上着ー長袖や半袖ー・長ズボン・靴下）・パジャマ（ジャージが便利）・洗面用具・タオル・エチケツト袋・ティッシューパー・健康調査票・保険証のコピー・個人用の薬・しおり・雨具（折りたたみ傘やカップ）・帽子・軍手・レジャーシート・サブザック・懐中電灯・筆記用具・フィールドノート・双眼鏡・昆虫採集用具（捕虫網・三角ケース・殺虫管・三角紙）・ベルト・ビニル袋・空のフィルムケース・おこづかい（2,000円以内）

◇雨プロ：1日目が雨の場合、野辺山の宇宙観測所へ行く・美しの森は3日目に変更

2日目が雨の場合、各講師に20～30分程度の話（話題は自由）をしてもらう。

天体観測時に天候が悪い場合、室内での天体学習・ビデオの後、昆虫標本の作成へ移る

説明会

日時 8月9日（土）午前10時～

会場 大会議室

講師 須田孫七・小川賢一・石井雅幸（3名）

講師打ち合わせ会 8月9日（土）午前9時～

キャンピングワーク参加講師・職員7名（予定）

## 6. 安全対策

幸いに25年間無事故で経過しているが「備えあって憂いなし」、安全対策は常に大きく配慮している。

### (1) 実地踏査

事前の下見は、新規フィールドやコース変更予定地等は必ず実施しているが、自然の村のように、現地に常住職員がいる、毎年同じスケジュールでのフィールドは、原則として実施していない。但し現地の状況について諸機関と電話による確認、FAXによる情報等の収集・確認・分析は必ず実施してい

る。

(2) 健康管理

クラブ加入時に健康調査票の保護者による記入をしているが、宿泊を伴う事業では事前3日より健康調査票を記入し、当日提出を求めている。なお確認の意味で「保険証」のコピーも同時提出としている。

(3) 緊急連絡

通常のフィールドワークでは携帯電話、トランシーバーにより連絡をカバーしているが、キャンプワーク時は「緊急対策本部・緊急連絡網」を作成している。

7. 平成9年度「自然クラブ・アンケート」結果<閉講式で回収>

平成9年度 「自然クラブ」アンケート結果  
平成10年3月1日

(1) 回収率 75.6% (41枚配布・31枚回収)

(2) 出席率と不参加理由

\* 出席率

小学5年生	69.9%
小学6年生	64.5%
中学生	51.7%
全体	63.1%

\* 不参加理由

① 学校行事 (部活、テストを含む)	31.5%
② 家庭の用事	27.6%
③ 学習塾、習い事	21.6%
④ 病気、体調	19.8%

(3) 良かったフィールド

① 自然の村	25.6%
② 観音崎海岸・博物館	15.9%
③ 多摩動物公園	14.6%
④ 長瀬・博物館	12.2%
⑤ 谷津干潟	9.8%
⑥ 多摩川河口・野鳥公園	7.3%
⑦ 菅生沼・博物館	7.3%
⑧ 八王子城址・裏高尾	6.1%
⑨ 多摩川中流・是政	1.2%

(4) 興味を持った分野

① 昆虫	25.0%
② 野鳥	21.8%
③ 干潟	9.2%

④ 植物	8.8%
⑤ 博物館	8.1%
⑥ 化石	6.7%
⑦ 動物園	5.3%
⑧ 天体	4.6%
⑨ 野鳥の足跡	4.2%
⑩ 海草の標本	3.9%
⑪ 岩石	2.5%

5. 来年の「自然クラブ」は？

* 参加したい	58.1% (18名)
* わからない	35.5% (11名)
* 不参加	6.5% (2名)
(不参加理由は転居1名、塾1名)	

6. 感想、要望等 (順不同)

- \* 上野動物園も見学したい／中1女
- \* 動物園見学、干潟、化石を増やして／小5女
- \* 「お盆」の時期は外して下さい／小6女
- \* 「夏休みの自由研究」に役立った／小6男
- \* 「自然の村」を3泊にしてほしい／小6男
- \* いつも塾と重なり残念／中1男・小6女
- \* 博物館の見学時間が少ない／中3男、小5男
- \* 自然を守る大切さが分かった／中2女
- \* 自然保護に興味をもつようになった／中2女
- \* 毎回、驚き、発見の連続であった／小5男
- \* 嫌いだった昆虫が好きになった／小6女・小5女
- \* 標本づくりが楽しかった／小6男・小5女
- \* 他校に友達ができ楽しかった／小6男・小6女

特集

## 高砂エコクラブ

サポーター代表 福岡 清治郎

### 高砂エコクラブの概略

東京都の東の端、江戸川と荒川に挟まれ、中川が新中川と分岐する左岸に位置するのが私たちの住む高砂です。というよりも、フーテンの寅さんで有名な柴又の隣町と言う方がわかりやすいでしょう。下町情緒を残し、高層の建築物が少なく、まだ多くの生産緑地が残されているのが私たちの町の特徴です。屋敷林も点在していて、河川敷や昔からのため池も有り、都会の中としては多くの生物を観察できる環境が整っています。

高砂エコクラブでは、天然生態系、二次生態系、都市生態系を活動の基本に考えています。自然観察、体験学習、消費生活をすべて生態系の中で、どここのパートを担っているのかを常に考えさせています。豊富な自然体験の中から、自然を慈しむ心や生物に対する関心を引き出したり、日常生活の中でも「未来の子どもたちの財産」を守るための消費生活、省エネなどの環境配慮行動を家族と共に考えられるようなプログラムを中心に企画・実施しています。

### 年間実施プログラム

昨年度は、「アサガオ（スカーレットオハラ）によるオキシダント・酸性雨調査」「身近な川の汚染度調査」「ヒヌマイトトンボ調査隊」「水元水産試験場跡地自然観察会」「廃材工作教室」「ゴミ探検隊（葛飾区清掃工場・中央防波堤最終処分場見学）」「水元公園定期観察会」「権八池の魚類調査」「簡易環境家計簿の記入と省エネ」「カンタンのタベ（秋の鳴く虫観察会）」「バスハイク（茨城県立自然博物館と菅生沼バードウォッチング）」を実施しました。小学校二年から中学校三年までの58人の子供達が、わいわい、がやがやと活動しています。

### プログラムへの参加状況

残念なことに、これらのプログラムすべてに参加したのは10人程度で、全く参加しなかった子供達も10人程度います。塾通い、習い事、合唱クラブ、バ

スケッチ・サッカー部、学校関連行事、町会関連行事、受験と、子供達は本当に忙しいのです。

そんな中、恒例となったサマーキャンプが、今年も実施されました。高砂エコクラブの前身は、地域の仲良しクラブでした。環境庁のこどもエコクラブ事業に参加するようになってから、人数が倍に膨れ上がり、活動も多種多様になりましたが、以前から、サマーキャンプや自然観察会、昆虫採集会は実施されていました。

「奥多摩・山のふるさと村&丹波」へは3年続けて行き、「茨城県鶴の岬」「蔵王」「秩父・中津川」と、テント、ケビン、山荘、国民宿舎と施設は違っても、この間に子供達は『自然と遊ぶ』スキルを十分に身につけてきました。

前述のとおり、忙しいこどもたちの時間の中で、夏休みの間に泊まりがけのサマーキャンプのスケジュールを入れるのは、至難の業なのです。帰省、旅行時期や学校のプール、林間学校を除くとわずかの日程しか残りません。行きたい子供たちが行けなかったり、悲しい思いをさせたことが毎年のようにあります。また、見守るサポーターも、お盆前後に無理やりスケジュールをやりくりして仕事の休みを取るのですから、全員が参加することなど夢の夢なのかもしれません。

### キャンプ候補地の選定

親元を離れて寝泊まりするのが不安だった子供達も、今年はリーダーが中学校3年生になり、中心年代が小学校6年生と、たのもしいメンバーに成長しました。事前のミーティングでサポーターが候補地を提示して、子供達にキャンプ地を選定させます。事前に本などからピックアップして、施設パンフレットを観光協会や村役場から郵送してもらったり、サポーターが見つけたものを提示します。海で一度実施しましたが、「身体がベトベトするから嫌だ。」という意見が圧倒的で、それ以後はすべて川のある場所と指定されてしまい、色々な川のキャンプ地を選択するようになりました。アクティビティー数を増やしたり、遊びの自由時間を多く取

るために、テントからキャビンに変更したのも近年の変化です。

キャンプ候補地は、他の行事に参加した際に、「ここなら喜ぶだろう。」という推測で、資料集め・下見を実施しておくのが通例で、キャンプ前にあえて下見は行いません。天候の悪化で全く計画のアクティビティーが実施できなかつたり、台風で道路が閉鎖されて一泊で帰宅したこともあり、子供達が本当に楽しめる臨機応変の対応をしています。

### プログラム作り

環境学習のプログラム作りにあたっては、前年度の反省を踏まえ、例年、以下の事に注意して作成しています。ナイトハイク、源流ツアー、滝壺飛び込み等かなりハードなアクティビティーを体験済みの子供達ですので、冒険的要素が好まれますが、子供達の活発化と反比例して、サポーターの体力の衰えは否めないものです。また、環境学習、環境学習と意図地にならず、本来のサポーター（応援団）として、子供達が普段できない体験を楽しい形で実現できるように心掛けています。

### 宿泊での環境学習アクティビティーの目的

- (1) 日常的でない体験学習をさせる。
- (2) 結論を与えず、自分で考えさせる。
- (3) 一つでも、関心の芽を開花させる。
- (4) 潤滑な人間関係を育む。

### プログラム作りの留意点

- (1) 楽しみながら、吸収できる。

学校の林間学校とは違います。作為的なプログラムより、あるがままを子供達の感性で感受してもらい、その中からつながりを導き出すのが指導者の務めです。押し付けのないアクティビティーを第一に考えてプログラムを組んでいます。

- (2) 持続的な学習効果が得られる。

自然体験の中から、一つでも関心を持ち、自己の興味が広がるように、できるだけ多くの素材を提供します。

- (3) そこでなくては出来ない特性を生かす。

せっかくキャンプに行ったのですから、まわりの環境・自然を最大限に生かしたプログラムやアウトドア・ライフを実践したいものです。

- (4) 本人の自主性・主体性を尊重する。

集団行動という様式の中での生活で、個人行動が

抑制されたり、やりたくないアクティビティーを強制させる事はしません。自由意志を尊重するとともに、継続的な学習効果を得るためにも、最も気を遣う事柄です。

- (5) マナーを徹底させる。

公共のマナーを守るのはもちろんの事ですが、環境教育を実践する中で、自然保護精神と板挟みになる部分が見え隠れします。動植物の採集や自然観察の方法というアクティビティーに関わる部分と、キャンプ地での実際の生活部分です。

高砂エコクラブでは、採集を行います。しかし、手に触れて観察したり、同定が必要な場合、生態の特徴を周知させる場合で、最終的には採集場所に戻します。

飼育をして生態記録・観察記録を取る場合も、地元の生物のみを使用し、キャンプ地からの持ち帰りはしません。

キャンプもそうです。浄化施設の有る無しで、洗うという行為に相当気遣いが必要となります。公共のマナー、自然のマナーは、少し窮屈になりますが、順守させる事が最低限のルールだと思います。

- (6) 危険の回避

プログラム設定の時に、身体の安全確保と野外プログラム実施に際しての危険生物からの回避が大切な課題となります。幸いにも、高砂エコクラブには、2名の上級救命員がサポーターにいます。応急救護と心肺蘇生は熟達していますが、子供達の行動様式は、私たちの想像をはるかに越えたものです。小さな切り傷などは日常茶飯事で、交通事故も含めて家に帰るまで、心の休まる時は有りません。

### サマーキャンプ in 塩原アクティビティー集

#### [実施順]

- ・遊び場マップ製作
- ・樹液のレストラン [樹液トラップ]
- ・酋長の儀式 [ごみ拾い]
- ・暗闇探検クラブ [夜間自然・星観察]
- ・クワガタ探検隊 [灯火昆虫観察]
- ・鳴き声いくつ一早朝バードウォッチング
- ・謎タトレイル
- ・上流探検隊
- ・身近な川調べ [上流編：パックテスト他]
- ・自然観察ビンゴゲーム
- ・赤トンボで遊ぼう [昆虫の採光性実験]
- ・酋長の晩餐 [器作り]

- ・アルミ缶ロウソク作り
- ・クワガタ探検隊PART 2
- ・天体観測
- ・木工工作 [飛だし絵馬]
- ・川の生き物を探そう
- ・大きなプールを作ろう
- ・激流下り [浮輪&ゴムボート]
- ・白然石拾い
- ・自然石アート
- ・身近な川調べ [上流編：パックテスト他]
- ・(後日) 写真、作品を見ながらふりかえり

### 自炊について

キャンプ地によっては、たき火ができなかったり、指定の釜でしか飯盒炊飯ができない場合があります。また、川原などで石囲いをして、流木などで直火をしている光景も良く目にしますが、石が焼けたり煤けたりして残りの状況が悲惨になるので、高砂エコクラブでは、60×100cmの簡易炭皿を使用しています。焼き物は、鉄板や網を使用し、鍋類はプロパンガス使用の廃品利用の3バーナを使用しています。サポーターの一人がプロパンガスを家業にしているので、風呂釜のバーナーとゴトクを改造した全くのオリジナルですが、とても火力が強く、重宝しています。焼け跡も付かず、そのまま消し炭類も持ち帰れるので、自然の中での調理には最適です。

アウトドアでの食事は、本当においしく楽しいものですが、調理だけにすべての時間がとられてしまっただけは何にもなりません。

当初は、エコクッキングだ、自然流だとはやり物のようにアウトドア本に出ている事を随分やりましたが、凝ってみても子供達の反応は期待するほどのものではなく、手早く調理し、おいしく食べられ、ごみも少なく、簡易に撤収できる形になりました。材料も、ほとんどが現地調達です。売られている時の包装紙やパック、発泡スチロール皿はすべて調達時に取り外し、中味だけを準備してあった密閉パックに移し替えてアイスボックスに入れ、キャンプ地にごみを持ち込まない工夫をしています。大量に買うので、「ここに入れて下さい。」というだけでほとんどの店が、肉類なら新たに切り出してくれますし、場合によってはスペースも提供してくれます。密閉パックも、色々な大きさが店頭にならんでいますので、大から小まで組み合わせると、かさ張らずに収まります。漬物や佃煮類は、そのまま出せて、

そのまましまえるので重宝です。

### キャンプ実施覚書

8月9日(第1日)

渋滞に巻き込まれずに現地に到達し、企画書通りにプログラムが実施されれば良いと思っていましたが、お盆の大渋滞に巻き込まれ、目的地への到着が2時間もオーバーしてしまいました。車での移動は、小回りが利き、多くの荷物を運び込めるのですが、これだけは計画実施上の悩みの種です。

実施予定の2つのアクティビティーができず、渋滞にうんざり顔の子供達は早々とプールで汗を流しました。

どうして那須塩原まで来て、プールに行くのかと疑問に思われると思いますが、プールより水がきれい楽しい自然のプールが後に控えているので、前者と後者を対比させるためと、現地での食材調達の為の時間調整なのです。

時間より早くキャンプ場に着き、早々と班別にケビンに入ります。締め切られたケビン内は蒸し風呂状態で、上半身裸になって、空気の入替えやら荷物の運び込みが行われました。ケビン前に車が横着けるという、とても楽な場所です。

炊飯の準備を整えて、早速「遊び場マップ作り」に取り掛かります。ビールの一杯も飲みたい心境ですが、子供達は待ってくれません。

箱の森ブレイパークは、山の片斜面と溪流を利用した広大な敷地を持っています。園内図を持ち、まず自分たちがどこにいるのか、どこに何があるのかを確認する意味で園内をくまなく見て歩きます。園内図のコピーに、大まかな事柄が書きこまれていきます。コナラの多い雑木林、椎茸のホダ木のある森、にじますの池、ショウリヨウバッタの草原という具合に、その場所の特徴を班ごとに書いていきます。コナラやくヌギを見つけると、焼酎と水砂糖、お酢で作られた樹液が仕掛けられていきます。どこに仕掛けたかも地図に書かれて行きます。

1時間ほどで園内を一周してケビンに戻りました。早速、バーベQの準備が整うまで、班ごとの情報を元に「遊び場マップ」が作られていきます。へびの抜け殻、名前のわからない野鳥の羽、サワガニのいた岩とか、多くのフィールドサインがそこに表



現されます。違う班にいて見られなかった子供たちは、翌朝の自由時間に確認に行きます。明日何をするか、どこが楽しいか、子供達は消灯になった後も語っているのです。

バーベQの準備も整い、「酋長の儀式」が始まりました。新聞紙でめいめいにインディアンハットを作り、ケビンの回りの「自然のもの以外の物集め」が始められます。いわゆるごみなのです。禁止のほずの花火の燃えかすやタバコの吸い殻、空き缶など結構な量になります。燃える物、燃えない物、燃えると有害な物、自然の物（時として枝などを持ち帰る）に分けて、酋長の言葉が始まります。

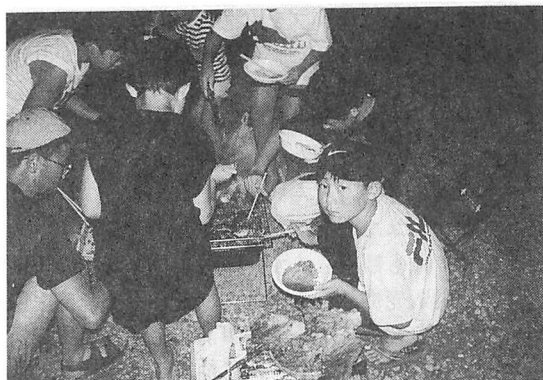
「山の神よ、少しだけきれいになった。明日も山を大切に。みな無事に過ごせますよう、明日も良い天気でありますよう、お願いします。マラムサマダー」

とおおげさに言って、おまじないのマラムサマダー（これはアドリブで、何でも良い）を全員で繰り返し、拾って来た燃える物を炭皿にくべます。帽子の新聞紙も丸めてくべられ、上に薪と炭が置かれます。そして、点火します。炭着火ペーストのおかげで、炭も楽に火起こしできます。



酋長の儀式「山をきれいにしよう」  
—燃えるゴミを燃やしてます—

バーベQは、網と鉄板の上に、自由に好きな物を置いて食べるバイキングスタイルです。私たちは紙皿を使いません。コッヘルやアルマイト、セラミックの器に、塩化の表示のない燃やせるラップをかぶせて使用します。食べ終わっても、その場で燃やせて、水も使わず、拭くだけで後処理も簡単です。



ケビン前 バーベQバイキング



ケビン前 夕食後光景

後片付けの終わった班から、布団敷き、人浴をし、再び全員が集めたのが8時半です。「暗闇探検クラブ」の始まりです。サポーターが一人ずつ付き添った4班が、大草原を目指します。全員が、虫よけスプレーをします。ここで持って行って良い物は、「遊び場マップ」だけです。懐中電灯とトランシーバーをサポーターが持ちますが、何かある時にしか使用しません。キャンプサイトを離れると真っ暗闇になりますが、目が暗闇に慣れるのにそれほど時間はかかりません。虫やカエルの鳴き声、木々のざわめきを聞きながら目的地へ向かいます。昼間なら10分程度で到達できますが、注意深く歩いているので倍を要します。目的地に付くころには完全に目が慣れて、暗闇の中で駆け回る輩もいます。

草原で、思い思いに横になって、山の斜面から天体観測が始まりました。昼間の暑さの温もりのある草地と夜風がとてもさわやかです。すっかり暗闇に慣れた目でみると、数え切れない星や流れ星が見られました。

帰りの道々でトラップを点検しましたが、トラップには虫がいませんでした。管理棟に行き、明かりに集まった虫たちを観察します。子供達の興味の中心は、何と言ってもクワガタやカブトムシです。ミヤマクワガタ、コクワガタ、ノコギリカミキリ、シロスジカミキリとどんどん見つけてきます。アケビコノハやヤママユなど、珍しい蛾やカメムシ類、ウスバカゲロウ類も観察します。高砂エコクラブの子供達は、自動販売機や空き缶捨て、野外トイレに甲虫が集まるのを知っています。事前に土とクヌギの朽ち木を入れたアクリルケースに種類ごとに分け入れます。持ち帰りはしないので、ここにいる間の遊び相手なのです。

興奮覚めやらぬ子供達の尻を叩いてケビンに戻り、就寝となりますが、消灯後も寝ないでいるのはわかっています。それが楽しいのですから、大目に見て邪推なことはしないのが高砂エコクラブ流です。疲れているので、思っているほどの夜ふかしはできないのです。

## 8月10日(第2日)

起床時間には、どこかのケビンも、もぬけの空でした。樹液レストランに甲虫採集に出掛けて、手や衣服にノコギリクワガタやミヤマクワガタをぶらさげて戻ってきます。虫をアクリルケースに入れて、しばらく眺めています。

ケビンの前に座り、たなびくキャンプスペースからの煙を見ながら、「野鳥の声いくつ」を実施しました。早朝は、本当に色々な野鳥のさえずりが聞こえます。ホオジロがたくさん見られました。めいめいに何の鳥であるかフィールドガイドで調べたり、鳥語を解説して、今、何を言っているかを連想したり、サウンドマップの要領で鳴き声を図解化したり、最終的に何種類の声が聞けたかを発表して、朝食の準備にかかります。

作るのは、大まかに切った材料をぶち込んで大鍋で作った豚汁と、鉄板でめいめいが焼くハムエッグと納豆です。ケビン内に炊飯器が有り、飯倉炊飯をしなくて済みます。片付けると同時に、子供達は、思い思いの場所に散って行きます。

9時近くになって戻って来て、身支度を始め、時

間どおりに集合してきます。「謎々トレイル」の開始です。方位磁石と指示書で、向かう方向を決めて、ルート上に隠されたポイントの問題を解く事で、次のポイントに進めます。時差スタートした班は、最後に謎に挑み、ゴールとなります。

指示書は全部で4枚有り、石の下や木の枝にぶら下がっています。NNE60(北々東60歩の意味)⇒右の道を進み、石碑の裏探せなど、それほど難しいものではありません。但し、指示書ごとの問題が結構難問で、「塩原の人の使う方言を一つ調べること」など、売店や管理事務所のおじさんやおばさんに聞かないとわからなかったり、ビジターセンターの展示をくまなく見ないと正解できないようになっています。

そして最後の謎なぞ問題が、「わ□しは、この山に住むものです。早くゴールして、□のしく、□きで遊びましょう。」答えは、タヌキです。

ゴール地点の溪流広場で、子供達は思い思いに遊び始めます。足を入れただけで、汗が引くほど冷たい水です。少しも疲れを知りません。

上流探検に向います。途中ブヨが多い事以外に危険はなく、コンクリートでできた土砂止めまで、全員登りきりました。サワガニがいたり、ミヤマカラスアゲハに出合ったりしましたが、魚は一匹も見かけませんでした。戻って、すぐに溪流の水をガラスボトルに採取し、水温と気温を計り、簡易パケットで水質検査をしました。「身近な川の水をしらべてみよう」の「ほくたちが遊びたい川部門」の川の調査です。周囲の状況をメモしたり写真したりして、帰りに管理事務所で昔の様子を聞きメモしてきます。帰ってから、地元の中川、新中川の水や状況と比較しました。唇が紫色になるほど溪流で遊びました。

戻ってすぐに昼食になります。残っていたサポーターがそうめんをゆでて待っています。テーブルの上に、石や枝で囲んだ枠を作り、ごみ袋を開いた物を置き、冷たい水を張ります。そこにそうめんを放します。大きなそうめん容器が完成します。野菜のてんぷらは、サポーターが作ります。どんどん無くなって揚げるのが間に合いません。そうめんが足りません。サポーターの口に入ったのは、朝ごはんの残りのおにぎりでした。

昼食後からは、子供達待望の自由時間です。園内ならどこで遊んでも良いのですが、全員が川遊びを選びました。

2kmほど離れた溪流に、車で移動して、目一杯遊びます。上流なので、深い淵でも1mの深さしかありませんので、監督する方は楽なのですが、子供達は、岩滑り台とか段々と過激な遊びを開発していきます。

カワトンボを追う者、石囲いを造る者と、子供達の顔がきらきらと輝いています。気温30℃以上の快晴のこの日も、ここだけは天然のクーラーが、がんがんさいています。



箱の森パーク内 溪流広場「我慢大会」

帰りに、夕食の時に使用する器とはしに適した材料を拾います。麓の農家でもらった青竹からスプーンを作りました。おおよその形を、小刀と紙ヤスリで細工するだけで、比較的簡単に作れます。器は、サポーターが事前に準備した塩水に浸けたものを乾燥したホオの葉です。

今夜の夕食は、子供達の大好きなカレーライスです。ジャガイモもニンジンも、子供達が切ったものは様々な大きさや形をしています。水泳のゴーグルをして、王ねぎをみじん切りにして、後は煮込むだけです。

赤トンボ採りが始まりました。ノシメトンボ、マイコアカネ、アキアカネと子供達は、素手でうまく捕まえます。薄く暗くなったケビンの中で、ブラックライト（紫外線ライト10W）を用いた、昆虫の採光性の実験をしました。アクリルケースの中に、トンボやチョウを次々と入れて、アクリルケースの下からブラックライトを当てると、どの昆虫も

必ず裏返しになります。結果を言えば、昆虫たちは背中に採光器が有り、太陽を背に受けて飛ぶことがわかりました。しかし、クワガタムシは反応しませんでした。

「酋長の晩餐」では、昨日と同じくおまじないが唱えられ、夕食が始まりました。カレーのルーに粘りが無い上に、大盛りにするので、ホオ葉からはみ出すものが続出して、途中から器が用意されました。

食後に、ティッシュペーパーとアルミ缶、サラダ油を使った「非常用ロウソク作り」が開けられました。こよりを作り、ハサミで切ったアルミ缶にサラダ油を注ぎ、こよりを這わせるだけの簡単な物です。

べとべとになった手のまま、園内にある温泉へ歩いて行きました。この日は、温泉代がただなので

帰り道も、子供達はトラップや灯火に集まる虫たちを追います。ケビンの前にごぞを敷いて、夜風に当たりながら、アルミ缶ロウソクが次々に点火されます。メラメラとゆれる炎の中で、何が楽しかったか、何を発見したかなどを発表します。

ロウソクの油が無くなる頃には、発表も終わり、ごろりとなりながら星空を見てみると、一匹のホタルが頭上を飛んで行きます。ホタルを追って大騒ぎになりました。近くの林の淵に、山からの細い水の流れがあり、ヘイケボタルが結構いることがわかりました。山間なので、平地より発生が一月ほど遅いのでしょうか。思わぬホタルフィーバーで、恒例の怖い話大会が中止になり、就寝となりました。

#### 8月12日（第3日）

この日は、起きてトラップ回収に行っている者は、一人もいませんでした。疲れたのでしょうか。寝ぼけ眼で起きて、朝食を食べるとすぐ撤収が始まりました。ケビンの内外の清掃をしてから、アクリルケースの昆虫が裏山に放されます。とても名残惜しそうです。

「木工工作教室」は管理棟の木工場で行われまし

た。電動糸ノコヤグラインダー、色つけ用具が用意されていて、専門の指導員が付きっきりで教えてくれます。半分が飛だし絵馬、残りが駒を作成しました。できあがると焼きゴテで烙印してくれます。夏休みの宿題が一つ完成しました。



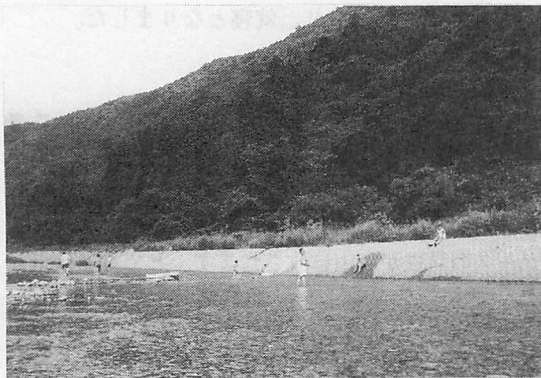
飛び出し絵馬工作

箱の森プレイパークを後にして、子供達が待ち望んでいた男鹿川へ向いました。川原に入る前に、近くの農家にトイレの利用を申し出てから、今日一日のベース基地を開きます。



↑ 男鹿川ベースキャンプ

↓ 現地風景



川の上流と下流にトラロープが張られました。ここから上も下も行き来できない目印と、流された時の用心も兼ねています。アクリルケースに水生昆虫やおたまじゃくし、小魚が次々と入れられ、子供達が図鑑で名前を調べたり、動きを観察したりしました。川虫が多く、魚影の濃い川です。カワゲラの幼虫が一番多く、ついでカジカガエルのおたまじゃくしでした。

次に全員で堤防作りと邪魔な石の移動を行います。堤防は、ボート遊びの終着駅とサポーターの監視所を兼ねています。30分ほどで完成しました。これも最後には、元に戻して帰ります。上流から200mほど流れる天然プールです。途中に急流の難所もありますが、高砂エコクラブの子供達は、流れに乗るテクニックも有り、川の怖さも十分に知っています。



川下り光景

特製うどん（聞こえは良いが、残り物のごった煮）と磯辺焼きを腹に入れてから、「自然石集め」をしました。人の手を加えることなく、その形や色合い、くぼみ具合が動物や人物のように見える石探しです。結構ありそうで無いのです。アヒル、車、家などユニークな物が集められました。

今度は、彩色して見栄えのする石が集められます。大きさは、拳より小さい物という条件付きです。見つけて来た石を乾かしてから、アクリル絵の具で彩色します。野菜や魚、昆虫、低学年はマンガを書く者もいました。

乾く間に、思いっきり遊びました。やはり、子供達はプールより自然の川が好きでした。最後に水質検査をして、農家の人に川の様子を聞いて、キャンプは終了です。



車が走り出して10分もたたないうちに寝息が聞こえます。体力をセーブすることなく遊んだその顔は、満足感で一杯でした。後は安全に帰宅するだけです。



水質調査 中川・高砂橋歩道橋中央

数日後に、写真も出来上がり、地元の「身近な川の水しらべ」を実施し、森林の働きや川の浄化作用を上回った私たちの生活について話し合い、学校へ提出する壁新聞を作りました。



水質調査 新中川・細田橋歩道橋中央



前高砂南町会町会長関根文三氏より昔の川と水の話  
をインタビュー



水質調査 新中川・細田橋歩道橋中央

### 3. むがしの川にふて聞いてみよう

関根文三さんに昔の川の様子を聞こう！  
 こんどは「むがし(30~40年くらい前)はどんな川だったか」しらべます。  
 今みなさんが見ている川の30~40年前のことを知っている人に、下の5つのしつもんをしてみましょう。

④ しつもん1 「むがしの川の水は、今とくらべてどうでしたか？」  
 下の表をつけてみましょう。

今よりきれいだった	かわらない	今よりよごれていた
3点	2点	1点

しつもん2~5は、「2. 川のようすをしらべてみよう」と同じように、次のページを見ながら、むがしの川にあてはまるものをえらんで、点をつけてみましょう。

- ④ しつもん2 「むがしの川の水の量は、どうでしたか？」
- ④ しつもん3 「むがしの川の流れたかたはどうでしたか？」
- ④ しつもん4 「むがしの川のまわりはどうでしたか？」
- ④ しつもん5 「むがしの川で見られた生き物は、どうでしたか？」

さいごに、しつもん1~5の点を、調査用紙の「むがしの川のようす」のところに記入しましょう。

### 最後に

総合的に、アクティビティーとしては、ねらいが絞り切れていなかったり、遊びの要素が相当多いのはわかっていますが、楽しく、美しく、いとおしい場所だからこそ、また行きたくなるのです。自然を大切にすることとか、日常の中での些細な省エネを心がけるといったことも、押し付けなくても自分たちの気づきで実施できることだと思います。

継続こそ力なり。豊富な自然体験が、思い出だけに止まらず、将来の力となることを信じて止みません。

長文で取り留めもありませんが、参考になることが有ることをお祈りして結びとします。

〔資料〕 参加案内 (P52)、  
 計画書 (P53~55)、感想集 (P56)



## 参加者募集のお知らせ

# 1997年サマーキャンプ in 塩原

高砂エコクラブ

恒例の高砂エコクラブ・サマーキャンプのお誘いです。昨年好評でした秩父・中津川の予約が取れず、塩原・箱の森プレイパークのケビンサイトを使用した自炊キャンプです。たくさん楽しいことを準備してあります。もちろんみんなが、大好きな川遊びもできます。どしどし参加すべし！

ご父兄各位へ

藤の花咲く時期に夏休みの話で、少し早いのですが、準備の都合上今月一杯までに恒例のサマーキャンプの参加者募集を行います。日時については、ミーティングで一番参加者の希望に沿った実施日としましたので、ご了承下さい。

日時：1997年8月9日（土）～11日（月）2泊3日

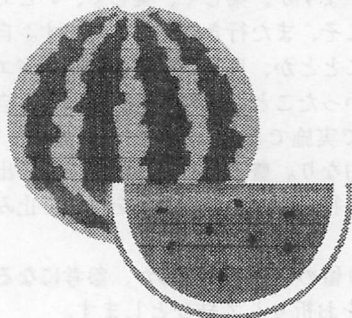
場所：栃木県塩原市中塩原箱の森プレイパーク・ケビンサイト

（緊急連絡網、宿泊地パンフレットは参加費用と引き換えに渡します）

参加費：18,000円（全行程中の食事、宿泊代、交通費、保険料、入材料など）

お申込：5月末日までに福岡サポーターへ電話連絡で可 ☎3657-0229

参加費用は、7月25日までに福岡・白井サポーターまで。




参加対象者：小学校3年生以上

保護者参加の場合は年齢問いません。

サポーター分を差し引いて18名分のスペースしかありませんので、先着18名とします。

キャンセルの場合は、先着順繰り上げとします。

平成9年5月15日



# 高砂エコクラブ 97サマーキャンプ

高砂エコクラブ

日時：平成9年8月9日（土）～11日（月） 二泊三日

宿泊先： 栃木県塩原市中塩原 箱の森プレイパーク ケビンサイト4棟  
連絡先 ケビンへの連絡はできませんので下記携帯電話へ  
☎030-318-5174 会田（緊急時のみにして下さい）

参加者： 小学生14名、中学生2名、幼児1名、保護者2名、サポーター6名

車両： ワンボックスワゴン4台（乗車定員7名×3台＝21名）  
内後部座席除去・荷物専用車1台（乗車定員4名）（総定員数25名）

行程： （9日）往路

高砂・山田珠算塾前-四ツ木I.C=====羽生P.A=佐野S.A=====  
集合5:30 出発6:00 首都高速 東北自動車道(トイレ休憩) 7:40(朝食)

=西那須野塩原I.C-県営西那須野パーク---食料受取-箱の森パーク  
9:40 10:00 トイレ・プール・昼食 14:30 マーケット 15:45

・朝食（おにぎり3個【脱】）、昼食（たぬきそば&うどん）

（11日）復路

箱の森プレイパーク-R400-R121-栃木県塩谷郡藤原上三依大面---  
10:00 出発 10:40 水浴・水質検査・近辺調査・製作・石炭 15:30

-R121-鬼怒川-今市-----高砂

18:00(夕食) 日光宇都宮道路・東北自動車道・首都高速 21:30頃(各自宅)

・昼食（磯辺焼き・特製鍋・焼きトウモロコシ・西瓜・その他）

・夕食（今市市ガスト【エビフライ&ハンバーグライス】）

持ち物： 着替え（長袖・長ズボンを必ず1着入れて下さい。）・替え下着・水着  
バスタオル・タオル2枚・汚れ着袋・帽子・軍手・筆記用具・フィールドノート  
懐中電灯・個人薬品・水筒・お菓子・靴下・溪流で濡れても良い運動靴  
ビーチサンダル・洗面用具・お小遣い（3,000円まで）

不明な点は、サポーターまで電話して下さい。  
尚、飲み物等などで不足の生じた場合後日清算しますので予め承諾下さい。



サマーキャンプ  
アクティビティー

高砂エコクラブ NO.2

【9日】今日は、思いっきり泳いじゃうぞ！

西那須野公園

- 10:05 自然観察ビンゴ（夏の植物と昆虫たち）
- 10:35 アスレチック（オオタカとノウサギの鬼ごっこ）  
オオタカはアスレチックのかけには入れません。ノウサギを2羽捕まえると捕まったオオタカが1羽増えます。最後に残るのは？
- 11:30 昼食・プール 流れるプール、スライダーがあります。
- 14:30 着替えて、正面入り口へ集合、時間厳守！

箱の森プレイパーク

- 16:00 搬入班 ターフ張り、椅子&テーブル、炭コンロ、ガスコンロ設置。  
料理班 材料切り、夕食準備、炊飯。
- 17:00 園内散策（好きな場所探し）・甲虫トラップ仕込み
- 18:00 酋長の儀式（快晴祈願踊り・バーベQ）
- 19:30 撤収・入浴・布団敷き
- 20:30 暗闇探検クラブ（暗闇に慣れよう・星をみよう）
- 21:00 クワガタ探検隊（灯火に集まる虫たち、自販機の虫たち、他）
- 22:00 就寝・消灯

【10日】

- 6:00 起床・床上げ・洗顔
- 6:30 トラップ回収・野鳥観察 朝食はサポーター準備
- 7:30 朝食（とん汁、ハムエッグ、納豆、漬物、佃煮、のり）
- 8:00 撤収、掃除、自由時間 サポーターは先行仕掛け。
- 9:00 謎タトレイル【約1時間】水筒・タオル・水着着用・下着持つ
- 10:00 シラン沢上流探検隊（残り時間は、自由時間）  
水質検査・回りの様子調べ・地元の人に聞いてみよう・水採取  
【バックテスト 1箱（鳥飼用環境保全用殺菌剤）・水漏れ計・採取用具・筆記用具・ガラスボトル1本】
- 12:00 昼食（ケビン前：そうめん、てんぷら【揚げ、ニンジン、キャベツ、玉ねぎ、さくしほじ】）
- 13:30 溪流広場【車で移動】・自由水浴
- 16:00 夕食準備（カレーライス・タマゴサラダ）
- 16:30 赤トンボで遊ぼう（昆虫の採光性と赤トンボの種類）
- 17:00 酋長の晩さん  
（器がなければ食べられない、スプーンがなければ手しなかいぞ！）  
自然食器を探した者から夕食が食べられます。  
【本オバヤナギの虫は、トイレ中にアビール、ベトボトク瓶、消灯使用時はナイフ・注意！！】
- 18:30 アルミ缶で非常用ろうそくを作ろう！
- 19:00 温泉へ行こう！  
帰りの道で、クワガタ探検隊 パート2
- 21:00 ろうそく点火（他の光源はすべて消灯・約30分持ちます）  
ゴザに寝ながらの流れ星観察  
ゴザに寝ながらのこわい話大会
- 22:00 就寝準備・歯磨き
- 22:30 消灯



サマーキャンプ  
アクティビティ

高砂エコクラブ NO. 3

[11日] 箱の森プレイパーク

- 6:00 起床・床上げ・洗顔  
 6:30 朝食準備  
 7:00 朝食 (コンソメ、スクランブルエッグ、ポークウィンナー、サラダ、パン、ジャム、牛乳)  
 8:00 撤収開始、掃除  
 9:00 木工工作 (間伐材の飛だし絵馬 [約1時間])  
 10:00 出発  
 10:40 栃木県塩谷郡藤原上三依大面・鬼怒川上流男鹿川河川敷  
 ターフ、椅子、テーブル、レンジ設営  
 川の生き物を探そう (かじおたまじゃくし、川虫、カゲロウ幼虫、トンボ幼虫)  
 堤防で大きなプールを作ろう!  
 ゴムボートで遊ぼう!  
 12:00 昼食 (磯辺焼き、特製うどん入り鍋、焼きおにぎり)  
 浮輪で流れに乗ろう!  
 色々な石を集めよう!  
 石絵を書こう!  
 15:00 水質検査 [バクテスタ 1箱(島崎区環境保全課提供)・水漏計・採取用具・筆記用具・ガラスボトル1本]  
 15:15 撤収  
 15:30 出発 鬼怒川〜今市間でお土産やに寄ります。  
 18:00 夕食・今市市内ガスト  
 21:30 高砂到着



撤収物一覧

4人掛け折り畳みテーブルベンチ3脚・ターフ2基、ゴザ8畳用2枚、ビニールクロス2枚、簡易テーブル1脚、折り畳み椅子大2脚・3人掛け2脚、ボンボンベッド2脚、ガスランタン3基、乾電池ランタン2基、小型プロパン、鉄板1枚、大網1枚、大鍋2、やかん1、ガスバーナ2基、墨火焼きセット1、木炭1袋、新聞紙(アクティビティ用)1ヶ月分、ゴミ袋(可燃ゴミ用・不燃ゴミ用)、器類(常備バック)・アルミホイール1・サララップ1・ガムテープ1・パン8・医薬品バック1・携帯無線機3台・蚊取り線香バック5・蚊取りマットセット4・フライパン大1・延長コード2・調理器具2家庭分(釘・まな板・お玉・フライ返し・長箸・油取り・その他)、発電機1基・おろし金・アイスボックス4(大2・中2)・製氷皿4・氷かき器1・着火マン1・炭ハサミ・ザル大2・揚げ鍋1・揚げ皿2・ぼろ布1袋・フキン&雑巾類・石鹸・タワシ・スポンジ・他

アクティビティ用

ビンゴカード24枚・アクリル絵の具2セット・絵筆適時・パレット2台・水質検査キット1セット(ガラス2・水漏計1・バクテスタ1箱・顕微鏡2枚)・トラロープ2・大型浮輪・ゴムボート2台・空気入れ・トラップ用樹液・捕虫網50号3本(長竿1)・金魚ネット中4本、大1本・ナタ・ピンセット類・図鑑(野草・昆虫・野鳥・他)・アクリルケース2・フィールドスコープ1基・カメラ2台・虫メガネ5

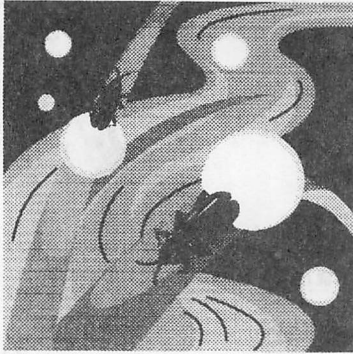
食品(持参品)

調味料(醤油・味噌・マヨネーズ・ケチャップ)・サラダオイル・天ぷら粉1袋・焼き肉のたれ大2本・七味・シロップ1本(メロン)・餅6バック・素麺60束・海苔10帖・コンソメの素1箱・味噌5kg・だしの素1袋・麦茶バック

食品(現地調達)

肉類(牛肉4kg・豚3kg・鳥2kg)・ポークウィンナー大1袋・冷凍いか3杯  
 野菜(もやし大1袋・ニンジン10本・玉ねぎ15個・大根2本・ゴボウ3本・ピーマン2袋・シイタケ2袋・長ネギ3本・レタス3玉・キャベツ3玉・トウモロコシ15本・果物)  
 油揚げ3枚・卵60個・牛乳10本・バターロール大3袋・フランスパン3本・マーガリン1箱・ジャム2缶・米15kg・漬物・佃煮類・ハム5バック





## 97' サマーキャンプ感想集

夏休みも、もう終わりだぞ。ダンボールの恐竜工作教室も終わり、新学期に入つてすぐに「カンタンの夕べ」があるぞ！

サマーキャンプの参加者で、一言コメントを出してくれた会員のコメント集だよ☺  
ちゃんと出すべし☺

中村リーダ-

高校受験なのに、また大遊びしてしまった。宿題は7月中に終わったけど、夏期講習がまた始まった。天国の3日間よ！  
高校生になったら、サポーターで行くぞ☺

たかし

川遊びは、めちゃんこ楽しい。飛び込める滝がなかったのが残念。アユを捕まえたのは、ほくだけでした。素手だぞ。

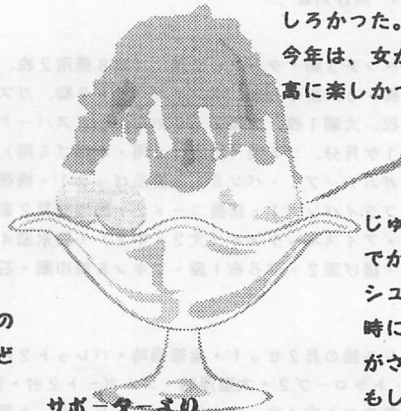
観人ひたあどろする↑ by 福岡

たかとし

ミヤクワ対シロスジカミキリの対決は、おもしろかった。やっぱし川は、最高だ。今年も、女が誰も来なかったの、ほくは最高に楽しかった。

ひろき

ミシシッピーアカミミガメを連れて行かせてくれて良かった。カメも川でめちゃくちゃ泳いだ。また行きたい。星がきれいだった。☆



じゅん

でかい方が、背中についた時に、シユンが助けてくれた。寝ている時に、りょうまくんがパンツをぬがされた。川で遊ぶのが、一番おもしろい。トンボのヤゴと川むしをひろきのカメが、食べた。☺

りょうま

帰って来て次の日からサッカー部の合宿だった。めちゃんこ疲れたけど合宿でも、キャンプの時みたいに、夜、カブトムシとクワガタを探ってしまった。もう、わたくしは名人なのだ。川で流されるのが最高だ。☺

サポーターより

暑いことをひいても、みんな知つてゐるのだ。どうひたあ換ひか、自分たちで決めてゐるんだろ☺

しょうじ

バックテストとなぞなぞトレイルが楽しかった。はじめの川は、水が冷たすぎる。2番目の川は、おたまじやくしや魚がいて、すごくおもしろかった。会田君が草の中にうんこをしていた。そのまま川に、はいつてしまった。川をよごしてはいけななのだ。☺

しゅん

6年生は、ポケモンのゲームをもつて来ていた。自由時間に、部屋に、かくれてやつていた。上流たんけんの時に、ミヤマカラサアゲハが水を飲んでいるのを見て、とてもきれいだった。今年の川は、深くなくて、良かった。☺

## 特集

大分県主催「久住高原エコロジーキャンプ」の  
中間報告

～自治体が主催する自然体験型環境教育事例として～

副会長（日本文理大学助教授） 杉浦 嘉雄

はじめに

大分県（生活環境課）が主催する環境教育活動の一つに「久住高原エコロジーキャンプ（以下、エコロジーキャンプという）」がある。久住高原（＝「阿蘇くじゅう国立公園」の大分県内の高原地帯）という大自然をフィールドとして、5ヵ年計画で平成6年度から毎年2回から4回の頻度で実施されている。平成10年5月時点までに12回のエコロジーキャンプを実践し、延べ約450人余の参加者を得ている。

標準的なエコロジーキャンプは、1泊2日の宿泊体験型キャンプである。その内容は、主に久住高原の豊かな自然や、地元の農に関わる文化、その担い手となっている地元キーパーソンを素材にして、プログラムデザインがなされている。いわゆる感性教育を重視した自然体験型あるいは農業体験型環境教育活動ということができよう。

筆者は、平成6年度当初のエコロジーキャンプから指導者の一人として参画し、以来、エコロジーキャンプの全体進行やプログラムデザインの叩き台作成するなど、この教育活動をほぼ全回を通して“民の立場”で実践してきた。

平成10年度末までエコロジーキャンプが継続的に実践されるため、5年間の実践完了時には、筆者は“主催者側を援助する立場（＝内側）や客観的な立場（＝外側）”からの総合的視点で考察し、最終報告に望みたいと考えている。

ここでは、エコロジーキャンプの中間報告として、できる限り客観的のデータに基づいて次の項目を記述する。

- ①自治体が主催する環境教育事例としての特徴
- ②この事例を含む「地球にやさしいむら推進事業」の概要
- ③エコロジーキャンプの概要
- ④エコロジーキャンプのプログラムデザイン（骨子と具体例）

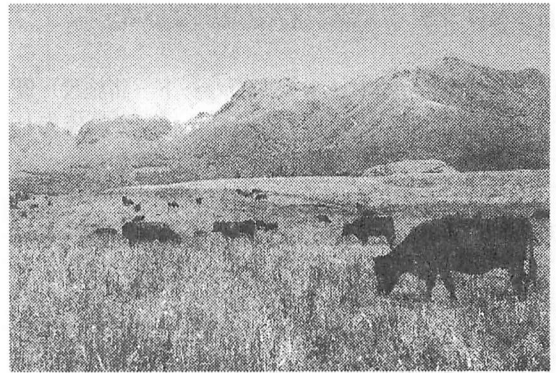


図1：久住高原の風景写真（久住町パンフレットより）



久住町の位置図（久住町パンフレットより）

## 1. エコロジーキャンプの特徴

エコロジーキャンプは、自治体の環境教育事例としては、以下の点が特徴的といえる。

(1) 自治体の諸事例の中では、比較的独創的でシステマティックに運営されている。

大分県知事が提唱する「一村一品運動」の発展型の一つとして「地球にやさしいむら推進事業」という独創的な町づくり活動がある。この事業の詳細は後述するが、その一環として、エコロジーキャンプはシステマティックに組み込まれている。

(2) 多くの自治体にありがちなハード（諸施設）優先ではなく、ソフト（関係づくり）を最優先している。

実践された全エコロジーキャンプについては、既にある町営施設や国民宿舎を現状のまま拠点として活用し、参加者（その多くは、大分市在住などの都市型住民）と久住の豊かな自然や地元農家（＝中山間地型住民）とのふれあいや交流という「関係づくり」に重点を置いている。また、その「関係づくり」とは、『地球にやさしいむら』の直接的な住民である町民（＝『地の人』と定義している）と、『むら』を理解し自発的に協働していこうする間接的な住民（＝時々訪れるため『風の人』と定義している）とを信頼関係で“つなぐ”行為でもある。

(3) エコロジーキャンプの指導について、前半の年度では、大分県はプロ集団（財団法人キープ協会環境教育事業部）に委託していたが、後半では、地元久住町や大分県内のボランティアメンバーで構成された指導者集団（＝エコロジーキャンプの参加経験者による、民間および公務員によるボランティアグループ。名称は「おおいたインタープリターズ」）が主体となって、エコロジーキャンプの企画・準備・運営などを県と協働で実施している。

このように指導者層が地元で発掘された理由として、

①大分県が予めキープ協会との綿密な打ち合せの基づいて地元指導者養成をも含んだ委託内容にしたこと。

②おおいたインタープリターズは指導内容を、大分県は事務局となって安全管理・時間管理・金銭管理を分担するなど、明確に役割分担をしたこと。

③大分県が地元の久住町やキーパーソン、おおいたインタープリターズの協働作業として、常にコーディネーターに努めたこと。などを挙げることができる。

## 2. エコロジーキャンプも組み入れた「地球にやさしいむら推進事業」の概要

「地球にやさしいむら推進事業」における「エコロジーキャンプ」の位置付けを明確にするために、先に「地球にやさしいむら推進事業」の概要を、その後に「エコロジーキャンプ」の概要を説明する。

### (1) 事業の内容等

平成6年3月、学識経験者等11人で構成する「地球にやさしいむら基本構想検討委員会（座長 大分県副知事）」から、大分県直入郡久住町（人口約5000人）をモデルとした「地球にやさしいむら基本構想検討委員会報告」がなされた。

この報告の基本的考え方は、久住町をフィールドにして、P59に示す「農業」「観光」「生活」および「教育」の4分野にわたって、環境保全と地域活性化の両立を目指しながら、関係事業（そのうちの1つをP60～61に示す）を推進するという点にある。大分県および久住町は『地球にやさしいむら』の実現に向けて、各種の施策及び事業を総合的に推進することとしている。

エコロジーキャンプは、以下の推進事業分野において、直接的には、②観光と④教育の関係事業であり、間接的には、①農業を理解・支援するための先行事例と位置付けることができる。

①農業：環境保全型農・畜産業の推進

②観光：エコツーリズムの推進

③生活：生活排水対策の推進、ソフトエネルギーの利用促進

④教育：環境教育・学習の推進

### (2) 事業の展開

平成6年4月から平成9年3月までの『地球にやさしいむら』の各推進事業を、年度毎に箇条書きにする。

平成6年度 パイロット事業の実施  
〈大分県〉

久住町で実施するにふさわしい事業を検討するため、次の4つのパイロット事業を実施した。

# 五感を大切にした文化、風土づくり

キーコンセプト：「<sup>めく</sup>循環」と「響き合い」…… “人” “モノ” “恵み” “知恵” “技” “情報”

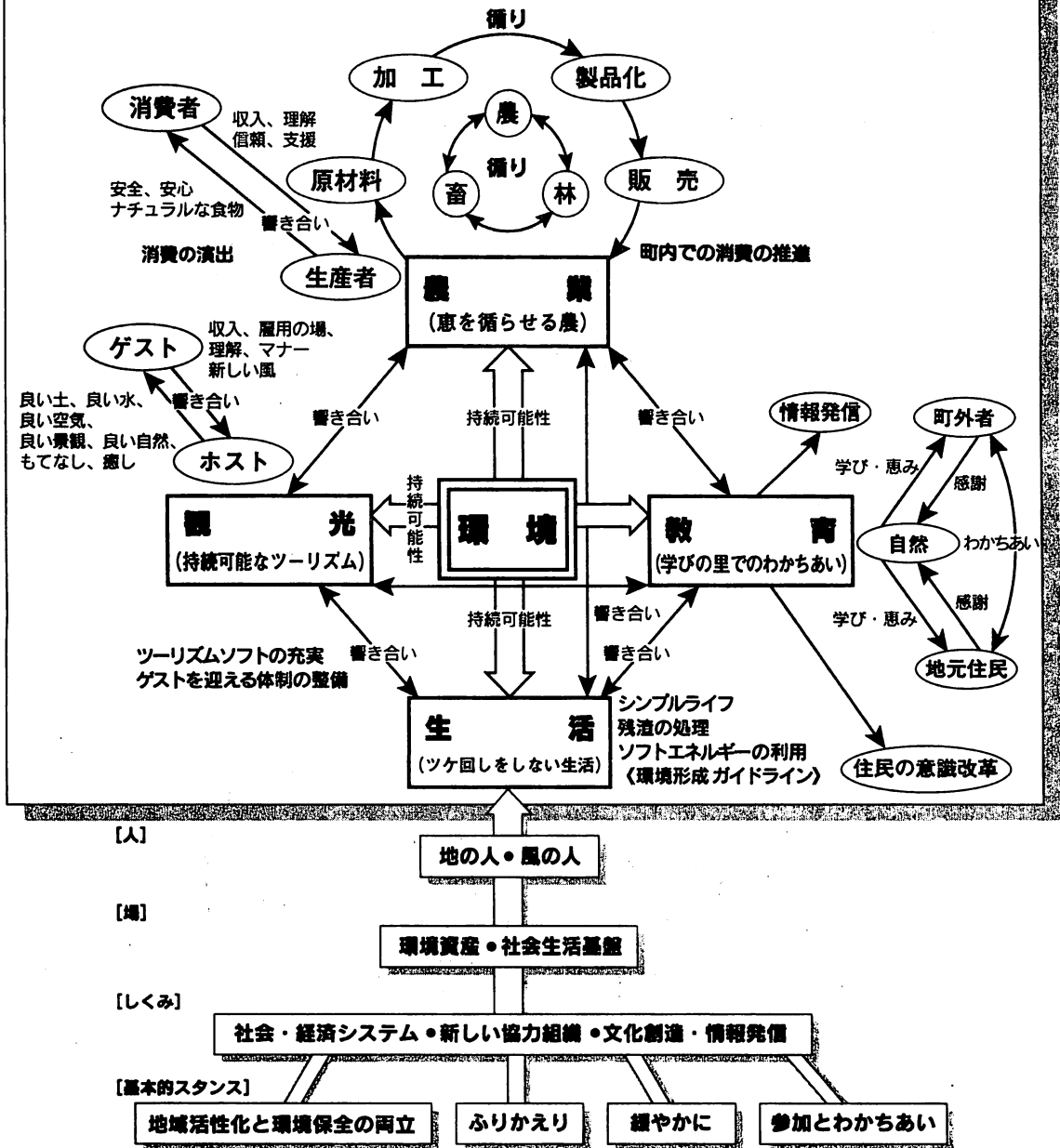


図2-1：『地球にやさしいむら』構想の概念図（あるいは報告書より）

# 『学びの里でのわかちあい』



図2-2：『地球にやさしいむら』構想の関連事業の一つ（あるいは報告書より）



# を中心とした展開



- ①ソーラーカーフェスティバル……平成6年5月、久住町の岩崎道路で開催。(試乗用3台、展示用3台)
- ②エコロジーキャンプ……
  - 【第1回エコロジーキャンプ開催】  
平成6年7月9日・10日、小学生50人参加。
  - 【第2回エコロジーキャンプ開催】  
平成6年10月1日・2日、大人39人参加。
- ③地球環境映像祭……平成6年10月、中央公民館で環境映画を上映。(3日間で延べ800人参加)
- ④野焼きシンポジウム……平成7年3月、筑紫哲也氏等による座談会等を中央公民館で開催。(地元住民および都市住民約300人が参加)

〈久住町〉

- ①野焼きサミット……平成7年3月、野焼きシンポジウムに併せて全国で野焼きを実施している9町村長によるサミット開催。

平成7年度 目標の設定

〈大分県〉

「地球にやさしいむら」の実現に向けて次の事業を実施した。

- ①エコロジーキャンプの開催……
  - 【第3回エコロジーキャンプ開催】  
平成7年7月26日・27日、中学生44人参加。
  - 【第4回エコロジーキャンプ開催】  
平成7年12月2日・3日、大人35人参加。
  - 【第5回エコロジーキャンプ開催】  
平成7年12月9日・10日、小学生47人参加。
  - 【第6回エコロジーキャンプ開催】  
平成8年1月24日・25日、大人30人参加。
- ②エコロジーキャンプ指導者養成……
  - 【第1回指導者養成】平成7年9月・10月、(財)キープ協会が主催する研修を県職員3名が受講。
- ③高性能小型合併処理浄化槽の設置費補助……  
生活排水対策推進モデル地区整備事業として、久住町陽谷地区及び寺原地区の36戸に設置費の一部(1戸当たり30万円(県1/3、町2/3))を補助。
- ④環境保全型農畜産共生モデル事業(畜産課)……  
土壌微生物(BMW等)を活用した尿污水处理施設の導入、実証展示。

〈久住町〉

- ①高性能小型合併処理浄化槽の設置費補助
- ②野焼き作業を通じての都市農村の交流……  
稲葉牧野組合の実施する輪地切り、輪地焼き及び野焼きに都市住民がボランティア参加し、地域住民と交流。

平成8年度 目標実現に向けての基盤の整備

〈大分県〉

最終事業年度を平成10年度と定め、事業の目標実現に向けて各種の基盤整備を進める。

- ①エコロジーキャンプの開催……
  - 【第7回エコロジーキャンプ開催】  
平成8年7月29日・30日、大学生33人参加。
  - 【第8回エコロジーキャンプ開催】  
平成8年8月22日・23日、小学生59人参加。
  - 【第9回エコロジーキャンプ開催】  
平成8年10月26日・27日、大人38人参加。
- ②エコロジーキャンプ指導者養成……
  - 【第2回指導者養成】平成8年6月、(財)キープ協会が主催する研修を環境NGOの指導者3名が受講。
- ③環境教育ミーティングの実施……  
九州・山口県等の環境教育を推進するため環境教育ミーティングを平成9年2月28日・3月1日に開催。参加者84人、スタッフ等28人。
- ④環境保全型農畜産共生モデル事業(畜産課)……  
土壌微生物(BMW等)を活用した尿污水处理施設の導入。

〈久住町〉

- ①地域新エネルギービジョンの策定……太陽光発電等のソフトエネルギーの利用可能性等を検討し、計画を策定。

平成9年度 目標実現に向けての施策の展開

〈大分県〉

平成8年度に整備した基盤に基づいて、目標実現に向けての具体的な施策・事業を展開する。

- ①拠点づくりの検討……このモデル事業の普及方策と、民間活力を導入した拠点のあり方を検討。
- ②エコロジーキャンプの開催……
  - 【第10回エコロジーキャンプ開催】  
平成9年8月19日・20日、小学生50人参加。
  - 【第11回エコロジーキャンプ開催】

平成9年11月1日～3日、大人17人参加。

【第12回エコロジーキャンプ開催】

平成9年11月22日・23日、大人11人参加。

③エコロジーキャンプ指導者養成……

【第3回指導者養成】平成9年7月、(財)キープ協会が主催する研修を環境NGOの指導者3人が受講。

④環境教育ミーティングの実施……環境教育指導者および準指導者の交流を図り、地域における環境教育を推進するために、環境教育ミーティングを平成10年2月28日・3月1日に開催。参加者70人、スタッフ等26人。

⑤環境保全型農畜産共生モデル事業（畜産課）… 土壤微生物(BMW等)を活用した尿污水处理施設の導入。

〈久住町〉

- ①環境教育施設の誘致……日本文理大学の環境教育施設建設に向けた支援。
- ②環境保全型農畜産共生モデル事業……土壤微生物(BMW等)を活用した尿污水处理施設の導入支援。

3. 「エコロジーキャンプ」の概要

エコロジーキャンプは、上述したように「地球にやさしいむら」の関連事業の一つとして位置付けられるが、以下の要項のとおり、まとめることが可能である。

(1) 事業名：「久住高原エコロジーキャンプ」

(2) 目的：

豊かな自然や地域住民とのふれあいを重視した宿泊体験型「久住高原エコロジーキャンプ」に参加することにより、自分たちを取り巻く地域環境や自然の現状についてより深く認識し、それぞれの地域で一人の生活者として「地球にやさしい生活」を実践する契機とする。また、参加者とそれを迎える農家の方々との顔の見える交流（＝都市農村交流）も図る。

(3) 主催：大分県・久住町

(4) 指導者：「おおいたインタープリターズ」および久住町内の農家のキーパーソン

※1；「おおいたインタープリターズ」とは、エコロジーキャンプの参加経験者による民間および公務員によるボランティアグループのこと。原則として、(財)キープ協会の実施するインタープリターズキャンプなどを受講した者とする。

※2；「財団法人キープ協会環境教育事業部」は、環境教育に関するプロ集団（所在地：山梨県北巨摩郡高根町清里）。「KEEP」とは、Kiyosato Educational Experiment Project（「清里教育実験計画」）の略である。

- (5) 参加対象者：原則として、環境問題に関心を持つ大分県下の小学生から大人まで  
〔対象年齢層・募集定員・参加地域〕  
・小学5・6年生、中学生 50人  
・一般（環境問題に関心がある民間企業、市町村の職員、大学生、環境NGOのメンバー等） 40人

(6) 主な内容：

宿泊型・自然体験型のキャンプであるが、通常のキャンプのようにテント張りや食事の準備をすることなく、これに要する時間を自然や農業、歴史、文化などの体験学習の時間とする。

〈開催場所〉 久住町内一円

〈宿泊と食事〉 町内の既存施設（国民宿舎「久住高原荘」など）

〈開催期間〉 1泊2日（または2泊3日）

通常は、第1日目のお昼頃から最終日の午後3時頃まで



図3：「久住高原エコロジーキャンプ」の参加者 国民宿舎のかたすみの施設が、子どもたちが集うことによって“自然学校”に変身する。

#### 4. 「エコロジーキャンプ」のプログラムデザインについて

##### (1) プログラムデザインの骨子

今まで実施してきた12回のエコロジーキャンプのうち10回が、以下に示す《自然体験型プログラム》といってよい。以下、そのプログラムデザインの骨子を示す。

##### 《自然体験型プログラム（＝標準的なプログラム）》

##### 1日目午後〔受付、開会式・オリエンテーション〕 〔昼のプログラム〕

ネイチャーゲームなどを通じて、久住高原の自然を楽しみながら体験するためのプログラム。



図4-1:参加者同士の緊張をほぐすアイスブレイキングゲームの一つ“カヌーゲーム”



図4-2:朝のプログラム“バードウォッチング”

##### 1日目夜〔フリープログラムの企画〕

参加者自身が翌日の午前中に行うプログラムを自主的に企画を作成する。

##### 〔夜のプログラム〕

夜の高原の自然を体験するプログラム。

##### 2日目朝〔朝のプログラム〕

早朝の高原の自然を体験するプログラム。

##### 2日目午前〔フリープログラム〕

前日に企画したプログラムに沿って、グループ別に活動するプログラム。

##### 2日目午後〔ふりかえり、わかちあい〕

2日間の体験をふりかえり、参加者同士で話し合うプログラム。〔閉会式、解散〕



図4-3:フリープログラム“川に橋を渡すチーム”



図4-4:フリープログラム“手作りハンモックチーム”



また、今まで実施してきた12回のエコロジーキャンプのうち2回が、以下に示す《農業体験型プログラム》といってよい。以下、そのプログラムデザインの骨子を示す。

《農業体験プログラム》

- 1日目午後〔受付、開会式・オリエンテーション〕  
〔農業体験プログラム〕  
古くから久住で行われてきた農業を農家の方々の指導のもとで体験し、参加者と地元農家との交流を図るプログラム。
- 1日日夜〔スピーチタイム〕  
地元の方々からそれぞれのテーマに沿った話題で話を聞くプログラム。  
〔交流会〕  
参加者と地元の方々との交流をより深める。
- 2日目〔朝のプログラム〕  
朝早朝の高原の自然を体験するプログラム
- 2日目午前〔久住の魅力発見のための企画づくり〕  
久住で参加者自身がやってみたいことや、久住を元気にするための企画づくりを行うプログラム。
- 2日目午後〔ふりかえり、わかちあい〕  
2日間の体験をふりかえり、地元の方や参加者同士で話し合うプログラム。〔閉会式、解散〕



図5-1：『農業体験プログラム『養鶏チーム』  
(まずは見学から)



図5-2：『炭焼きチーム』  
(竹の炭作りもあるため、まずは竹の原木切りから)



図5-3：『しいたけ作業チーム』(まずは見学から)



(2) プログラムデザインの具体例

《自然体験型プログラム》に関するプログラムデザインの具体的実践例を以下に示す。

《第10回「久住高原エコロジーキャンプ」のプログラムデザイン》

開催日：平成9年8月19日・20日  
会場：国民宿舎「久住高原荘」  
対象：小学生5・6年生 50人  
内容：自然体験型プログラム

8月19日(火)

【集合・受付 13:00～ 久住高原荘 玄関】

1 開会式・オリエンテーション

時刻 13:30～14:00  
場所 久住高原荘 大広間

- (1) 開会のことば……………中野県生活環境課長
- (2) スタッフ紹介・日程説明……………杉浦
- (3) アンケート……………杉浦
- (4) 生活上の注意事項……………佐藤

2 アイスブレイキング

初めて出会った友達とすぐに仲良くなるためのプログラム

時刻 14:00～14:30  
場所 キャンプ場

3 昼のプログラム

森や草原の中で、ゲームなどを行い、楽しみながら自然とあそぶ

時刻 14:30～16:45  
場所 赤川園地等

【チェックイン】

16:45～17:00 久住高原荘 宿泊室

【入浴】

17:00～18:00 久住高原荘 大浴場

【夕食】

18:00～18:40 久住高原荘 食堂

4 夜・朝のプログラム選択コースの紹介

時刻 18:40～19:00  
場所 久住高原荘 大広間

5 フリープログラムの計画づくり及びグループづくり

みんなで次の日のプログラムを考える

時刻 19:00～20:30  
場所 久住高原荘 大広間

6 夜のプログラム

静かな夜の久住高原で「ナイトハイク」などを行い、自然を感じる

時刻 20:30～21:30

場所 赤川園地等

【就寝】22:00

8月20日(水)

【起床 7:00】

7 朝のプログラム

すがすがしい朝の久住高原でバードウォッチングなどを行い、自然を感じる

時刻 7:15～8:00

場所 赤川園地等

【朝食】8:00～8:45 久住高原荘 食堂

【チェックアウト】8:45～9:00

8 フリープログラム

グループに分かれ、みんなで作ったプログラムを実行する

時刻 9:00～13:30

場所 前日に決定した場所

9 フリープログラム発表会

実行したプログラムをグループごとに発表する

時刻 13:30～14:00

場所 久住高原荘 大広間

10 ふりかえり・わかちあい

2日間の体験をふりかえり、みんなで話し合う

時刻 14:00～14:50

場所 久住高原荘 大広間

(1) ふりかえりシート記入……………杉浦

(2) ふりかえり・わかちあい……………杉浦

(3) アンケート……………杉浦

11 閉会式・記念撮影

時刻 14:50～15:00

場所 久住高原荘 大広間

【解散】15:00

《農業体験型プログラム》に関するプログラムデザインの具体的実践例を以下に示す。

《第9回「久住高原エコロジーキャンプ」のプログラムデザイン》

開催日：平成8年10月26日・27日

会場：国民宿舎「久住高原荘」

対象：大人38人参加

内容：農業体験型プログラム

10月26日(土)

【集合・受付】

10:30~11:00 久住高原荘 合宿棟前

1 開会式・オリエンテーション・記念撮影

時刻 11:00~11:20

場所 久住高原荘 合宿棟

- (1) 開会あいさつ……………高木環境企画課長
- (2) レンジャー・スタッフ紹介……………杉浦
- (3) 日程説明……………杉浦
- (4) 生活上の注意事項……………佐藤
- (5) 記念撮影(合宿棟前)

2 はじめましてプログラム

初めて出会った人達がうちとけるためのプログラム

時刻 11:20~12:15

場所 久住高原荘 お祭り広場

【昼食】

12:15~13:00 久住高原荘 食堂

3 “産地直伝”プログラム ~地の人から風の人へのプレゼント~

《その1 農業体験》

各コースに分かれて“地の人”の指導を受けながら農業を体験する

時刻 13:00~17:30

場所 久住町内 各所

〈コース〉 〈地の人〉 〈参加者〉

A 干草切・小屋作りコース	志賀是孔氏	10人
B 炭焼きコース	志賀義弘氏	8人
C 乳しぼりコース	みどり高原牧場	10人
D 稲刈り・掛干しコース	佐藤 孝氏	9人
E しいたけコース	加藤至誠氏	9人
F 養鶏(BMW)コース	荒牧洋一氏	8人
G 手作り豆腐コース	河野公令氏	4人

【入浴】

17:30~18:30 久住高原荘 大浴場

【夕食】

18:30~19:30 久住高原荘 研修棟

4 “産地直伝”プログラム ~地の人から風の人へのプレゼント~

《その2 スピーチ・タイム》

“地の人”がそれぞれのテーマでスピーチを行う

時刻 19:30~20:30

場所 久住高原荘 合宿棟

5 スライド上映

“くじゅう”の自然を紹介したスライド「久住の四季」を観賞する

時刻 20:30~20:45

場所 久住高原荘 合宿棟

6 “風の人” “地の人”交流プログラム

自由なテーマで、参加者と地元の人が語り合う

時刻 20:45~22:00

場所 久住高原荘 合宿棟

【就寝】 22:00

10月27日(日)

【起床】 7:30

7 朝のリフレッシュ・プログラム

すがすがしい朝の久住高原でバードウォッチングなどを行い、自然を体感する

時刻 7:45~8:30

場所 赤川園地等

【朝食】 8:30~9:30 久住高原荘 休憩所

8 “おんがえし”プログラム ~風の人から地の人へのプレゼント~

参加者が数グループに分かれ、“くじゅう”でできること、やってみたいことなど、“くじゅう”の魅力発見事業の企画作りを行う

時刻 9:30~13:30

場所 久住高原荘 合宿棟

【昼食(弁当)】 12:00~

9 成果発表会

午前中に行ったことの成果をグループごとに発表する

時刻 13:30~14:15

場所 久住高原荘 合宿棟

10 ふりかえり、わかちあい

参加者が2日間の体験をふりかえり、その成果を互いにわかちあう

時刻 14:15~14:45

場所 久住高原荘 合宿棟

11 閉会式

時刻 14:45~15:00

場所 久住高原荘 合宿棟

(1) レンジャーあいさつ

(2) おみやげプレゼント

【解散】 15:00

書籍紹介

# 『水鳥のための油汚染救護マニュアル』 ～ Field Manual — Rescue and Rehabilitation of Oiled Birds ～

E. ウォルラベン著 黒沢信道・黒沢優子訳  
北海道大学図書刊行会 定価(本体) 1,800円

事務局 箕輪 多津男

昨年1月に起きたロシア船籍のタンカー・ナホトカ号による日本海重油汚染事故から、1年と数か月が経過したが、私自身、今だにその報告のとり纏め等に関わっているため、あの事故そのものが最近起きたことのように錯覚することがある。

被害を受けた海鳥たちは、収容されたものだけでも生体・死体を合わせて1,300羽以上にのぼり、改めて油流出事故の恐ろしさを認識させられた出来事でもあった。

昨年は、その後も4月に対馬沿海、7月に東京湾、12月に青森県の沿海で事故が発生するなど、マスコミの報道の影響もあってか、油流出の問題が幾度となく話題にのぼった年であった。実際、些少なものであるいは不法投棄なども含めると、年間300件を大きく上回る油流出事件が発生しているのが日本近海の現状である。

従って、そうした事態が発生した時に備えて、鳥類をはじめとする野生生物保護の準備体制を今からでも整えておくことが必要不可欠なこととなっている。

こうした実情に即応すべく、油汚染発生時における水鳥の救護方法に関して、詳細にまとめられたマニュアル本が本年1月に翻訳・出版された。それが、『水鳥のための油汚染救護マニュアル』である。

本書は、その章立てで追うと「Ⅰ. 油の影響」「Ⅱ. 緊急時の対策」「Ⅲ. 現場での救急法」「Ⅳ. リハビリと放鳥」「Ⅴ. 報告会」および付記（獣医師による治療など）という内容になっており、これに訳者による付録（日本産の水鳥に関する資料など）が加えられている。

水鳥という、鳥類の中でも比較的なじみの薄いなかまを対象にした救護活動においては、独特な技術や方法が必要となるが、本書では現場における初期対応から救護、診断、処置、洗浄、リハビリ、そし

て放鳥に至る一連の作業内容に関して、プロセスを追いながら大変分かりやすく解説されており、いざという時に十分実用に供するだけの内容が盛り込まれている。また、油汚染事故発生時における全体的な救護体制の組み方や、組織のあり方等に関しても言及されており、平常時における準備を整える上でも大いに参考になる。

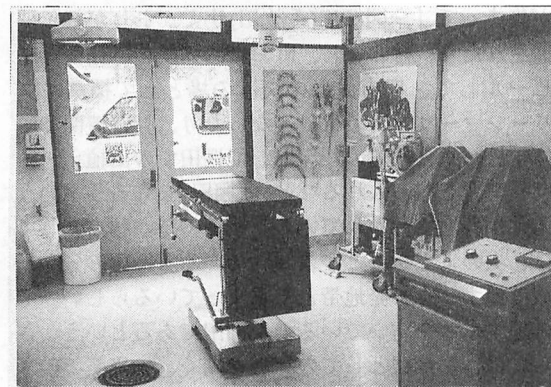
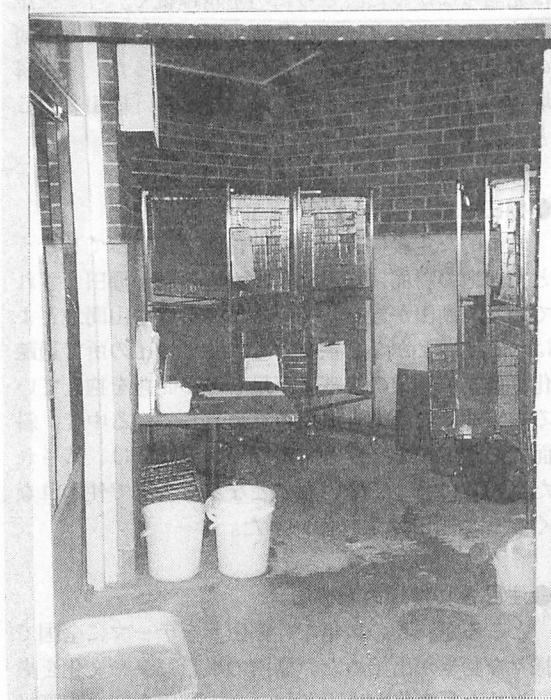


ところで、原著である『Field Manual—Rescue and Rehabilitation of Oiled Birds』は、すでに1992年10月に発行されていた（非売品）。

著者のエルナ・ウォルラベン（Erna Walraven）氏は、オーストラリアのシドニー市街から定期船で25分ほどのところに位置するタロンガ動物園（Taronga Zoo）の上級飼育係長である。

実は、私こと2月に現地を訪れた際、女史にお会いする機会を得た。唐突な訪問にもかかわらず大変暖かく迎えていただき、また、園内にある動物病院関連施設への案内の手筈も整えていただき、非常に感激した次第である。お話をうかがっている間も終始笑顔を絶やさず、大変すてきな、そして何よりも温かなハートをもった方であるという印象が強く残った。

タロンガ動物園の動物病院関連施設には、同施設で野生動物のリハビリを担当しているエリザベス・ホール (Elizabeth Hall) 女史にご案内いただいた。そこには、3名の獣医師をはじめ12名のスタッフが常駐して任務にあたっているとのことであった。(ちなみに動物園全体では、売店の担当者等も含めると実に300名にもものぼるスタッフが働いているそうである。) 同じニュー・サウス・ウェルズ州にあるウェスタン・プレイン動物園 (Western Plains Zoo) と合わせると、年間で約1,500もの野生動物の治療にあたり、かつまた野生復帰へのリハビリを施しているとのこと、その活動の充実ぶりが窺えた。



施設内には、それぞれの動物種に合わせたケージが用意してある収容・飼育室のほか、手術用の各種機器も整っている診断・治療室、薬剤の調合室、餌の調理室等が完備しており、また屋外には大型収容ケージ等も設置され、さまざまな器材をフルに使用しながら各専門スタッフが活躍している。

なお、マニュアルの発行も日本に比べてかなり早かったことからわかるように、油汚染事故発生時における、実際の野生動物の救護体制に関しても十分整えられている。1995年6月にタスマニア沿海で油流出事故が起きた際にも、彼ら専門スタッフの活躍もあってか、救護された水鳥たち (大半はコガタペンギン (Little Penguin)) の放鳥率は約90%にのぼったという。周辺の環境や流出した油の量および性状、鳥種の違い等はあるにせよ、これを現在の日本に置き換えてみると、驚異的な数字であると言える。

ただ、このオーストラリアにあっても、当初は先行しているアメリカ等の技術に学ぶところが大きかったようである。資金面においても、サンディエゴ動物園等アメリカの施設における潤沢な調達ぶりは、大変うらやましいとのコメントを、ウォルラベン女史が繰り返し述べられるのが印象に残った。こうした面でも、日本はさらに遅れているのが現実であり、改めて課題として考えさせられた次第である。

なお、私もこれまで、環境庁による請負事業として『野鳥の油汚染救護マニュアル』の作成に関わってきたが、その際にも今回ご紹介したField Manualの原本を大いに参考にさせていただいた。この機会に改めて感謝の意を表したいと思う。

初めにも述べたが、油汚染事故はもはや他人 (他国?) ごとではなくなった。従って、海外の先進事例や技術に学びつつ、総合的な対応策と体制を平時から整えて置くことが重要であり、その為に多くの人が協力していく必要があるように思う。私も微力ながら、そうした活動の一旦を担うべく努力していきたいと考えている。

最後にタロンガ動物園では、専門スタッフによる子供向けの教育プログラムも大変充実していることを付記しておきたい。今後の動物園や水族館の役割について考える時、「種の保存」と並び、「自然 (環境) 教育」ということに大きな比重が置かれていくことになるであろう。その意味からも、同園から学ぶべきところは多いように思われる。

もりまき通信(4)

## 朱鷺と棚田のつながり

(株)建設技術研究社 森 真 希

### ●佐渡への旅

1996年8月、私は弟と2人で佐渡島を訪れた。目的は4つ、①佐渡の自然観察、②佐渡の郵便局めぐり、③棚田の取材、④佐渡トキ保護センターの訪問という旅であった。③の棚田の取材というのは、この年、東京農業大学の学祭、収穫祭で行われる研究発表の参加において所属しているサークルが「棚田」を取り上げることになり、個人的に棚田の分布する地域を実際に見て写真撮影を兼ね、管理している人のお話を聞いて見ようと選んだ場所が佐渡であった。④のトキ保護センターの訪問は、鳥好きの方なら誰しもが御存じであろうと思われる、日本産最後のトキ「キンちゃん」が飼育されているところであり、生き物に関心がある人が佐渡を訪ねたら必ずと言って良い程、足を運ぶ場所でもある。炎天下の中、ザックを背負ってバス通りから1時間余り歩き「トキの森公園」に到着した。この時、まだ私の頭の中では「棚田」と「トキ」という単語は別々の所にあった。

### ●佐渡トキ保護センター

環境保全協力費200円を払ってトキ資料展示館に入る。そこには、世界のトキの仲間の事や、トキそのものについての詳しい展示があり、モニター越しに「キンちゃん」の実況中継を見ることができる、トキの博物館という雰囲気のある所であった。残念ながら、センター開設当初からずっとトキに携わっていらっしゃる近辻さんにはお会いできなかったが、他の方が親切に説明をしてくださった。その中で、トキの食性と採餌地、生息環境について書かれている展示パネルを見て思わず「あっ」と言ってしまった。

### ●トキが生活していた所

ここに、パネルに書かれていたことを抜粋する。「一食性と採餌地一、トキは動物性の餌を食べる。ドジョウ、フナといった魚類。カエル、イモリ、サンショウウオ(両生類)、エビ、サワガニ(甲殻類)、タニシ、カワナナ、(貝類)、オケラ、コオロギといった昆虫類まで食域は広範囲に及ぶ。餌を引きち

ぎるようなことはせず、丸ごと飲み込む。採餌場所としては山間の水田が最適で他の鳥には見つけにくい泥中の餌を、下方に曲がった長い嘴で探り出し食べることができる。」トキの生態をよく知らなかった私は、ここで初めてトキがどんなものを食べているのかを知った。私が1992年から集めていたトキに関する新聞記事にはそこまで説明をしているものは見当らなかった。さらにパネルは続く。「一生息環境一、トキにとって小佐渡東部の森林地帯と山間の水田が最適な生息場所及び環境であった。」採餌場所の「山間の水田」、これはまさに「棚田」のことである。

### ●棚田とは

学術的な定義はまだないが、簡単に言ってしまうと山間地の斜面に作られた段々田んぼが棚田とされている。棚田が分布しているところは中山間地とよばれる地域とかなり重なっており、殆どの所で過疎化、農業・林業の後継者不足などの問題を抱えている。平地での農業も減反が進められている中で、斜面での重労働を必要とする棚田の農作業は、残された高齢者にとって辛いものとなる。全国で使われなくなった棚田は荒れていった。

### ●注目されはじめた棚田

ところが、この数年で「棚田」をテーマに全国で様々な動きが始まった。棚田の風景写真や文化を撮り集めた写真集が出版されたり、棚田を持つ市町村が集まって「全国棚田(千枚田)サミット」が毎年開催されたり、村おこし、町おこしのために棚田をアピールして、都市民との交流の場として援農やグリーンツーリズムの材料となったり、教育機関でも修学旅行や食教育の一環として棚田での田植え・稲刈り実習を取り入れるなど、「棚田」を守ろうという運動が各地で行われている。棚田の持つ利点としては、次のようなことが言われている。棚田の分布地域は地すべり多発地帯とも重なっているらしい。その地すべりを防いでいるのが棚田であるという。さらには、農景観としての評価も高く、低農業での米



作りをしているところでは水田を取り巻く生物相が平地よりも豊かになるらしい。棚田の存在は良い方向で認められつつも、管理・維持していくには農業に対する国民意識をもっと上げていく必要があるだろう。

### ●トキと棚田

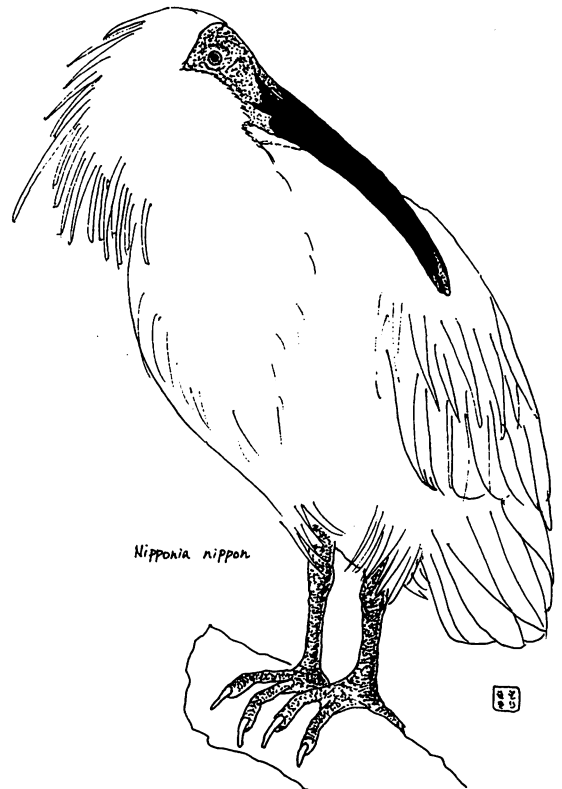
「棚田にはトキが好んで食べている生き物がたくさんいるんですよ。」センターで説明をしてくださった方がそうおっしゃった。「この近くも昔は棚田が多かったんだけどね、年寄りばかりになって米をつくらなくなってのう、畑野の方に行けば立派な棚田がまだあるはずだから行ってみるといいよ。」棚田の取材の旨をお話したら親切に教えて下さった。棚田は人が生活をしていくために作られ、管理されている人工的な環境である。しかし、その水田を取り巻く、雑木林や畑、用水路、湧水地、神社・寺の森などを含めた環境はいわゆる里山的自然と呼ばれ、虫、植物、鳥、獣など実に多様な野生生物が生活している。人が田畑を利用し雑木林を維持し続けていたことが、里山の生き物たちの命をつないでいるとも言えよう。同じことがトキと棚田にも当てはまるのではないだろうか。生物多様な棚田がトキの命をつないでいった。「もしかしたら、棚田の減少と関係があるかもしれないね、中国の野生のトキがいるところも棚田地帯ですよ。」センターの方のこのお話に私の中の「棚田」の思いが大きく変化した。

### ●「トキ再生」技術

1993年10月23日(土)付けの朝日新聞夕刊に「トキ再生、未来へ託し細胞を保存」という見出しの記事が載った。凍結保存でトキの遺伝子を保存し、遺伝子技術が発達した段階で再びトキを誕生させることが狙いという、映画「ジュラシック・パーク」の世界のような内容である。もし、その技術でトキが復活したとしても、トキが本来生活していた環境の存在無しには意味が見出せないのではないだろうか。世界中のあちこちで様々な生き物たちが絶滅の危機にさらされている。人工繁殖でその危機を脱した仲間もいるが、その生き物が生きていける環境を守るということも忘れてはならないだろう。

### ●いつの日か…

日本産のトキは「キンちゃん」ただ1羽。もう31歳になるという。同じ学名を持つ中国産のトキも約80羽とまだ絶滅の危機から抜けていない。純日本産のトキが日本の空を飛ぶのはどうやっても見る事ができなくなってしまったが、いつの日か、各地の棚田が生き返り、そこで採餌をするトキの姿を日本で見る事が出来たら…。斜面に作られた水田を見るたびに、幻の映像を連想してしまうようになった。佐渡島への旅は「棚田」を「トキ」という切り口で考えるきっかけを得ることが出来た貴重な体験であった。



論説

## 宿泊型自然教室の在り方

常務理事 平田寛重

学校教育での宿泊を伴う学習活動には、従来、修学旅行、林間学校、臨海学校、キャンプ等がある。

これらは、一般に、移動方法や食事、就寝場所等の生活的な部分と登山、観光、水泳、自然観察などの学習的な部分の組み合わせでプログラムが組まれている。また、集団生活というテーマが常に存在している。集団活動をメインに据える傾向も高い。

通常キャンプと呼ばれる宿泊学習は、ボーイスカウトの流れから来ているもので、未だに体育会系の流れを汲む集団活動を意識したプログラムである。環境教育が叫ばれている現在でも、学校現場では根強く残っている。しかし、これは指導をする教員が自分たちの経験した活動形態を踏襲しているに過ぎず、別の視点からの取り組みを試みないという状況も見られる。

現実的には、飯ごう炊さん、キャンプファイヤー、朝のラジオ体操、掃除といった、正に青年の家などの社会教育施設の定番プログラムの域を出ない状況にある。せっかく自然の豊かな山や海辺の環境で取り組みを行おうというのに、都会でもできる炊事やキャンプファイヤーなどの取り組みに終始するというのは如何なものであろうか。

現在はアウトドアでのスポーツがさかんになっている。しかし、キャンプファイヤーで育った世代のアウトドアでの過ごし方は、自然に対してローインパクトと言うにはほど遠く、自然を痛めつけて帰ってくるというのがそのほとんどである。

これは、自然の中での過ごし方や自然理解などの教育が不十分なために起こっている現象である。昔から自然の中で過ごしてきた者ならば、自然の恵みを受け、その恵みを絶やさない活用の仕方を知っている。自然と共に生きるための工夫を受け継ぎ、それを踏襲している。しかし、その経験のない者たちは、自然を消費財としてしか認めず、感謝もせず、いたわることもしない。いわば罰当たりのことばかりしているのである。

環境教育が叫ばれるこの時代の学校教育として、自然の豊かな環境を舞台にして宿泊学習を行うのであれば、それなりの目的や考え方を明確にし、それに対応した自然理解のための学習プログラムを組むのが筋であろう。そして、ローインパクトな体験的なプログラムを行うことで、自然の不思議さ素晴らしさに気付かせ、感じ取らせたいものである。

レイチェル・カーソンが取り組んだように、豊かな自然の中で自然をダイレクトに感じ取れるような体験活動を行い、感性を磨くことができればと思う。

自然の中では、動物、植物、水、音、闇、星、匂い、風、月明かりなどがテーマとして考えられる。宿泊が前提であれば、闇や星などを対象とした普段学校ではできない体験活動にも取り組むことができる。そのことで、野生動物たちが休む闇の中で音をたてたり、火を焚いたり、明かりを灯したりという反自然的なことは、自然に対して慎むべきだということを理解させることができる。

食にかかわる活動や移動の取り組みなども非日常的な体験学習の対象となることから、時間や子どもの負担を考慮しながら、サブ的なプログラムとして活用することができる。少人数ならば、現地調達のもを調理して食べたり、自分たちの足で目的地に着き、学習（活動）に必要なものを探し出したりしながら、密度の濃い内容にしていくこともできる。

また、従来のキャンプでは、クラスをまとめたり場を盛り上げたりする機能としてのレクリエーション的な活動がメインに考えられていた。しかし、初めて顔を合わせる人間同士の心を解きほぐすためのアイスブレイキングとしてならそれなりの意味もあるが、人間関係ができあがっている学校集団では、それをメインに据えるほどの理由はないと思われる。集会活動が必要であるというのなら、学校の普段の活動でも十分に対応できるであろう。

一方、キャンプファイヤーの経験は、小学校のこの機会であれば経験できないという考え方がある。しかし、それなら、夜間も含めた自然体験を豊かにし、自然とのかかわり方を深めるという経験は、将来にわたって有効なのではないだろうか。自然の中で大きな火を焚いて騒ぐよりは意味はあるように思われる。

現在の状況を考えた場合、キャンプファイヤー的な経験にも自然接触の経験にもそれなりに価値はある。しかし、わざわざ山や川に出かけて行くのであるから、そこで何をすることがより効果的なのかを考えて、宿泊学習に取り組んでもらいたいものである。

## 平成9年度 収支決算報告

(単位：円)

【収入の部】	
項目	決算額
会費	444,000
売上	385,365
寄付金	43,847
研修会参加費	64,000
連盟・補助金	200,000
受取利息	114
前期繰越収支差額	553,875
収入合計	1,691,201

【支出の部】	
項目	決算額
会誌発行費	763,200
通信運搬費	194,150
会議費	73,202
交際費	5,250
交通費	0
事務消耗品費	12,121
資料購入費	14,527
支払手数料	1,155
講師謝礼	15,000
連盟・支払金	236,462
次期繰越収支差額	376,134
支出合計	1,691,201

前期繰越収支差額	553,875
当期収支差額	-177,741
次期繰越収支差額	376,134

上記の通り報告いたします。

平成10年3月31日

会長 江袋 島 吉  
 会計 染谷 優 児  
 事務局 箕輪 多津男

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

監事 徳竹 力 男  
 監事 村口 末 弘

# 平成9年度 事業報告

事務局 箕輪 多津男

## 1. 「愛鳥教育」の発行

(1) 52号(11月)、53号(平成10年3月)、54号(平成10年7月)の発行

### (2) 内容

- ① 愛鳥活動のヒントを掲載。
- ② 子供向け野外ワークショップの紹介。
- ③ 論説では「都市鳥の増加について」等を掲載。
- ④ 愛鳥教育のための教材として『野鳥シート～身近な野鳥～』に関する解説を掲載。
- ⑤ 平成9年度秋期研修会、冬期研修会の報告を掲載。
- ⑥ その他の事項

## 2. 研修会

### (1) 秋期研修会

期日：平成9年10月10日(祝)～11日(土)

場所：愛知県伊良湖岬、伊良湖ビューホテル

内容：① サシバ等の渡り、および周辺の自然観察

指導：渥美自然の会会長 大羽康利氏

#### ② 講演：

東三河野鳥同好会会長 皿井 信氏

全国愛鳥教育研究会副会長 渥美守久氏

### (2) 冬期研修会

期日：平成10年2月28日(土)～3月1日(日)

場所：霧ヶ峰八島が原湿原、鷺ヶ峰ひゅって

内容：① 歩くスキー講習会

② 雪上における自然観察

③ スライドを使った学習会

## 3. 常務理事会(開催日)

平成9年4月22日(火)、5月29日(木)、

6月27日(金)、7月22日(火)、

8月18日(月)、9月25日(木)、

10月23日(木)、11月19日(水)、

12月19日(金)、平成10年1月22日(木)、

2月18日(水)、3月17日(火)

## 4. 野鳥シート「身近な野鳥」の企画・販売

愛鳥教育に役立つ教材として、一昨年発売した「水辺で楽しむバードウォッチング」に続き、野鳥シート「身近な野鳥」を企画・販売し、好評を得た。

## 5. その他の行事・審査会への参加

<審査会等>

(1) 第50回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい(島根県)

平成9年5月11日(日) 江袋会長、渥美副会長

(2) 愛鳥週間ポスターコンクール及び全国野生生物保護実績発表大会審査会(環境庁)

平成9年10月17日(金) 江袋会長

(3) 全国野生生物保護実績発表大会(環境庁講堂)

平成9年12月1日(月) 江袋会長

(4) 愛鳥週間野生生物保護功労者選考会(環境庁)

平成9年3月19日(木) 江袋会長

<後援行事>

(1) (財)せたがやトラスト協会

「トラストバードウォッチング」

平成9年12月13日(土) 兵庫島河川公園

<行事参加>

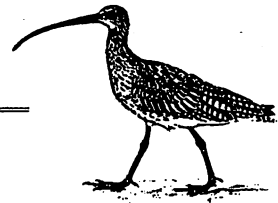
(1) 国会議事堂周辺巣箱かけ

平成10年3月4日(水) 江袋会長

(2) 神奈川県環境教育研究発表会

平成10年1月30日(金)

平田常務理事、島田常務理事



<全国愛鳥教育研究会 主催>

## 平成10年度 夏期野鳥観察会のご案内

全国愛鳥教育研究会では、標記の通り「夏期野鳥観察会」を企画いたしました。ここ「谷津干潟自然観察センター」にて、下記の要領で開催いたしますので、どなたでも、どうぞお気軽にご参加ください。

もちろん、ほとんど鳥のことを知らないという初心者の方や、親子そろっての参加も大歓迎です。夏休みの一時を、是非ともに過ごしましょう。きっと、新しい発見があなたを待っています。

### 記

- |        |                                       |                                   |
|--------|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 日時  | 平成10年8月21日(金) 9:30~12:30              |                                   |
| 2. 場所  | 谷津干潟自然観察センターおよび谷津干潟周辺                 |                                   |
| 3. 参加費 | 無料 (※ただしセンターへの入場券につきましては、各人でお求めください。) |                                   |
| 4. 持ち物 | 筆記用具、できれば双眼鏡など観察用具 等                  |                                   |
| 5. 日程  | 9:15~ 9:30                            | 受付                                |
|        | 9:30~10:15                            | 谷津干潟の鳥たちのこと<br>(センターの指導員によるお話し)   |
|        | 10:15~12:15                           | 谷津干潟周辺の野鳥観察<br>(愛鳥教育研究会スタッフによる解説) |
|        | 12:15~12:30                           | 観察会のまとめ                           |



### ◆参加申し込み方法◆

事前申し込みの場合は、下記事務局まで、はがき、電話、またはFAXにてお申し込みください。

なお、「当日受付」も行いますので、その場合は直接会場となる谷津干潟自然観察センターにお越しください。

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-5 新宿土地建物第11ビル5F  
(財)日本鳥類保護連盟内

全国愛鳥教育研究会・事務局 担当：箕輪(あひ) 多津男  
TEL. 03-3225-3590 FAX. 03-3225-3593



### 谷津干潟自然観察センター利用案内

- 開館日 火曜日～日曜日
- 休館日
  - ・毎週月曜日
  - ・年末年始(12月28日～1月4日)
- 開館時間 午前9時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)
- 入館料
  - ・高校生以上 200円
  - ・小中学生 100円
  - ・団体(30人以上)は2割引
- 交通

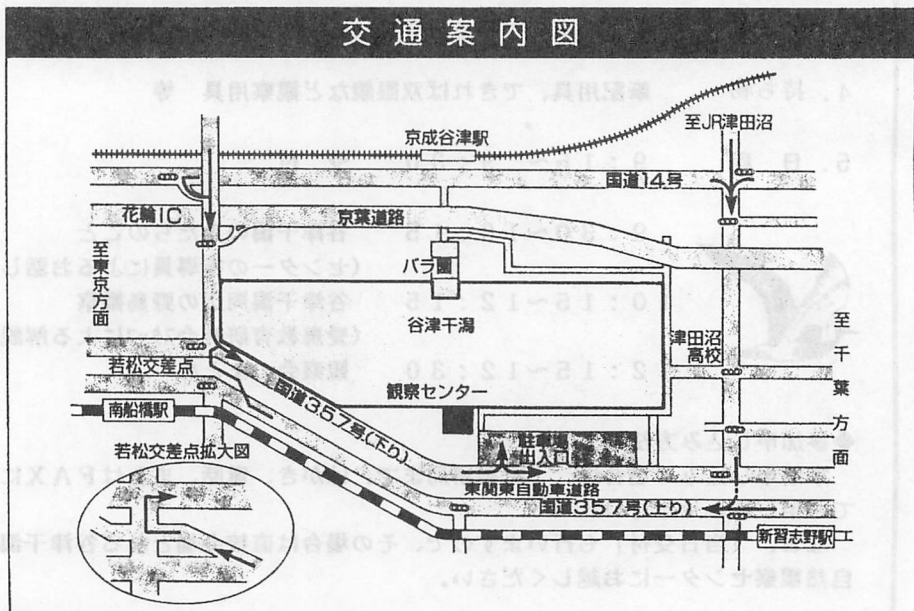


(当センターの案内係です)

- 電車バス
  - ・京成谷津駅より徒歩30分
  - ・JR京葉線新習志野駅より徒歩20分
  - ・JR京葉線南船橋駅より徒歩20分
  - ・JR総武線津田沼駅よりバスで県立津田沼高校前下車バス停より徒歩10分

- 自動車
  - ・駐車場は100台(普通車)
  - ※駐車場の出入口は国道357号(下り)となります。国道357号若松交差点より千葉方面に入り、標識案内に従って下さい。(交差点より約1km)

### 交通案内図



### 問合せ先

谷津干潟自然観察センター  
〒275 習志野市秋津5-1-1 電話0474-54-8416

環境事業団  
習志野市

## 追悼

# 渡り鳥となって “天の川”を渡る 柳沢信雄 先生

副会長 杉 浦 嘉 雄

柳沢先生を思うと、どうしても三つの光景の中にある優しい顔が重なってきます。

柳沢先生と初めてお会いしたのは、今から15年前の北海道での「愛鳥の会」の集いでした。確か私が日本鳥類保護連盟に勤めて間もない頃だったと思います。

その会には、柳沢先生を慕う大勢の北海道の教員の方、社会教育のリーダー、その中には当時ウトナイ・サンクチュアリ・レンジャーの安西英明さんの姿もありました。

大勢のベテランを前にしてこの会では、職員になりたての私が鳥のお話をすることになっていました。大変緊張していたことを今でも覚えております。

その緊張を読み取られたのか、私の方へすうーと柳沢先生がああ優しい笑顔で寄ってこられました。その直後から先生は立て続けの冗談を私に浴びせかけ、いつの間にか私も調子に乗っていました。5分もたたずに私の緊張が嘘のように無くなった、あの心の落差を今でも鮮明に覚えております。緊張を解きほぐす名人の飄々とした表情の背景のなかに、私でさえも深い愛情を感じることができました。

先生たちとバードウォッチングをしていた光景は、確か野幌公園だったと思います。北海道の鳥は、当時東京に住んでいた私にとって憧れの的でした。それで、最初のうちハングリーなまでに野鳥探しに夢中になっていたのですが、やがて私の目は、実に楽しくお話しされている柳沢先生ご夫婦の方に向きはじめました。

鳥の話題でご夫婦であんなに楽しく、しかも、大らかなバードウォッチングをされている、お二人の姿が実に新鮮にうつったからです。同行の同じ学校の先生方にも、当時校長先生にもかかわらず、バードウォッチング仲間の実に気楽な会話をされていました。

奥様や同僚の先生たちも、先生の優しいオーラのお陰で楽しさが倍増している—そんなバードウォッチングでした。

北海道ウトナイの夏の夜でした。おそらく、会合の帰りかなにかで少々お酒が入っていたのを記憶しています。二人で歩きながら近くの宿泊先まで、先生にわざわざお送りいただいたのだと思います。

夜空を眺め、あまりにもくっきりとした明るい天の川を見つけた時、私は「東京の空では、こんな素晴らしい天の川は絶対に拝めません」といいました。

柳沢先生は、間髪入れず、このような意味のことはユーモアたっぷりにおっしゃいました。「北海道はいい！鳥は多いし星も美しい。天の川もこんなに近くでしょう。亡くなっても渡り鳥になって渡りやすいから、北海道はこの世もあの世も最高です！」

真っ暗闇なはずなのに、不思議なことに、天の川と私を見ながら微笑んでいる先生の優しい顔を鮮明に思い浮かべることができるのです。

今、私は、東京を離れて「天の川が近い」大分市郊外に住んでおります。

迂闊にも、先生のご他界を随分後で知り悲しんでおりましたが、しかし、生前あんなにも北海道の鳥たちを愛し、保護されてきた先生のことです。間違いなく、今では、先生のお言葉どおり、渡り鳥となって“天の川”を渡っておられることと信じております。

先生、いつか私も、鳥や自然を愛する後輩たちにユーモアたっぷりに言おうと思っております。「九州はいい！鳥は多いし星も美しい。天の川もこんなに近くでしょう。亡くなっても渡り鳥になって渡りやすいから、九州はこの世もあの世も最高です！」と。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 柳沢信雄先生の思い出

北海道野鳥愛護会副会長 戸津高保

柳沢先生と私のつきあいは、野鳥愛護会の活動を中心として15年を越える。平成9年11月のウトナイ湖例会が、先生の最後の愛護会例会への参加となった。先生が、時々咳き込んでいて気になったのを覚えている。

平成10年3月、愛護会のウトナイ湖例会に私も参加して、入院されていた先生が割合元気そうだという話を仲間から聞いた。そして、ウトナイ湖のネイチャーセンターに着いた時、柳沢先生が亡くなったという連絡が入っていて愕然とした。

先生は、野鳥愛護会創立からの、今や数少ない会員であり、この10年間は、愛護会会長として、柔軟で視野の広い考え方で会の指導をされていた。

また、同時に日本鳥類保護連盟専門委員、全国愛鳥教育研究会理事、野幌森林公園を守る会会長、北海道自然保護協会会員などとして、北海道の愛鳥運動や自然保護運動に幅広く関わり、力をつくされた方であった。

先生は、白神山地のブナ林調査に参加したり、トキの保護活動に協力して中国を訪れたり、ガラパゴス諸島まで足を伸ばし、鳥類の保護に尽力されていた。

しかし、先生が一番愛し、関心を持っていたのは、野幌森林公園ではなかったかと、私には思えてならない。愛護会の野幌探鳥会には、奥様と共に、おそらく一番多く参加していたし、前述した野幌森林公園を守る会で、毎年3月に行うクマガエラ調査では、100人を越す参加メンバーのかなめとして、10年にわたって活動された。

先生と最後に野幌森林公園を歩いた昨年11月に、先生が冬虫夏草（スズメバチの死骸から生えたキノコ）を見つけて、私たちに見せてくれたのも忘れられない思い出である。

愛護会の新年会は、毎年、藤の沢の白鳥園で行うのだが、例会の後、よく先生や故小沢広記さんなどとお酒を飲みながら鳥談義をしたことも楽しい経験であった。

先生の、鳥をそして自然を愛し続けた精神を受け継いでいきたいものだと、愛護会の仲間と共に考えている。

心より御冥福をお祈りいたします。

## 柳沢信雄先生を悼む

札幌市 水崎 満

愛鳥・愛護活動の実践者、指導者である先生のご逝去は、野鳥・自然に関心をもつ者にとって大きな衝撃であります。謹んで哀悼の意を表します。

探鳥会に初めて参加したのは、20年程まえでした。野幌森林公園でアカゲラのドラミングを聴き、モズ・ヒヨドリなどを知り、マイヅルソウ・ザゼンソウなどを見ました。ウトナイ湖ではマガモの頭の緑色と嘴の黄色の鮮やかさに感動を覚えました。柳沢先生の側にぴったりとついて歩いているだけで楽しい一日でした。

具体物に即して分かりやすい言葉で明快に話される先生と共に過ごす時間は、博物学の学習そのものでした。

私は体調が優れず、先生にお会いする機会が途絶えていましたが、平成7年の暮れに「……道東の厚岸ではシマフクロウの声を聞き出そうと4夜連続、山の中で16時から20時まで過ごしたり、……まだ、なんとか野外の生活を最優先させています……」と近況を知人から伝え聞いておりました。

公衆道徳を弁えない不法集団の鳥見人たちの態度に困っている農家の人たちに代わって、「探鳥会という言葉に世に広めた故中西悟堂氏の精神にたちかえり、地域の自然や人々の生活との関わりを大切にするバードウォッチングとなるよう、厳しいマナーの啓蒙に取り組んでほしい……」と強く訴えていらっしやいました。

自然の仲間である鳥や動物や植物の「いのち」を大切にする心を先生は態度で示してくださいました。



# 西村健一先生を悼んで

事務局

全国愛鳥教育研究会の理事を永年お務めいただき  
おりました西村健一先生が、本年2月3日にご逝  
去されました。

西村先生は、当研究会が1980年5月に設立され  
る際、その発起人として名を連ねていただき、その  
後一貫して今日まで、理事として会の活動にご参画

をいただきました。特に地元・静岡県における愛鳥  
教育普及活動の功績は、誠に顕著であられました。

ここに、永年にわたるご尽力に対し、改めて深く  
感謝の意を表しますとともに、先生のご冥福を心より  
お祈り申し上げます。

## 編集後記

編集が遅れましたことをお詫び申し上げます。  
平成9年度最終号をお届けします。

平成10年2月と3月に、本会理事である西村健  
一先生と柳沢信雄先生が相次いでお亡くなりにな  
りました。これまでのご尽力に改めて感謝申し上げ  
ると共に、謹んで哀悼の意を表します。

今回の特集「宿泊型自然教室」では、各方面で積  
極的に取り組んでいらっしゃる方々に、実践報告  
としてご執筆いただきました。

キャンプ＝キャンプファイア、飯盒炊さんの思  
考パターンパターンを脱却するには、環境教育の  
視点からの見直しが不可欠です。それは、自然観察  
や自然体験の重要性を再認識することでもありま  
す。

また、学校教育の現場での取り組みはもちろん  
のこと、社会教育の場面でも、今後ますますこの視  
点が重要になっていくことと思います。

小中学校の週5日制実施時期が確実にになった今、  
学校・家庭・社会のそれぞれの領域で、これまでの  
概念や思考方法の見直しと、新たな実践が求めら  
れていると言えましょう。

平成10年度の事業計画については、次号でお知  
らせしますが、常務理事会で議論をし検討を続け  
て参りました。

その結果、これまでの年2回〔夏期・冬期〕の研  
修会のあり方を見直し、回数を増やし、フィールド

や対象を広げると共に、指導法の研修も含めて取り  
組むことにしました。

その第1回目の取り組みがP75～76でご案内し  
ている「夏期野鳥観察会」です。

場所は「谷津干潟自然観察センター・谷津干潟」  
ですが、本会の会員だけでなく自然観察センターに  
いらした一般の方々にも呼びかけ、初心者対象の指  
導も試みます。年齢に関係ありませんので、父母や  
同伴者がいれば子どもの参加も可です。

編集の遅れのため、案内が直前となってしまいま  
したが、各方面にもお声をかけていただき、ご都合  
がつく方は、奮ってご参加ください。

今後、上野公園不忍池や多摩川（関戸橋）などで  
時期を変えて実施する予定でいます。会員の方々か  
らのご意見やご希望をお待ちしております。

(染谷)

## 愛鳥教育 No.54

平成10(1998)年7月31日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-5 新宿土地建物第11ビル5F (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-3225-3590
FAX	03-3225-3593
会費	3,000円
郵便振替	00180-7-12442
印刷所	祐文社



## 愛鳥クイズ

### 【前回の問題】

次の中から仲間はずれの鳥をさがしましょう。( )内はヒントです。

1. コサギ・ダイサギ・ゴイサイ・チュウサギ・アマサギ (足指の色)
2. ホトトギス・トラフズク・アカゲラ・ヒバリ (足指の形)
3. マガモ・カルガモ・オナガガモ・オシドリ (足の色)
4. キジ・ジョウビタキ・コクムドリ・ハシブトガラス (雌雄の差)
5. セイタカシギ・ハマシギ・スズガモ・ウミネコ・マナヅル (頭搔き)

### 【前回の解答】

1. コサギ。他の鳥の足指は黒いが、コサギの足指は黄色い。
2. ヒバリ。ヒバリは前に3本後ろに1本だが、他の3種は前に2本後ろに2本という形になっている。
3. オナガガモ。オナガガモの足は黒いが、他の3種はオレンジ色の足をしている。
4. ハシブトガラス。ハシブトガラス以外の3種の雌雄は色合いが異なり、オスは派手な色をしている。ハシブトガラスの雌雄の違いは、見た目では分からない。
5. セイタカシギ。セイタカシギは間接頭搔きだが、他の4種は直接頭搔きをする。チドリは間接でシギは直接だが、セイタカシギ類は間接で頭を搔く。

### 【今回の問題】

今回は、子育てや巣作りについての問題です。

1. 日本で子育てをする鳥の中で、お父さんがすべて面倒をみるのは、ミフウズラとあともう一つ何でしょう。(ヒント：なぜかこの種の鳥は雄より雌のほうが派手なのです。)
2. 日本で子育てをする多くの鳥は雄も雌も雛に餌をやりませう。しかし、中には雄はひたすら鳴き続け、子どもの面倒をみない鳥もいます。それは次のどれでしょう。  
①ツバメ ②ウグイス ③スズメ ④キジバト ⑤ハシボソガラス
3. 雄と雌が協力して巣を作る鳥もいれば、雄はなわばり確保のために鳴き続けたり、雌のボディガードをしたりして、メスが一羽で巣を作り続ける種類もあります。雄と雌が協力して巣作りをするのは、次のどれでしょう。  
①キジバト ②シジュウカラ ③ツバメ ④スズメ ⑤ムクドリ
4. 鳥の中には、生まれるとすぐに歩き出せる種類もあれば、赤裸で目もあいていない種類もあります。次の中で、生まれるとすぐに歩き出す鳥はどれでしょう。二つ選びませう。  
①キジ ②カワセミ ③ヒバリ ④カルガモ ⑤トビ
5. 日本で巣箱を使って子育てをする鳥は20数種類です。では、巣箱を使ったことがない鳥は次のどれでしょう。  
①フクロウ ②カワガラス ③オオルリ ④オナガ ⑤キジバト